

山梨県塩山市

西田遺跡

第1次発掘調査報告書

1978. 3

山梨県教育委員会

山梨県塩山市

西田遺跡

—第1次発掘調査報告書—

山梨県教育委員会

序 文

塩山市街の交通混雑の緩和のため、主要地方道・甲府青梅線のバイパス建設工事に先立ち実施した塩山市西田遺跡の発掘調査は、弥生時代の堅穴住居址1軒、古墳時代前期の堅穴住居址7軒と同時代の方形周溝墓5基、奈良時代の堅穴住居址1軒など、多くの調査成果を得て終了することができました。特にこれまで県内では調査する機会に恵まれなかった弥生時代の堅穴住居址が調査できたこと、昭和49年に勝沼バイパス建設予定地内の田村遺跡で発見されて以来、遺跡としては2箇所目で5基の方形周溝墓が確認され、この期の集落との関係が少しであるが判明されたこと、これまで奈良時代の出土遺物として比較的乏しかったが、良好なセットが得られたことなど、喜ぶべきものがあります。少しでも今後県内の、これらの時代の解明の糸口となれば幸いです。

皆様には、一方ならぬご尽力とご協力をいただきましたことに対し、深堪なる謝意を表します。

昭和53年3月31日

山梨県教育委員会

教育長 丸 茂 高 男

例　　言

1. 本書は昭和52年4月24日より7月25日までの93日間にわたって発掘調査された。主要地方道甲府・青梅線の山梨県塩山市大字熊野字西田から同市大字西広門田字東田地内にかけて所在する西田遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は山梨県の委託を受けた山梨県遺跡調査団が実施した。
3. 本調査の調査組織は、別に示すとおりである。
4. 図面のトレースは、山崎、坂本、三浦か行い、本書の執筆はそれぞれ文末に文責を記した。なお、土壌出土の縄文式土器については、特に米田明訓氏の御協力を得た。
5. 本書の編集は山崎が担当した。
6. 本遺跡の資料は、山梨県教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1. 本遺跡の発掘区は北からA区、B区、C区、D区、E区とした。
2. 住居址・掘立柱建物址・方形周溝墓・溝状遺構の実測図の縮尺は原則として $\frac{1}{100}$ 、土壌の実測図の縮尺は $\frac{1}{200}$ である。
3. 弦生式土器・土師式土器・須恵器の実測図は $\frac{1}{10}$ 、縄文式土器の実測図は $\frac{1}{5}$ 、縄文式土器の拓本図は $\frac{1}{2}$ 、石器の実測図は $\frac{1}{2}$ 及び現寸大とした。
4. 土器実測図において使用したドットのスクリーントーンは、赤色塗彩を示している。
5. 遺構平面図におけるドットのスクリーントーンは、焼土、地床炉及びカマドを表わす。
6. 水系レベルは、原則として各グリッドごとに統一を行った。
7. 遺物分布図の記号は次のとおりである。

●土器　　○碟　　□石器

調査組織

調査団長 井出佐重（山梨県遺跡調査団長）

調査担当者 山崎金夫（県教委文化課）

調査員 板本美夫（日本考古学協会員）

調査補助員

佐野勝広、河合英夫、野中和夫、内田聰司、黒田 正、鈴木敏中、山本茂樹、三浦恭裕、
小幡早苗、小野沢弘子、多田悦子（日本大学）、藤田 豊、石井忠行、品川裕昭（駒沢大学）、
五十嵐秀、茂木忠行、衛藤恭丞（国士館大学）、室伏 徹、矢崎順子、加藤史江、町田泰子、
(山梨大学)、北村恵利（お茶水女子大学）、古屋房子

作業員

日原喜昭、松永公博、窪川金由、土橋静、山下けい子、樋口澄江、大森ふ志の、古屋久
子、土橋 貢、塙田うめの、反田つぎ子、反田三千枝、山下かつ、山下貴美子、船沢文子、
天野みつ代、山下好子、佐藤けき志、雨宮貞子、藤田みち子、樋口綾、町田美恵、町田利永
・町田幹人、堀内瑞也、大森忠義、反田光、町田益円、岸本陽子、高野英子、中川栄祐、中
川かね子、関本てる江、飯島絹子、依川けさ子、網倉征子、向山マサエ

後藤薫、稻垣信吾、門馬直、後藤理佳、高野良彦、鈴木繁保、北村敏之、藤森佳治、正木友
広、酒井利税、杉原常男、水沢義治、舛田正人、与那覇正人、山本登志郎、中村芳文、青木
嘉利、笠井裕昭、村中聰、市村真、内藤浩史、山本弘二、鈴木敏正（山梨学院大学）

竹田久子、久保川重樹、坂巻龍馬、崔崑規、三井彰、武井健、望月勝彦、三森鉄治、竹内
太、宮本光正、石原清和、佐山健司、藤川美智雄、佐野久、阿知波則保、入保博嗣、伊藤友
幸、山本哲矢、桜井靖雄、鈴木康司、井上智裕、栗田昌弘、松本正一、落合和仁、伊藤寿郎
本間秀樹、神田雄一、新海孝、鳴津明彦、柴谷幸秀、望月暁、中沢正人、牛込幸治、三島康
造、伊藤裕樹、松山公彦、倉橋政人、青木秀則、阿部雅彦、望月秀雄、早川誠、高橋正光、
池田均、矢嶋昭、高山拓治、青建一、伊藤清則（山梨大学）

本文目次

序 文	
例 言	
凡 例	
本文目次	
挿図目次	
付表目次	
図版目次	
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の環境	1
1. 遺跡の位置と自然環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	5
III 層 序	5
IV 発掘調査の経過	6
V 遺構と遺物	9
1. A区第1号住居址と出土遺物	9
2. B区第2号住居址と出土遺物	14
3. C区第3号住居址と出土遺物	21
4. C区第4号住居址と出土遺物	27
5. C区第5号住居址と出土遺物	29
6. C区第6号住居址と出土遺物	33
7. C区第7号住居址と出土遺物	35
8. C区第8号住居址と出土遺物	37
9. D区第9号住居址と出土遺物	38
10. C区掘立柱建物址	41
11. A区第1号方形周溝墓と出土遺物	42
12. A区第2号方形周溝墓と出土遺物	54
13. C区第3号方形周溝墓と出土遺物	56
14. C区第4号方形周溝墓と出土遺物	59
15. C区第5号方形周溝墓	67
16. C区第1号溝状遺構と出土遺物	68
17. C区第2号溝状遺構と出土遺物	77

18. B区第3,4,5号溝状遺構と出土遺物	80
19. B区第6号溝状遺構	82
20. A区第7号溝状遺構	82
21. C区第1号土壤と出土遺物	84
22. C区第2号土壤と出土遺物	87
23. B区第3号土壤と出土遺物	88
24. B区第4号土壤と出土遺物	88
25. その他の出土遺物	89
(1) 網文時代の遺物	89
(2) 古墳時代後期の遺物	91
(3) 平安時代の遺物	93
(4) その他	94
VII 西田遺跡におけるまとめと若干の考察	95
1. 住居址について	95
2. 五領期集落址の様相	96
3. 方形周溝墓について	97
4. 遺物について	100
(1) 五領式土器について	100
(2) 真間式土器について	105
VIII おわりに	106

挿図目次

第 1 図	西田遺跡位置図	2
第 2 図	西田遺跡グリット及びトレンチ設定図	3
第 3 図	西田遺跡層序模式図	6
第 4 図	西田遺跡の遺構検出図	7
第 5 図	A 区第 1 号住居址実測図	10
第 6 図	A 区第 1 号住居址竪溝穴とその付近張床セクション図	11
第 7 図	A 区第 1 号住居址地床炉	11
第 8 図	A 区第 1 号住居址弥生式土器出土図	11
第 9 図	A 区第 1 号住居址出土遺物	12
第 10 図	B 区第 2 号住居址実測図	14
第 11 図	B 区第 2 号住居址遺物出土図	15
第 12 図	B 区第 2 号住居址床面遺物出土図	16
第 13 図	B 区第 2 号住居址出土遺物	18
第 14 図	C 区第 3 号住居址実測図	22
第 15 図	C 区第 3 号住居址地床炉セクション図	22
第 16 図	C 区第 3 号住居址遺物出土図	23
第 17 図	C 区第 3 号住居址床面遺物出土図	24
第 18 図	C 区第 3 号住居址出土遺物	25
第 19 図	C 区第 4 号住居址実測図	27
第 20 図	C 区第 4 号住居址出土遺物	28
第 21 図	C 区第 5 号住居址実測図	29
第 22 図	C 区第 5 号住居址カマドセクション図	29
第 23 図	C 区第 5 号住居址遺物出土図	30
第 24 図	C 区第 5 号住居址床面遺物出土図	30
第 25 図	C 区第 5 号住居址出土遺物	31
第 26 図	C 区第 6 号住居址実測図	33
第 27 図	C 区第 6 号住居址出土遺物	34
第 28 図	C 区第 7 号住居址実測図	35
第 29 図	C 区第 7 号住居址出土遺物	36
第 30 図	C 区第 8 号住居址実測図	37
第 31 図	C 区第 8 号住居址地床炉セクション図	38

第 32 図	C区第8号住居址出土遺物	38
第 33 図	D区第9号住居址実測図	39
第 34 図	D区第9号住居址出土遺物	40
第 35 図	C区掘立柱建物址実測図	41
第 36 図	A区第1号方形周溝墓実測図	42
第 37 図	A区第1号方形周溝墓主体部セクション図	43
第 38 図	A区第1号方形周溝墓遺物出土図	45
第 39 図	A区第1号方形周溝墓周溝内覆土上部遺物出土状況図	47
第40-1図	A区第1号方形周溝墓出土遺物	49
第40-2図	同 上	50
第 41 図	A区第2号方形周溝墓実測図	55
第 42 図	A区第2号方形周溝墓出土遺物	55
第 43 図	C区第3号方形周溝墓実測図	57
第 44 図	C区第3号方形周溝墓西溝外土壤	57
第 45 図	C区第3号方形周溝墓出土遺物	58
第 46 図	C区第4号方形周溝墓実測図	59
第 47 図	C区第4号方形周溝墓遺物出土図	60
第 48 図	C区第4号方形周溝墓東溝外土壤	61
第 49 図	C区第4号方形周溝墓出土遺物	62
第 50 図	C区第4号方形周溝墓東溝外土壤出土遺物	67
第 51 図	C区第5号方形周溝墓実測図	67
第 52 図	C区第1,2号溝状遺構実測図	68
第 53 図	C区第1,2号溝状遺構遺物出土図	69
第54-1図	C区第1号溝状遺構出土遺物	70
第54-2図	C区第1号溝状遺構出土遺物	72
第 55 図	C区第2号溝状遺構出土遺物	78
第 56 図	B区第3,4,5号溝状遺構実測図	80
第 57 図	B区第3,4号溝状遺構出土遺物	81
第 58 図	B区第6号溝状遺構実測図	82
第 59 図	A区第7号溝状遺構実測図	83
第 60 図	C区第1号土壤	84
第 61 図	C区第1号土壤	85
第 62 図	C区第2号土壤出土遺物	88
第 63 図	C区第3号土壤	88

第 64 図	B区第4号土壤	88
第 65 図	その他出土遺物 1	90
第 66 図	その他出土遺物 2	92
第 67 図	その他出土遺物 3	93

付 表 目 次

第 1 表	A区第1号住居址出土土器一覧表	13
第 2 表	B区第2号住居址出土土器一覧表	20
第 3 表	C区第3号住居址出土土器一覧表	26
第 4 表	C区第4号住居址出土土器一覧表	28
第 5 表	C区第5号住居址出土土器一覧表	32
第 6 表	C区第6号住居址出土土器一覧表	34
第 7 表	C区第7号住居址出土土器一覧表	36
第 8 表	C区第8号住居址出土土器一覧表	38
第 9 表	D区第9号住居址出土土器一覧表	40
第 10 表	A区第1号方形周溝墓出土土器一覧表	52
第 11 図	A区第2号方形周溝墓出土土器一覧表	56
第 12 図	C区第3号方形周溝墓出土土器一覧表	58
第 13 図	C区第4号方形周溝墓出土土器一覧表	64
第 14 表	C区第4号方形周溝墓出土土器一覧表	67
第 15 表	C区第1号溝状造構出土土器一覧表	74
第 16 表	C区第2号溝状造構出土土器一覧表	79
第 17 表	B区第3号溝状造構出土土器一覧表	81
第 18 表	古墳時代後期・平安時代出土土器一覧表	93
第 19 表	西田遺跡住居址一覧表	95
第 20 表	西田遺跡方形周溝墓一覧表	98

図版目次

- 図版 1 (1) 西田遺跡遠景
(2) 西田遺跡 A, B 区
- 図版 2 (1) 西田遺跡 C 区
(2) 西田遺跡 D, E 区
- 図版 3 (1) 西田遺跡 E 区
(2) A 区第 1 号住居址
- 図版 4 (1) A 区第 1 号住居址, 貯蔵穴と柱穴
(2) A 区第 1 号住居址, 貯蔵穴からの弥生式土器出土状況
(3) A 区第 1 号住居址 ピット
- 図版 5 (1) B 区第 2 号住居址 (南方より)
(2) 同 上 (北方より)
- 図版 6 (1) B 区第 2 号住居址 土師器出土状況
(2) 同 上
(3) 同 上
- 図版 7 (1) C 区第 3 号住居址
(2) C 区第 3 号住居址 地床炉
- 図版 8 (1) C 区第 3 号住居址 土師器出土状況
(2) 同 上
(3) C 区第 3 号住居址 石包丁出土状況
- 図版 9 (1) C 区第 4 号住居址
(2) C 区第 4 号住居址 地床炉
- 図版 10 (1) C 区第 5 号住居址
(2) C 区第 5 号住居址 カマド
セクション
- 図版 11 (1) C 区第 5 号住居址 土師器出土状況
(2) C 区第 5 号住居址 柱穴からの土師器出土状況
(3) C 区第 5 号住居址 土製縫縫車出土状況
- 図版 12 (1) C 区第 5 号住居址 カマド 内支柱石
(2) C 区第 6 号住居址
- 図版 13 (1) C 区第 6 号住居址 土師器出土状況

- (2) C区第6号住居址張床状況（第7号住居址上部）
- 図版14 (1) C区第7号住居址
(2) C区第8号住居址
- 図版15 (1) C区第8号住居址地床炉
(2) D区第9号住居址
- 図版16 (1) C区掘立柱建物址
(2) A区第1号方形周溝墓（南方から）
- 図版17 (1) A区第1号方形周溝墓（北方から）
(2) A区第1号方形周溝墓主体部落込み状況
- 図版18 (1) A区第1号方形周溝墓東溝
(1) 同 上 北 溝
(3) 同 上 南 溝
- 図版19 (1) A区第1号方形周溝墓東溝土師器出土状況
(2) 同 上
(3) A区第1号方形周溝墓南溝コーナー土師器出土状況
- 図版20 (1) A区第2号方形周溝墓（南方から）
(2) 同 上（西方から）
- 図版21 (1) A区第2号方形周溝墓南溝
(2) C区第3号方形周溝墓セクション
(3) C区第3号方形周溝墓及び第4号方形周溝墓
- 図版22 (1) C区第3号方形周溝墓
(2) C区第3号方形周溝墓西溝外土壤
- 図版23 (1) C区第3号方形周溝墓西溝及び土壤
(2) C区第3号方形周溝墓セクション
(3) C区第3号方形周溝墓及び第4号方形周溝墓
- 図版24 (1) C区第3号方形周溝墓西溝セクション
(2) C区第3号方形周溝墓北溝土師器出土状況
(3) C区第3号方形周溝墓西溝土師器出土状況
- 図版25 (1) C区第4号方形周溝墓
(2) C区第4号方形周溝墓東溝外土壤
- 図版26 (1) C区第4号方形周溝墓東溝
(2) 同 上 南 溝
(3) C区第4号方形周溝墓東溝外土壤セクション
- 図版27 (1) C区第4号方形周溝墓南溝内土師器出土状況

- (2) C区第5号方形周溝墓
- 図版28 (1) A区第1・第2号方形周溝墓
(2) C区第3・第4・第5号方形周溝墓
- 図版29 (1) C区第1号溝状遺構
(2) C区第1号溝状遺構土師器出土状況
- 図版30 (1) C区第1号溝状遺構土師器出土状況
(2) 同 上
(3) 同 上
- 図版31 (1) C区第2号溝状遺構と土師器出土状況
(2) B区第3号溝状遺構
- 図版32 (1) A区第6号溝状遺構
(2) B区第7号溝状遺構
- 図版33 (1) A.B区旧小河川砂層堆積地（その1）
(2) B区旧河川砂層堆積地（その2）
- 図版34 (1) C区第1号土壤
(2) C区第2号土壤
- 図版35 A区第1号住居址出土遺物
- 図版36 B区第2号住居址出土遺物
- 図版37 C区第3号住居址出土遺物
- 図版38 C区第5号住居址出土遺物
- 図版39 A区第1号方形周溝墓出土遺物
- 図版40 同 上
- 図版41 (1) C区第3号方形周溝墓出土遺物
(2) C区第4号方形周溝墓出土遺物
(3) C区第1号溝状遺構出土遺物
- 図版42 (1) C区第1号溝状遺構出土遺物
(2) C区第1号土壤出土遺物
- 図版43 (1) その他出土遺物（縄文式土器）
(2) 同 上（土師器等）
- 図版44 (1) 同 上（石器）

I 調査に至る経緯

甲府盆地の東部一帯は果樹栽培の盛んな地域で、特に葡萄の栽培が目立っている。秋の観光シーズンになると多くの葡萄狩をはじめとして観光客の車で混雑する。盆地の東にある塩山市は市街の道幅が狭く交通麻痺がしばしば起っていた。このような交通混雑の緩和のため、主要地方道甲府青梅線の路線幅 12 m のバイパス建設工事が計画された。工事は路線の北側は塩山市で、南側は山梨県で担当施行することになった。市担当区域の路線内には「町田遺跡」がかかり、市教育委員会が昭和 52 年 1 月から 2 月にかけて発掘調査を実施した。県担当区域については県土木部から県教育委員会にその計画が昭和 52 年 2 月に知られ、県教育委員会、市教育委員会、塩山土木事務所の三者による現地踏査の結果、塩山市大字熊野字西田から同市大字西広門田字東田地内の路線内に遺物が散乱していることが判明した。3 月にはいり、県教育委員会が塩山土木事務所立合いのもとに試掘調査の結果、古墳時代前期と平安時代の土師器が出土し遺跡のあることが確認された。その後、県教育委員会と県土木部の路線内の遺跡について協議の結果、昭和 52 年度に発掘調査を実施して記録保存をしていく方針とし、発掘調査は山梨県遺跡調査団が当ることになったものである。遺跡の名称は昭和 51 年度に実施された笛吹川沿岸土地改良事業地域内遺跡分布調査の台帳をもとに「西田遺跡」とすることになった。

昭和 52 年 4 月 23 日に県土木部と山梨県遺跡調査団との委託契約書が取り交わされ、4 月 24 日から 6 月末日までの調査期間とし、調査が開始された。途中折しもこの地方は農繁期で作業員の確保ができず、さらに期間を 25 日間延長し調査を実施した。

II 遺跡の環境

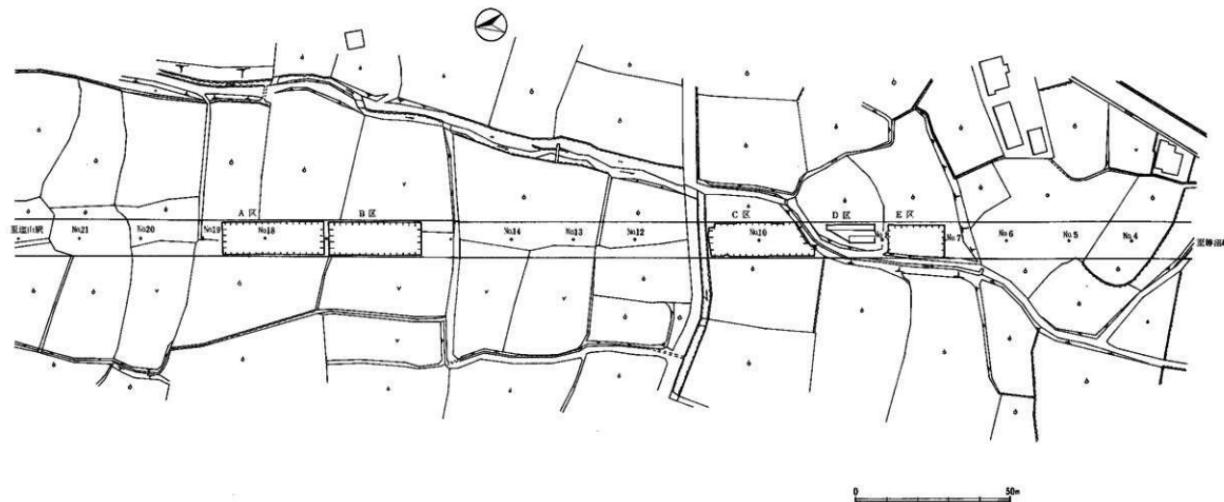
1. 遺跡の位置と自然環境

西田遺跡は国鉄中央線塩山駅から南南西の方向約 2 km のところに位置しており、秩父山系の大菩薩嶺、柳沢峠から源を発する重川によって作られた右岸の沖積地で、この沖積地は塩山市上於曾付近から笛吹川との合流点の山梨市大野付近まで続いている。また左岸は塩山市から勝沼町にかけて台地が形成されている。西田遺跡は重川右岸の沖積地上にあり、標高約 364 m 前後で南北にやや長い微高地に営まれた縄文時代前期から平安時代にわたっての遺跡である。現在の重川は西田遺跡のある微高地を巡るように流れ、この付近はかって自然の堤防の役目を果していたことがうかがえる。遺跡の東側には幅約 3 m ほどの小川が北から南へ流れ、遺跡中央部やや南より付近で急に西に流れを変えている。この小川を境にして、遺跡の北側を塩山市熊野字西田と同市字西広門田字東田との境界を引いている。さらに小川は遺跡西側を流れ塩川と合流し、重川へ流れ込んでいる。現在遺跡西側には市道が南北に走っているが、その付近は僅かであるが低くなつており凹地状をなして隣接する芦原田遺跡との境界線を引くことができる。その芦原田遺跡の西は北から南へ塩川が流れている。西田遺跡の北側は平坦地であり塩川付近まで続いているが、南側は傾斜面をもつて重川の氾濫地帯へと続いている。



第1図 西田遺跡位置図

S = $\frac{1}{25,000}$



第2図 西田遺跡グリッド及びトレンチ設定図

この付近は果樹栽培が盛んで現在は葡萄・桃の一面の果樹園になっている。

本遺跡の地表面における遺物の分布状況はあまり多くないが、農耕中土器片が発見されることが時折あったと地元民から云われている。

2. 遺跡の歴史的環境

西田遺跡のある塙山市には、過去主に重郎原遺跡、柳田遺跡、原之京鐵治遺構の発掘調査が行われ、最近では安道寺遺跡、町田遺跡も調査されている。これらのうち原之京鐵治遺構の調査を除き、何れも縄文時代中期が主体であった。この地域における遺跡の分布密度が濃くなるのは、縄文時代中期に入ってからであると考えられ、昭和51年度の分布調査の結果からもこれらのことことがうかがえる。縄文時代の遺跡は丘陵地、沖積地を問わず市内全域に分布しているが、重川左岸の丘陵上はとくに多い。

弥生時代の遺物は塙山市内でも発見されてはいるが出土資料は少く、調査もされていないが隣接の勝沼町の菱山地内から須和田期平行の土器片が出土している。

古墳時代の遺跡は、あまり確認されていないが、古墳は塙山市には、2基（何れも後期古墳）現在確認されている。隣接する勝沼町内には綿塚をはじめ、4基ほど確認されている。また同町の地蔵塚遺跡からは古墳時代前期のS字状口縁彫形土器も出土している。^{註1}

律令制時代以降はこの地域も相当開発が進んできたものと思われ、遺跡は至るところに確認されている。

この塙山市は「甲斐の鎌倉」とも云われ、熊野神社、金井加里神社、恵林寺、放光寺、向岳寺などの多くの神社及び名刹がある。このうち熊野神社は西田遺跡の北東100mのところにあり、本殿二棟は一間社隅木入春造檜皮葺で文保2年建立され、鎌倉時代の熊野造りの最古のもので、坪殿とともに国の重要文化財に指定されている。

註1 昭和51年度笛吹川沿岸土地改良事業地域内遺跡台帳 小野正文

註2 昭和52年度笛吹川沿岸土地改良事業地域内遺跡台帳 室伏 徹ほか。

III 層序

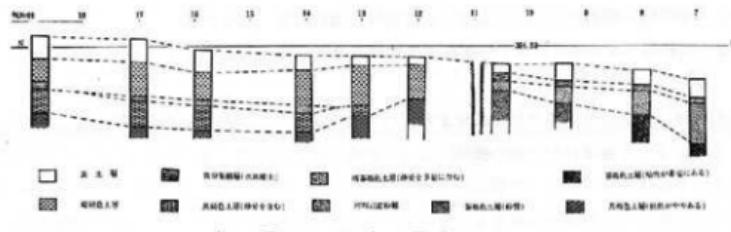
西田遺跡は南北に長い微高地上に當まれている。この地域は先の遺跡の環境の項で記した様に、重川によって運ばれた土砂の堆積によって形成された比高差のない大きな南北にやや長い台地上にさらに小河川によって削られ、微高地状を呈している。今回調査対象となった地域は北から南に僅かではあるが傾斜をもっている。このような地域であるためか層序は変化に富んでいる。この地域の土層（第3図層序模式図参照）は道路の杭ナンバーで杭No19～12、杭No11～9、杭No9～7の大きく3つに分けられる。

杭No19～12の区間は、遺構の検出面まで深く約0.8～1.4mほどある。土層は上から表土層（耕作土）～暗褐色土層（河川の氾濫砂層）～黒褐色土層（砂分を含む）～茶褐色土層となり、

表土下2mほどで厚い砂砾層になる。表土層及び暗褐色土層からは遺物は遺構面が深いためか杭No.12地点周辺を除いては比較的少ない。杭No.18~13の区間には暗褐色土層の下層に河川の氾濫による砂層が一面に覆っており。機械による表土壠削の目安にしたほどであった。また調査区域の東隅には、厚い砂の堆積層が断片的に確認されたが、おそらく旧小河川であると思われた。なおこの旧小河川と思われる下層からは五領期から鬼高窯の土器片が若干出土している。黒褐色土層(砂分を含む)は杭No.19~10地点付近まで繩文、弥生、古墳、平安時代にかけての遺物が多量に含まれていた。茶褐色土層には遺物は含まれておらず、遺構はこの層に埋り込まれ構築されていた。

杭No.11~9地点付近では第4層の茶褐色土層(砂質)は河川氾濫による第2次の堆積層である。遺構検出面までは表土下0.4m~0.8mほどある、上から表土層(耕作土)一鉄分集積層(水田の床土)一暗褐色土層(砂分を多量に含む)一茶褐色土層(砂質)となって、さらにこれより、30cmほどで、砂層になる。表土層及び鉄分集積層(水田の床土)からの遺物はそれほど多くはなかった。暗褐色土層(砂分を多量に含む)は繩文、古墳、奈良、平安時代の遺物が多く含まれていた。茶褐色土層は(砂質)は砂分が多く、遺物の検出は認められなかったが、遺構はこの層に埋り込まれ構築されていた。

杭No.9~7地点は、表土(耕作土)一鉄分集積層(水田の床土)一暗茶褐色土層(砂分を多量に含む)一茶褐色土層(粘性が非常に高い)となる。この地域も表土(耕作土)及び鉄分集積層(水田の床土)からは遺物はほとんど見られず、暗茶褐色土層(砂分を多量に含む)に至り古墳、平安時代の遺物が含まれていた。さらにその下層の茶褐色土層(粘性が非常に高い)では遺物は認められず、おそらく遺構はこの層まで埋り込まれ、構築されているものと思われる。

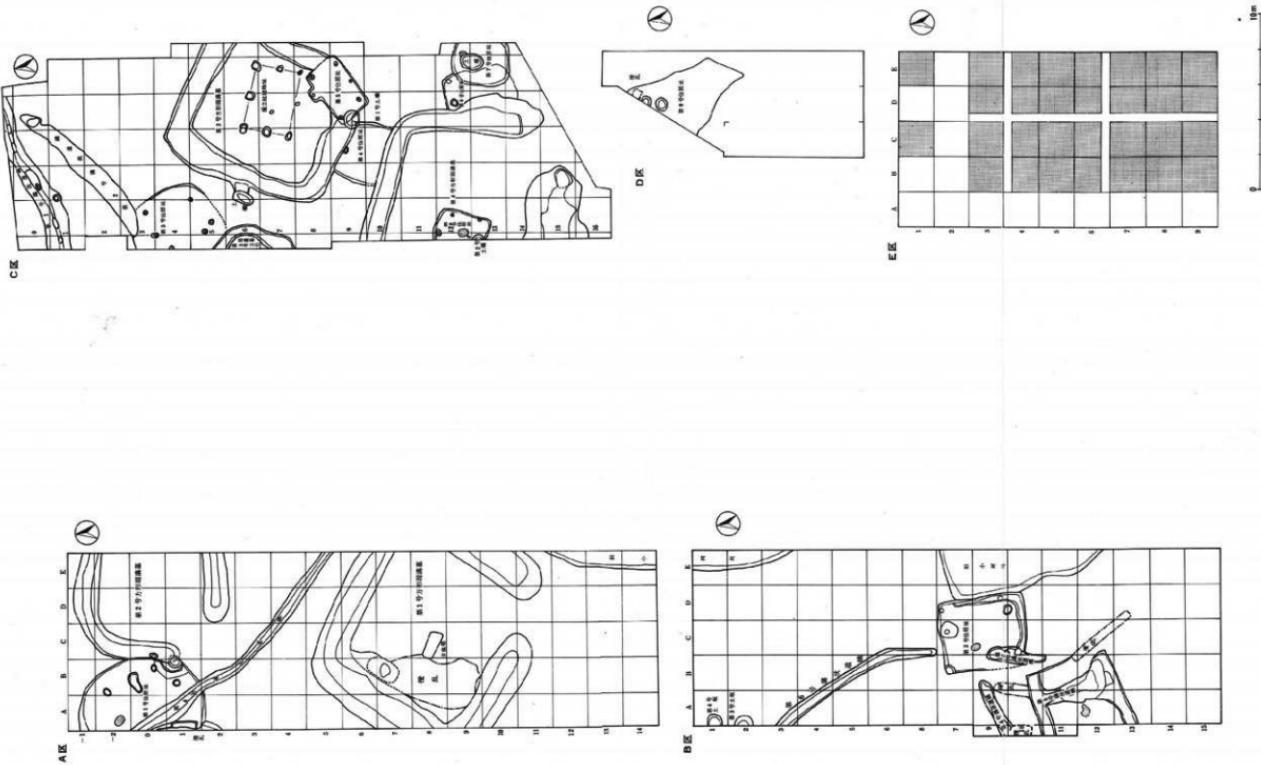


第3図 西田遺跡層序模式図

IV 発掘調査の経過

発掘調査は昭和52年4月23日に、県と遺跡調査団との間に委託契約書が取交され、4月24日

第4図 西田遺跡の遺構検出図



100m

から開始された。遺跡は南北にやや長くバイパス予定地がほぼ中央部を2つに割るかたちで計画されていた。3月の試掘の際、工事計画の図面で杭No.8地点と杭No.16地点が調査され。杭No.8地点では遺物包含層まで表土下約50cm、杭No.16地点では表土下約1mで達することが確認されていた。遺跡中央やや南よりの小川を境にして、その両側は表土から人力で掘り下げることにし、北側は1辺が1mのテストピットを掘り土層を観察し、機械力を導入することにした。テストピットの結果、杭No.12～No.14地点にかけて表土下1.7m近くまで果樹栽培のための大地返しが行われており、耕作者からも当時の状況を聞きこの区間はグリットの設定は見合せることにした。

道路の幅は12mであるが、果実の成熟期でもありできるだけ根の切断を避けることとし、横幅10mの一応グリット区域とし、必要に応じて拡張していくことにした。グリット名は北方の杭No.18+9m～No.17+1mまでをA区、杭No.16+19m～No.15+9mまでをB区、杭No.10+14m～No.9+6mまでをC区、杭No.7+18m～No.7までをE区とした。またD区は農道が切土をして通っているため、調査部分が少ないのでトレーナーを設定することとした。

発見された遺構は縄文時代土壙2、弥生時代後期の住居址1軒、古墳時代前期の住居址7軒、古墳時代前期の方形周溝墓5基、古墳時代前期の土壙2、古墳時代前期の溝状遺構5、奈良時代の住居址1軒、奈良時代の掘立柱建物址1軒、時期不明の溝状遺構2であった。

V 遺構と遺物

1. A区第1号住居址と出土遺物

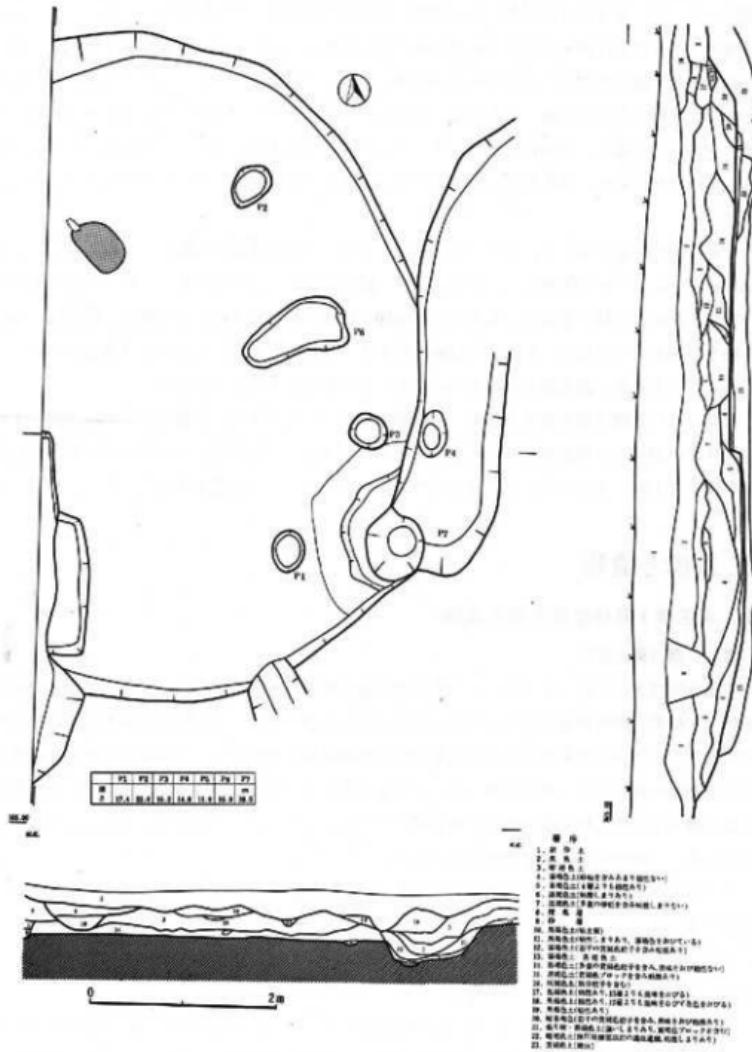
遺構(第5図)

本住居址はA区のC-1グリットで方形周溝墓の西溝の落込みを確認し、グリットを北側へ拡幅した結果方形周溝墓とともにプランを確認したものである。本住居址は弥生時代後期の竪穴住居址で、住居址の東部は古墳時代前期の方形周溝墓の西溝によって切られ、中央やや南西よりを北西から南の方向へ溝状遺構が走っているが床面までは達していない。また住居址の南部には土壙と床面を比較的古い時代(第5図のセクション図から)と思われる擾乱によって切られている。この擾乱の底部は凹凸がみられた。

住居址の平面プランは南北7.1m×東西約6.6mほどの橢円形を呈し、主軸方位はN-10°Wである。

壁高は確認面から北壁で約23cm、南壁で約20cmを測る。壁はやや外傾し残存状態はしっかりしている。

床面は平坦で、粘性の強いしまりのある黄褐色土ブロックを含む黄褐色土層を掘り込み、黄褐色ブロックを含み強いしまりのある茶褐色土を2～5cmほど張って構築している。床面の固さは、住居址中央部はより固く壁に近づくにつれ、やや軟弱気味である。

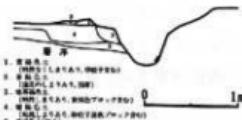


第5図 A区第1号住居址実測図

ピットは方形周溝墓の西溝内を含め6個検出されている。ピットP₁～P₅は長径40cm～50cm、短径34cm～40cmの橢円形を呈し、深さは16cm～22cmを測る。いずれも底部は平坦であった。方形周溝墓西溝内のピットP₆はその状況から本住居址のピットと考えるのが妥当と思われ、溝の構築によって上部を削られているが長径50cm、短径30cmの橢円形を呈し、深さは14.8cmを測る。これらはいずれも柱穴址と思われる。

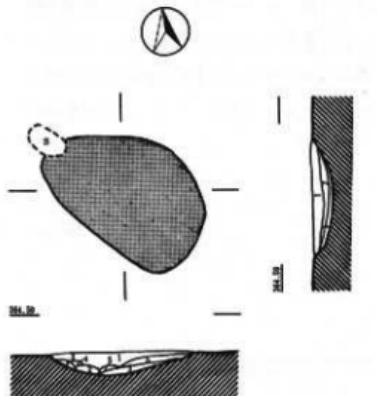
また住居址南部にピットP₇、東部にピットP₈があり、ピットP₉は西側を擾乱によって切られているが、方形を呈するものと思われ、現存するところの深さ11～12cmを掘込み、底部は平坦であった。ピットP₈は不整形で足形を呈し深さ15～17cmを掘込み底部はやや平坦であった。

貯藏穴はP₈住居址南東部隅に位置し、半分ほど上部を方



第6図 A区第1号住居址貯藏穴と

その付近張床セクション図

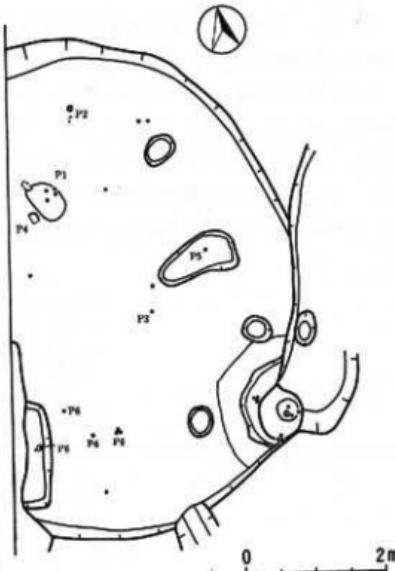


- 基 床
- 黒褐色土(燒土を少量含む)
 - (燒土を少量含み、黄褐色土をも少量含む)
 - 黄褐色土(燒土を少量含む)
 - 黄褐色土(燒土を多量に含む)
 - 燒土ブロック
 - 黑色土(瓦片を多量に含む)

0

50cm

第7図 A区第1号住居址 地床炉



第8図 A区第1号住居址弥生式土器出土図

形周溝墓の西溝に切られている。本貯藏穴は円形を呈し、周囲に凸堤区画を有する。長径65cm、短径70cm、深さは約39.5cmを測る。本貯藏穴の作りは、第6図のセクション図で見るように穴の部分を大まかに掘込み、掘った部分の土(黄褐色土)で凸堤区画を築き、粘性のある土を穴の周間に築くことによって貯藏穴の形態を整っているように見受けられた。

地床炉は第7図のとおり不整形の楕円形を呈する。地床炉の北部には枕石の抜かれた痕跡が検出され、炭化物及び焼土はレンズ状に堆積し、深さは最大で約8cmを測る。

遺物の出土状態(第8図)

本住居址の覆土上部からは古墳時代前期の土器片が若干出土し、床面近くになり弥生時代後期の土器片が少量であるが出土した。この弥生式土器の出土の状況は第8図のとおり住居址南部のピット及びその東側周辺、貯藏穴周辺、東部ピット周辺、地床炉及びその北側周辺の床面から出土している。これらは貯藏穴内の丹彩の鉢形土器を除いてはいずれも破片であった。

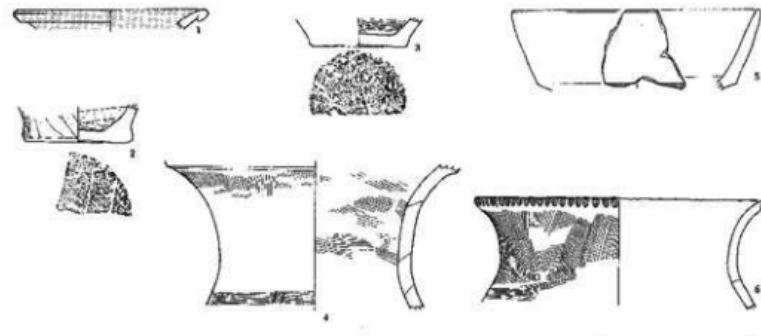
出土遺物(第9図)

本住居址から出土した弥生式土器片は総数で26点という少量であった。器種は壺、甕、鉢である。

変形土器(第9図1~5)

1は折返し口縁で、口縁部は大きく外反する。丹彩されているが大部分剥げてしまっている。調整は、内外面ともヘラミガキを行っている。地床炉内から出土した。

2は小型壺の底部で平底である。調整は、外面胴下部は縦のヘラケズリ、内面は胴下部が横の刷毛目痕を残し、底部はヘラケズリを行っている。また底部内面には丹彩された土器であったのか、丹の流れ落ちた痕がみられる。底部は木ノ葉底であるがさらに2粒の穀の圧痕が残されている。色調は外面は黄褐色を呈しており、丹は内外面ともに剥落してしまったのかその痕跡は認められない。北部の床面から出土した。



第9図 A区第1号住居址出土遺物

3は2同様小型壺で、平底である。調整は、外面胴下部は縦のヘラケズリ、内面胴下部は横のヘラケズリが行われている。木ノ葉底である。覆土中から出土した。

4は大型の壺の頸部の破片である。口縁部は複合口縁と思われる。調整は、外面は肩部が縦の刷毛目整形後、縦のヘラミガキを行っている。肩部近くの頸部に彫刻による廉状文が施されている。廉状文は櫛目を1単位3回止め押圧し5単位を施している。内面は斜め及び横の刷毛目整形後、縦のヘラミガキを行っている。地床炉西側の床面から出土した。

5は複合口縁を有する口縁部である。調整は、口縁部の外面は横のヘラミガキを行い、頸部上部は斜の刷毛目整形痕を残している。口縁部内面は横ナデを行っている。ピットP₆内底部から出土した。

変形土器（第9図6）

6は南部床面及びピットP₆内から出土した同一個体の接合資料である。頸部はゆるやかに外反し、口唇部に刷毛状工具による押圧の刻目を有する。胴部はあまり張らず胴長の型と思われる。調整は、外面は縦の刷毛目整形痕、内面は横の刷毛目整形痕を残している。

このほか凸堤区画をもつ貯蔵穴内からは、丹彩された鉢の完形が出土したが、現地での心ない者の盗難にあい図示することができなかつた。

第1表 A区第1号住居址出土土器一覧表

発掘番号	器形	口径 器高	土器の被察	器形の特徴	調 整		備考
					外 面	内 面	
1 壺	—	14.0	粘土・小砂粒を含む 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は大きく外反し、 折返し線。丹彩されているが大部分剥げて いる。	口縁部ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ	現在 口縁部 $\frac{1}{5}$ 両
2 壺	(底付)	6.5	粘土・砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	平底。頸部最大幅は胴 下位にあると思われる。	胴下部タテヘラミ ガキ	胴下位は刷毛目整 形。底部内面はヘ ラケズリ	底部に器の底底及 び木ノ葉底
3 壺	(底付)	8.0	粘土 多量の砂粒を 含む 色調 外面黒褐色 内面黄褐色 焼成 良好	平底。頸部最大幅はや や上位にあると思われる。	胴下部タテヘラケ ズリ	胴下位及び底部内 面ヘラケズリ	底部に木ノ葉底 現存 底部 $\frac{1}{4}$ 両
4 壺	—	—	粘土・砂粒・小石を 含む 色調 黄褐色 焼成 良好	大型の変形土器の頸部 で、縦の廉状文が施 される。口縁部は複合 口縁。	頸部はタテの刷毛 目整形後、タテヘ ラミガキ	口縁部ヨコナデ、 頸部はヨコ刷毛目 整形後、タテヘラ ミガキ	現存 頸部 $\frac{1}{2}$ 両
5 壺	—	18.0	粘土 精々されてい る。 色調 黄褐色 焼成 良好	複合口縁をもつ変形土 器	口縁部ヨコヘラミ ガキ及び刷毛目	口縁部ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{8}$ 両
6 壺	—	21.0	粘土 砂粒を含む 色調 外面黒褐色 内面黄褐色 焼成 良好	口唇部に刷毛状工具に よる刻目をもち、胴部 の張らない台付変形土 器。	タテの刷毛目	口縁部ヨコヘラミ ガキ	現存 頸部 $\frac{1}{2}$ 両

2. B区第2号住居址と出土遺物

遺構(第10図)

本住居址はB区に位置している。粘性のある茶褐色土層を掘り込んで構築されている。平面プランは東西約4m、南北4.8mでやや不整形の長方形を呈している。東側は本住居址より後の時期の河川の流れによって壁の一部を削取られ、南西部は第7号溝状遺構によって切られている。

本住居址の主軸方位はN-3°-Wである。壁はやや外傾し、北壁と東壁及び西壁の北部のみが確認できた。北壁の壁高は確認面から約20cmである。床面はやや軟弱であった。

周溝は東壁の中央やや北よりから南壁の側面にかけて確認できた。周溝の深さは東側がやや浅く6~12cmで、南側は10~15cmほどであった。周溝幅は東側の狭いところで10cmを測り、南東隅の広いところでは50cmであった。

ピットは第3号溝状遺構内を含め、8個検出された。ピットP₁はテラス状になり床面からの深さ60cmを測る。ピットP₂は長径65cm、短径45cm、深さ24cmを測る。ピットP₃は長径25cm、短径20cm、深さ

14cmを測る。P₄は長径

54cm、短径45cm、深さ

17cmを測る。ピットP₅

は周溝内より検出され、

長径35cm、短径28cm、

深さ13cmを測る。ピッ

トP₆~P₈までは第3号

溝状遺構内より検出さ

れているが、ピットP₆

は長径58cm、短径28cm

深さ27cm、ピットP₇は、

長径53cm、短径36cm、

深さ28.5cm、ピットP₈

は直径26cmの円形で深

さ26.5cmを測る。主柱

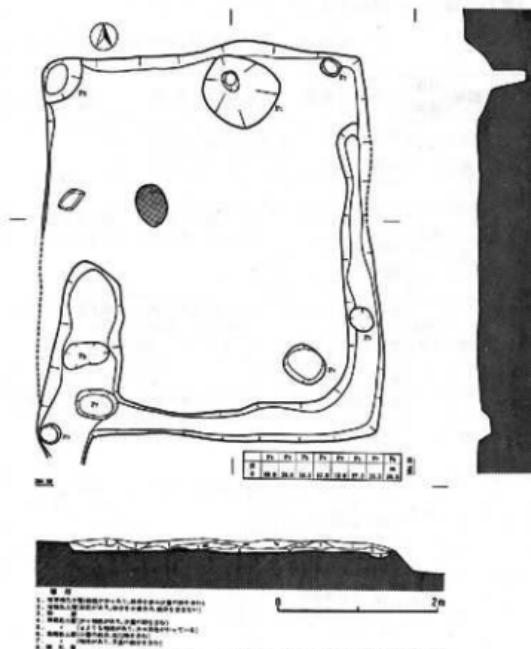
穴はピットP₁、P₃、P₄、

P₅と推定される。

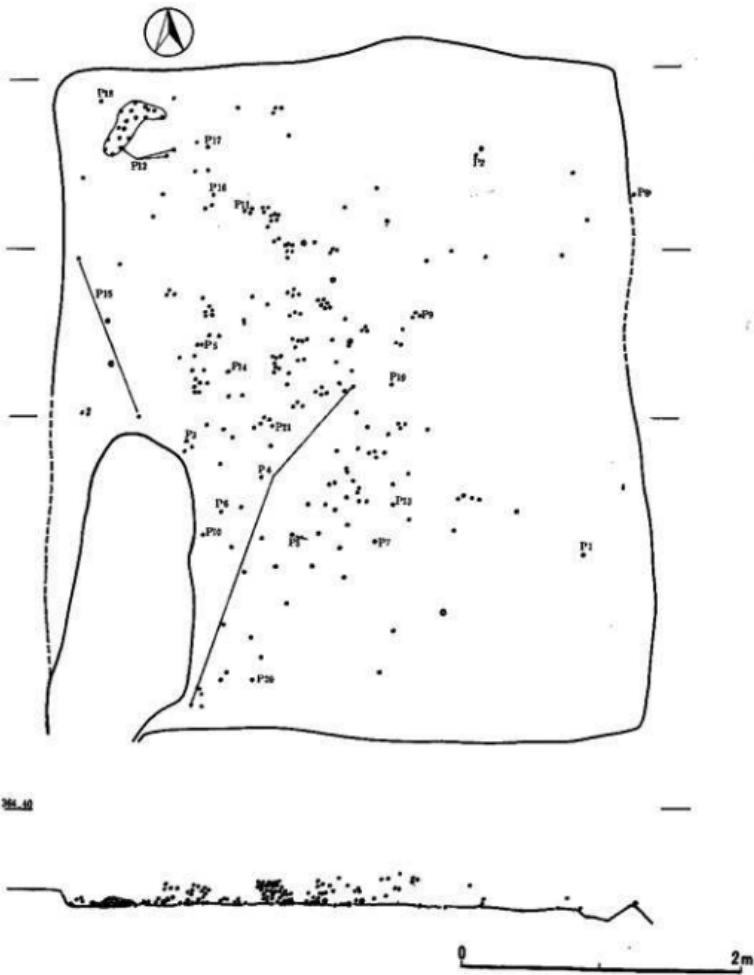
地床炉はそれとはっ

きりされるものは確認

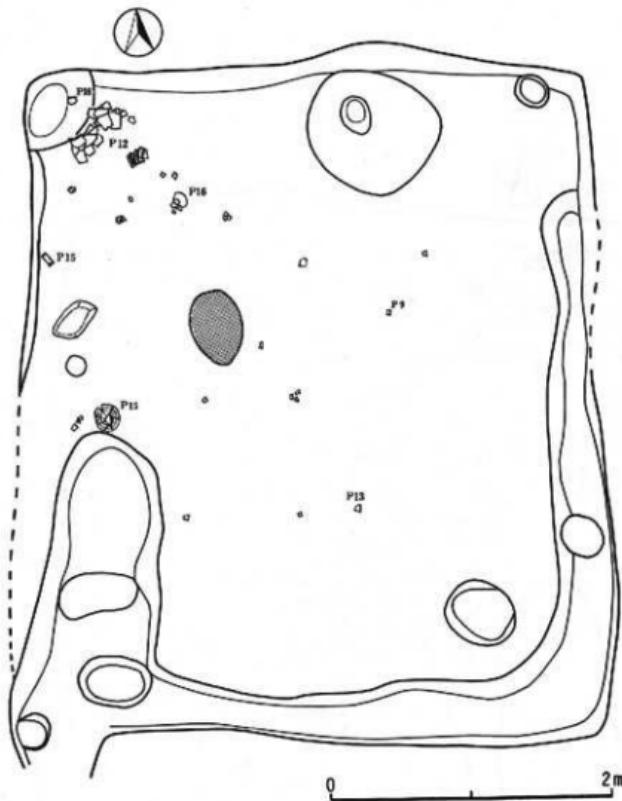
されなかつたが、本住



第10図 B区第2号住居址実測図



第11図 B区第2号住居址遺物出土図



第12図 B区第2号住居址床面遺物出土図

住居中央やや西に近いところに焼土の堆積が認められた。床面までは掘込んではいなかったが、焼土は床面上まで堆積していた。またこの焼土の西には長径37cm、短径20cmの人頭大の扁平な石が置かれていた。

遺物の出土状態（第11図、12図）

本住居址からの出土遺物は比較的多く出土した。とくに住居址内西半分に多く集中していた。ピットP2内の覆土中からは小型壺形土器が、またその周辺からはS字状口縁壺形土器が押漬されたような状態で出土し、また住居址中央西よりからは高環形土器が床面に壊部を伏せたような状態で出土した。

また覆土中には炭化物が散在していた。

出土遺物（第13図）

本住居址から出土した土器は総数で200余点であった。器種は壺、瓶、甕、高杯、壺、器台である。

壺形土器（第13図1～8）

1は小型壺で口縁部は渦曲しながらやや外反する。調整は、外面は口縁部が2段階に継のヘラミガキを行い、内面は横のヘラミガキを行っている。内外面ともに丹彩されている。南東部床面から出土した。

2は広口の口縁をもち鉢形土器としたほうがよいかも知れないが、口縁部は「く」の字状に外反する。調整は、外面は口縁部から胴上部にかけて2段階に継のヘラミガキを行い、頭部付近は横に2条へラミガキを行っている。内面は横のヘラミガキを行っている。北東部床面から出土した。

3は頭部から口縁部にかけて緩やかに外反する。調整は、口縁部内外面は横ナデを行っている。肩部外面以下は継の刷毛目整形痕を残している。中央西寄りの床面から出土した。

4は3と同様であるが、頭部はやや極端に屈曲する。調整は、口縁部内外面は横ナデを行い、外面の肩部以下は継の刷毛目整形痕を残している。中央西寄りの床面から出土した。

5は口縁部が直立し、肩部が大きく張る並形土器の資料である。調整は、口縁部は内外面ともに横ナデを行い、外側肩部以下は刷毛目整形痕を部分的に残す。南部の床面から出土した。

6は口縁部は有段口縁でラッパ状に開く。頭部は極端に屈曲する。調整は内外面ともに横ナデされている。南西部から出土した。

7は壺の胴下部から底部の資料である。調整は、外面は胴下部は継の浅い僅なヘラミガキを行い、底部は器肉を薄くする意図のヘラケズリを行っている。内面は胴下部から底部にかけて刷毛目整形痕を残している。東壁の上部から出土している。

8は7と同様継の胴下部から底部の資料である。調整は、外面は胴下部が細く浅いヘラケズリが行われ、内面は胴下部から底部にかけて刷毛目整形痕を残している。底は平底でやや凹状を呈し、ヘラケズリが行われている。中央部やや東寄りの床面から出土した。

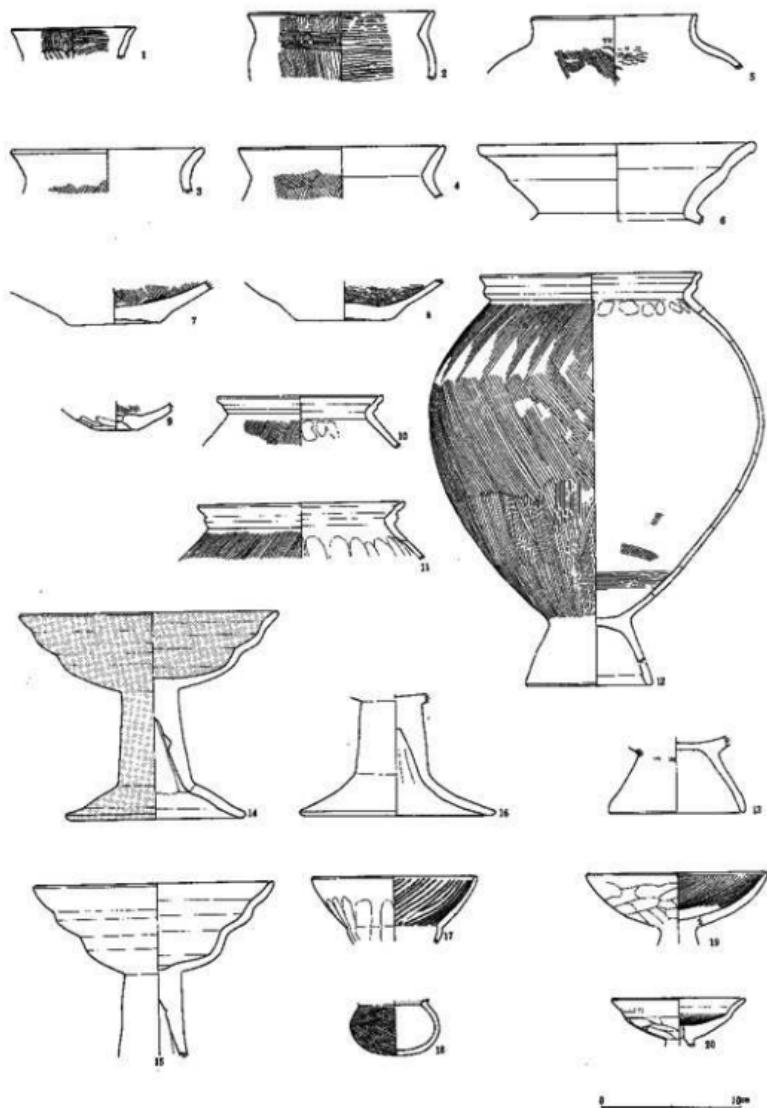
瓶形土器（第13図9）

9は底部に直径8mmほどの孔が空てあり、鉢形の瓶である。調整は、底部近くは下から上へヘラケズリが行われ、内面は刷毛目整形痕を残している。中央やや東寄りの覆土中から出土した。

甕形土器（第13図10～13）

10は口縁部から肩部にかけてのS字状口縁台付甕の資料である。口径は推計で12cmである。調整は、口縁部内外面とも横ナデが行われ、肩部内面は指頭による押圧痕を残す。南西部の床面から出土した。

11は10と同様口縁部から肩部にかけてのS字状口縁台付甕の資料で口径は推計で15cmほど



第13図 B区第2号住居址出土遺物

である。調整は、口縁部内外面ともに横ナデを行い、肩部外面は縦の刷毛目整形痕を残す。内面は肩部に指頭による押圧痕を残す。北西部の床面から出土した。

12は台部の下部を欠くかほは完形のS字状口縁裏の資料である。口径は16cm、高さは推計で29.5cmほどである。胴部最大幅は胴中位よりやや上にあり、肩部はあまり張らない。調整は、口縁部内外面とも横ナデを行い、肩部外面は右上から左下斜めに施された刷毛目整形痕を残す。胴部外面は3段階に縦の刷毛目整形痕を残している。肩部内面は指頭による押圧痕が認められる。胴部内面は刷毛目整形後指頭によるナデを行っているが、胴下部には横に一条ほど明瞭な刷毛目整形痕が残る。台部は内外面とも指頭によるナデを行っている。器面外面には多量のススが付着していた。北西部ピットP₂周辺の床面に口縁部を北に向け、押漬された状態で出土した。

13はS字状口縁台付裏の台部で、底部の器肉は薄い。台部はやや内湾する。調整は内外面とも刷毛目整形後、指頭による横ナデを行っている。中央やや南寄りの床面から出土した。

高坏形土器（第13図14~16）

14は坏部は湾曲し稜をもち、脚部は柱状で裾部が急激に開く。坏部口径は18.4cm、器高は15.0cmを測る。調整は、坏部は内外面ともに横ナデが行われている。脚部外面は縦のヘラミガキが行われて裾部は内外面ともに横ナデが行われている。脚部内面はヘラ状工具の横の回転によるケズリを行っている。脚部内面中ほどに粘土接合部の凹みを残す。丹彩された土器である。中央やや西寄りの床面から出土した。

15・16は14と同様の高坏である。坏部は湾曲し稜を有する。脚部は柱状である。調整は、坏部内外面とも横ナデが行われている。脚部外面は縦のヘラミガキを行い、内面はヘラ状工具による横の回転のケズリを行っている。15は中央部西寄り床面に坏部を伏せた様な状態で出土し、脚部はこれより1.2mほど北方の西壁近くから出土した。16は北寄りの床面から出土した。

壇形土器（第13図17,18）

17は底部を欠く小型壇である。口縁部はやや内湾しながら開く。胴部は口縁部径に比べ小さい。調整は、外面は口唇部近くの外面は横ナデされ、胴部から口縁部にかけて下から上の方向にヘラケズリが行われている。内面は口縁部は放射状にヘラミガキが行われている。胴部は指頭による横ナデを行っている。北西部の床面から出土した。

18は小型壇の胴部の資料である。胴部は小さく丸底状で、口縁部は17と同様、内湾しながら開くものと思われる。調整は、胴部外面の上部は細い横のヘラミガキが行われ、下部は底部にかけて斜めの細いヘラミガキが行われている。胴部内面は指による横ナデを行っている。丹彩土器である。ピットP₂内の覆土中から出土した。

器合形土器（第13図19,20）

19は器台の器受部と思われ、比較的細い脚部を持つものと思われる。調整は、器受部外面は方向の不揃いのヘラケズリを行い、内面は放射状に丁寧なヘラミガキを行っている。中央部の

第2表 B区第2号住居址出土土器一覧表

博物番号	器形	口径 高さ	土器の經年	器形の特徴	調査		備考
					外 国	内 国	
1	壺	9.0 —	粘土 精々 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は消盡しながら やや外反する。 小型の瓶形上器。 井形七器。	タテヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	現存 口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
2	壺	13.0 —	粘土 精々 色調 外面黒褐色 内面暗褐色 焼成 良好	広口の変形土器で、肩 部最大幅は肩部上位に ある。	タテヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	現存 口縁部 $\frac{1}{5}$ 周
3	壺	14.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 明褐色 焼成 良好	広口の変形土器で、肩 部はあまり張らず、刷 毛目痕を残す。	口縁部ヨコナデ 肩部以下刷毛目を 部分的に残す。	口縁部ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{5}$ 周 外面スス付着
4	壺	15.0 —	粘土 多量の砂粒 を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	広口の変形土器で、肩 部はあまり張らず、刷 毛目痕を残す。	口縁部ヨコナデ 肩部以下刷毛目	口縁部ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{5}$ 周 外面スス付着
5	壺	12.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 灰褐色 焼成 良好	口縁部は垂直に立ち、 肩部が張る。	口縁部ヨコナデ 肩部斜め刷毛目	ヨコナデ	現存 口縁部から 肩部にかけて $\frac{1}{5}$ 周
6	壺	20.0 —	粘土 砂粒、小石 を含む 色調 黄褐色 焼成 やや悪い	口縁部は有段口縁で、 堅部が横溝に、くの字 形に曲る。	ヨコナデ	ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{3}{4}$ 周
7	(底径) 6.6 —	粘土 多量の砂粒 を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	平底	細いタテのヘラミ ガキ	斜め刷毛目		
8	壺	(底径) 7.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	平底	細いタテのヘラミ ガキ	斜め刷毛目	現存 底部 $\frac{1}{2}$ 周 外面スス付着
9	瓶	(底径) 1.0 —	粘土 多量の砂粒 を含む 色調 褐色 焼成 良好	錐形の底。孔は焼成前 にあけている。	下部から上部へ ラケズリ	斜め刷毛目	
10	甕	12.0 —	粘土 細い砂粒(石 英、漂母)を 多量に含む 色調 黄褐色 焼成 良好	S字状口縁台付甕。肩 部最大幅は肩中位より やや上位と思われる。	口縁部ヨコナデ 肩部斜め刷毛目	口縁部ヨコナデ 肩部指頭による押 圧痕	現存 口縁部から 肩部にかけて $\frac{1}{6}$ 周 外面スス付着
11	甕	15.0 —	粘土 砂粒(石英、 漂母)を多 量に含む 色調 茶褐色 焼成 良好	S字状口縁台付甕。肩 部最大幅は肩中位より やや上位と思われる。	口縁部ヨコナデ 肩部指頭による 刷毛目	口縁部 ヨコナデ 肩部 指頭による 押圧痕	現存 口縁部から 肩部にかけて $\frac{1}{4}$ 周 外面スス付着
12	甕	16.0 20.5	粘土 細い砂粒(石 英、漂母)を 多量に含む 色調 黄褐色 焼成 良好	S字状口縁台付甕。肩 部最大幅は肩中位より やや上位と思われる。	口縁部ヨコナデ 肩部刷毛目	口縁部 ヨコナデ 肩部 指頭による 押し成し、肩部 刷 毛目痕後指頭による タテナデ	古部の下部が大量 量のスス付着

探査番号	器形	口径 深さ	土器の觀察	器形の特徴	調整		備考
					外面	内面	
13	甕	(底径) 9.8	粘土 砂粒(石英、 雲母を多 量に含む 色調 焼成 良好	S字状口縁台付甕の台 部で、台部下部は折返 さすや内湾する。	甕の毛目整形 後 指頭によるヨコナ デ	台部内面は上部が 指頭による押圧痕 下部がヨコナデ	外面スス付瘤 丹はほとんど落ち ている。
14	高 环	18.4 15.0	粘土 砂粒を含む 色調 赤褐色 焼成 良好	环部は段を有し、脚部 は長く伸び、底は急激 に開く。外彫されている る。	环部 ヨコナデ 脚部 テテラミ ガキ 底部 ヨコナデ	环部 ヨコナデ 脚部 ヨコヘラケ ズリ 底部 ヨコナデ	脚部外面スス付瘤 丹はほとんど落ち ている。
15	高 环	17.0 —	粘土 砂粒を少量 含む 色調 茶褐色 焼成 良好	脚部は段を有し、脚部 は長く伸び、底は急激 に開くと思われる。	环部 ヨコナデ 脚部 テテラミ ガキ	环部 ヨコナデ 脚部 ヨコヘラケ ズリ	朱はほとんど落ち ている。
16	高 环	— —	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	环部を欠くが、脚部は 長く伸び、底は段を作 りや急激に開く。	脚部 ヘラミガキ	脚部 ヨコヘラケ ズリ	脚部内面スス付瘤
17	堆	12.0	粘々 色調 茶褐色 焼成 良好	底部を欠くが、口縁部 が広がる。脚部は小さ い。	口縁部 ヨコナデ 脚部から口縁部に かけてヘラケズリ	口縁部 斜めの階 文状のヘラミガキ 脚部 ヘラによる ヨコナデ	現存 11脚部から 脚部にかけて $\frac{1}{4}$ 周
18	堆	— —	粘土 精々 色調 内面赤褐色 外面灰褐色 焼成 良好	口縁部を欠く。脚部は 丸底状である。 外彫されている。	脚部は上部がヨコ ヘラミガキ 下部は斜めのヘラ ミガキ	脚部は指頭による ヨコナデ	
19	器 台	13.0	粘土 少量の砂粒 を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	器受部が盤状である。	器受部ヘラケズリ	器受部内面 斜め のヘラミガキ	現存 器受部 $\frac{1}{5}$
20	器 台	9.5	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	器受部に縫を有する。 器受部と脚部後部に 孔を有す。	器台部より上 ヨコナデ 縫合部 ヘラケズ リ	器受部上部 ヨコ ナデ。下部は階文 状のヘラミガキ。	

床面から2~3cm上の覆土中から出土した。

20は器受部に段を有している。器受部底部は孔を有する。脚部は細いものと思われる。調整は、器受部内外面ともに上部は横ナデを行っている。器受部外面の下部は、方向不揃いのヘラケズリを行い、器受部内面は放射状に細い丁寧なヘラミガキを行っている。中央部床面から出土した。

3. C区第3号住居址と出土遺物

造構(第14,15図)

本住居址はC区に位置している。表1:下約24cmほどでプランの一部が確認された。本住居址の北東の一部は第2号溝状造構下に構築されていた。また、南西部は第5号方形周溝墓の北溝に切られていた。なお、北西部は調査区外のため調査することができなかった。

本住居址の平面プランは東西約4.3m×南北4.9mの剥張隅丸長方形を呈する。主軸方位はN-36°Wである。

壁は北東隅壁と東壁及び南東隅壁のみ確認することができた。壁はやや外傾し、確認面から

は最高で15cmを測る。

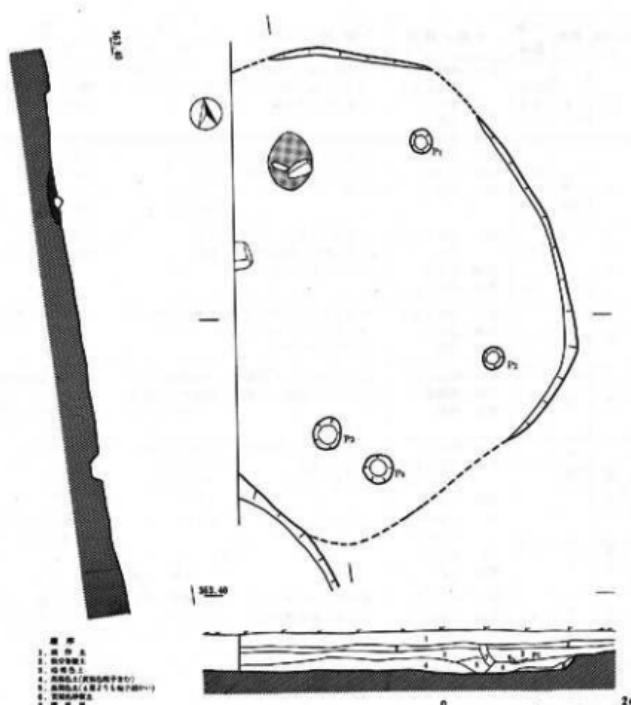
床面は粘性的ある砂質の茶褐色土を張り、固く踏み固められ、いわゆるバリバリの状態であった。床面北部は平坦であったが、南部はやや凸凹が目立った。

ピットは4個検出され、ピットP₁は直径24cm、深さ7.3cm、ピットP₂は直径22cm、深さ8.2cm、ピットP₃は長径36cm、深さ9.0cm、ピットP₄は、直径30cm、深さ12.0cmを測る。

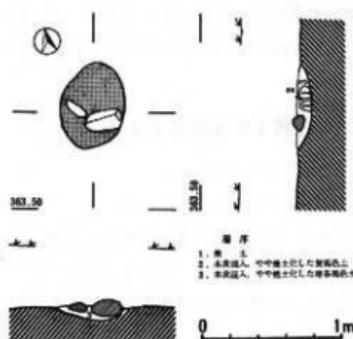
主柱穴はピット

P₁～P₃と推定でき、深さは約7～9cmの掘込みであった。

地床炉（第15図）は住居址中央北よりに位置し、長径62cm、短径46cmの南北に長い楕円形を呈し、最高深さ約10cmほどレンズ状に掘り込んでいる。地床炉内には直径12cm、長さ26cm及び直径6cm、長さ18cmほどの2個の河原石を枕石として逆八の字状に置いていた。地床炉内の焼土は底部にブロック状に堆積していた。また地床炉の南



第14図 C区第3号住居址実測図

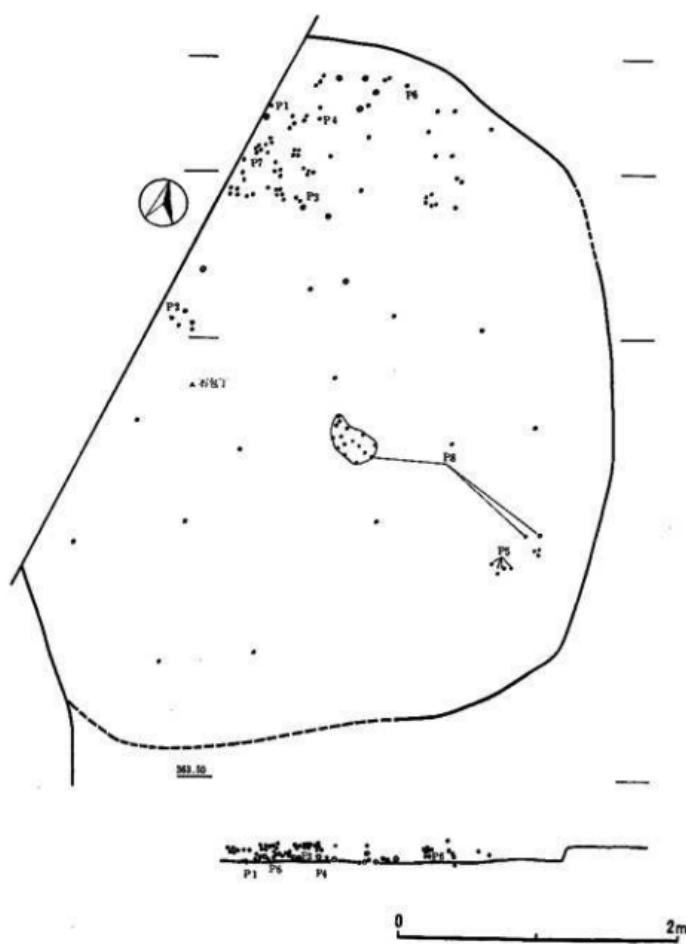


第15図 C区第3号住居址地床炉セクション図

西の方向には人頭大で扁平の河原石が置かれていた。

遺物の出土状態（第16図、第17図）

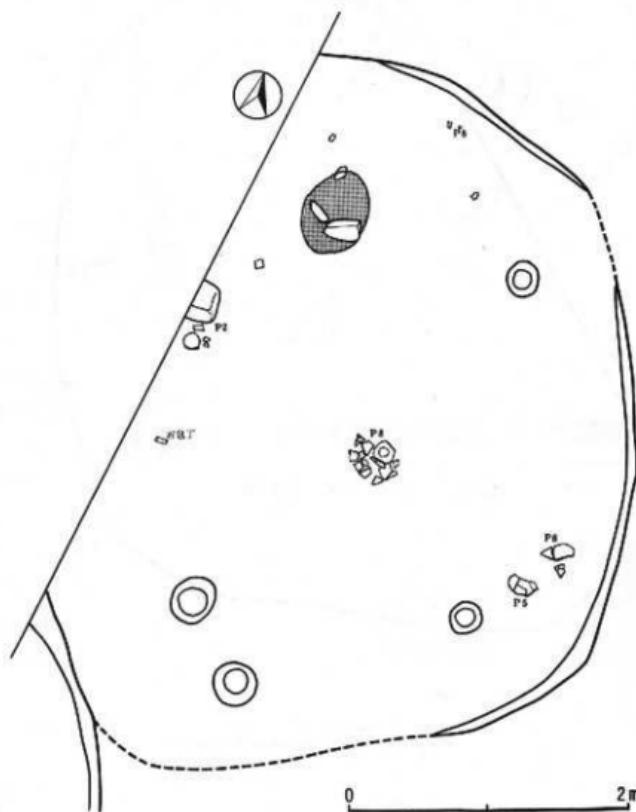
本住居址内の覆土中からは土器片及び炭化物が多く出土した。土器は北部に比較的集中し多



第16図 C区第3号住居址遺物出土図

量に出土し、南部は少量であった。

住居址の床面から出土した遺物は第17図のとおりで、住居址中央やや東よりには丹彩の片口付鉢形土器が、南東隅にはさきの丹彩の片口付鉢形土器片のほか、甕形土器が検出され、地床炉が南西方向の置石の周辺には壺形土器の底部が検出された。また本住居址に伴うものかどうかは不明であるが床面直上から石包丁が検出された。このほか地床炉北東部には炭化物及び焼土ブロックが散在していた。



第17図 C区第3号住居址床面遺物出土図

出土遺物（第18図）

本住居址から出土した土師器の器種は壺、甕、壠、高環、片口付鉢である。このほか石製品の石包丁が出土した。

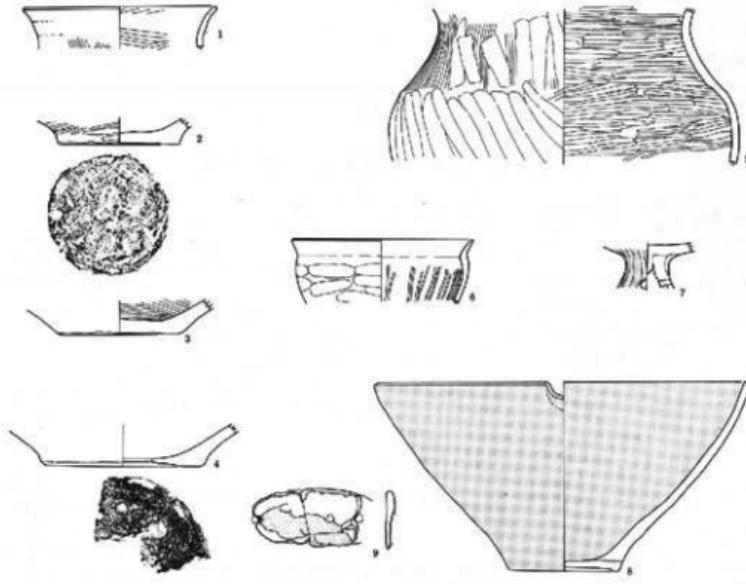
壺形土器（第18図、1～4）

1は広口の壺で口縁部はやや湾曲をもち立上る。調整は、内外面ともに刷毛目整形後 横ナデを行い、部分的に刷毛目痕が残る。北部床面から出土した。

2は平底である。調整は、外面は胴下部は斜めにヘラケズリを行い、底もヘラケズリが顕著に行われている。内面は胴下部から底部にかけて刷毛目整形痕が残されている。中央部西寄りの床面から出土した。

3も2と同様平底である。調整は、外面は胴下部器面が剥落して不明である。底には擦の圧痕が認められる。内面は胴下部から底部にかけて浅い刷毛目整形痕を残している。北部床面から出土した。

4はやはり底部の資料である。底部は焼成後穿孔されていると思われる。調整は、外面は胴下部器面は剥落が著しく不明である。内面は指頭による整形痕が認められる。中央部覆土中から出土した。



第18図 C区第3号住居址出土遺物

壺形土器（第18図5）

5は頭部は太く肩部のやや張った壺と思われる。調整は、外面は縦の刷毛目整形後、縦のヘラミガキを行い部分的には刷毛目痕を残している。内面は横の細いヘラミガキを行っている。中央部南東寄りから床面よりやや浮いた覆土中の黒褐色土層から出土している。

壺型土器（第18図6）

6は頭部が「く」の字状に屈曲する。調整は、口線部内外面ともに横ナデを行われている。肩部外面は横のヘラケズリを行っている。内面は縦のヘラミガキを行っている。北部の床面から出土した。

高坏型土器（第18図7）

7は高坏の脚部と思われる。4孔を有している。坏部と脚部の接合部は嵌込式である。器面外面は丹彩されているが、ほとんど丹は落ちてしまっている。北部の床面から出土した。

片口付鉢型土器（第18図8）

8は口径26.6cm、高さ13.6cmの片口付で、片口の部分はほとんど欠損する。鮮やかな丹が塗られている。底は凹んでいる。調整は、外面は縦の細い丁寧なヘラミガキを行い、底部凹地部分も丁寧にヘラミガキを行っている。内面は横の細いヘラミガキを行っている。中央部やや南寄りの床面上に向きに置かれ、押漬されたような状態で出土した。またその破片の1部も南東部に転っていた。

石包丁（第18図9）

9は中央部西寄りの床面から出土した磨製の石包丁である。石質は粘板岩系のもので脆いため剝落している。両端に孔の痕が認められる。

第3表 C区第3号住居址出土土器一覧表

掘出番号	器形	口径 器高	土器の類型	器形の特徴	調 整		備考
					外 面	内 面	
1	壺	14.0 —	粘土 砂粒を若干含む 色調 外面赤褐色 内面黄褐色 焼成 良好	口縁部がやや外傾する。	口縁部ヨコナデ。 瓶形以下前め刷毛 整形後、ヘラミガ キ	口縁部ヨコナデ。 瓶部ヨコ刷毛目	現存 口縁部 $\frac{1}{6}$ 周 磨耗している
2	壺	(底径) 8.6 —	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	平底。	斜めのヘラケズリ 底部ヘラケズリ	斜めの刷毛目	
3	壺	(底径) 9.0 —	粘土 多量の砂粒を 含む 色調 外面灰褐色 内面茶褐色 焼成 良好	平底。	剥落不明	斜めの刷毛目	現存 底部 $\frac{1}{2}$ 周
4	壺	(底径) 11.0 —	粘土 砂粒・小石を 含む 色調 赤褐色 焼成 良好	平底で高く、焼成後の 孔を穿っている。	剥落不明	剥落のため不明	現存 底部 $\frac{1}{3}$ 周
5	壺	— —	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	頭部が大きく、胴部最大 幅は上部にある。	刷毛整形後、タテ ヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	

6	堀	13.0	粘土 色調 焼成 良好	粘土 色調 焼成 良好	腹部が「く」の字状に 屈曲する。	口縁部はヨコナデ 脚部はヨコヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ 脚部はタテヘラミ ガキ	口縁部から茎部、 脚下部にかけて $\frac{1}{4}$ 周
7	高 環	—	粘土 色調 焼成 良好	粘土 色調 焼成 良好	环部と脚部の接合部は 隔壁式で作っている。 外彫され、脚部に4孔 を穿っている。	脚部はタテヘラミ ガキ	脚部はヘラミガキ	
8	片口付 鉢	26.6 13.6	粘土 色調 焼成 良好	粘土 色調 焼成 良好	片口竹の鉢形土器で、 器面は内外とも細くタ チのヘラミガキを施し ている。底部はやや上 る。月鉢。	細いタテヘラミガ キ	細いヨコヘラミガ キ	

4. C区第4号住居址と出土遺物

造構(第19図)

本住居址はC区に位置している。住居址の北部は第3号方形周溝墓の南溝に切られ、南部は第4号方形周溝墓

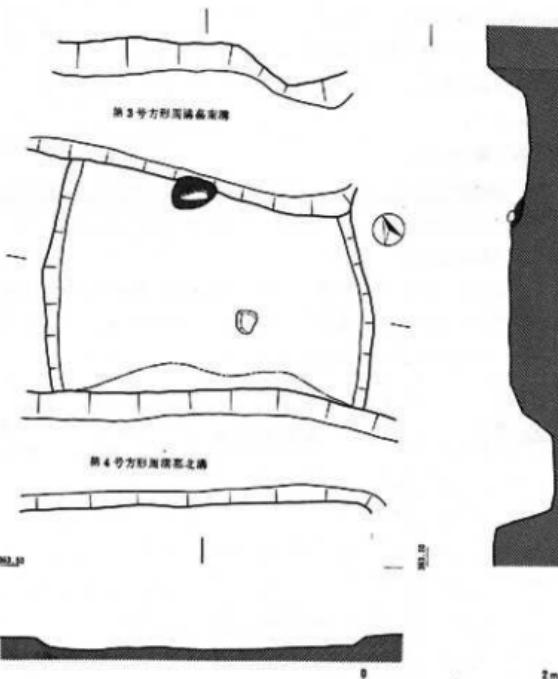
の北溝によって切
られている。

本住居址のプラ
ンはやや不整形で
胴張隔丸方形を呈
するものと思われ
る。主軸方位はN
-25-Eである。

壁は東・西壁と
ともに外傾し、確認
面からの壁高は約
8cmほどであった。

床面は砂質の茶
褐色土層を掘込み
粘性のある黄褐色
土を張っていた。
床面は固く全体に

平坦であった。ま
た南部の第4号方
形周溝墓の北溝付
近では床面は壊さ



第19図 C区第4号住居址実測図

れ、残存していなかった。ピット及び周溝は確認されなかった。

地床炉は住居址中央やや北よりに位置し、第3号方形周溝裏の南溝に北部を切られていた。地床炉のプランは楕円形を呈し、最大深さは11cmを測り、焼土及び炭化物がレンズ状に堆積していた。地床炉内には直径約8cm、長さ30cmほどの上面が扁平の河原石が1つ枕石として置かれていた。また住居址中央がやや東よりには径約22cmほどの上面が扁平の河原石の置石があった。

遺物の出土状態

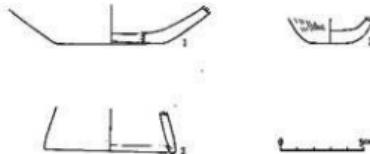
本住居址内からの出土遺物は土師器と木炭の炭化物のみであった。土師器は少量で住居址の南東側に多く出土し、いずれも破片であった。

出土遺物（第20図）

本住居址から出土した土師器の器種は壺、甕、手捏であった。

壺形土器（第20図1）

1は壺の底部で平底である。調整は、外面は胴下部が縦の刷毛目整形後、縦のヘラミガキを行っている。底はヘラケズリを行っている。内面は指頭によるナデを行っている。南東部の床面から出土した。



第20図 C区第4号住居址出土遺物

甕形土器（第20図2）

2は台付甕の台部で胎土に砂粒を多く含む。調整は、内外面とも指頭によるナデを行っている。先端は内側に折返している。中央部やや南寄りの床面から出土した。

手捏土器（第20図3）

3は底部は丸みを帯び、胴部はやや張ると思われる。調整は、外面は胴下部は縦の刷毛目整形痕を残している。内面は胴下部がヘラ状工具によるナデを行っている。底はヘラケズリが行われている。中央部のやや南寄りから出土した

(山崎金夫)

第4表 C区第4号住居址出土土器一覧表

探査番号	器形	口径 器高	土器の銀幕	器形の特徴	調整		備考
					外 面	内 面	
1	壺	6.6 — —	胎土 砂粒を含む 色調 外面墨褐色 内面茶褐色 施成 良好	平底。 —	刷毛目整形後、ヘ ラミガキ	ヨコヘラナデ	木ノ葉底 現存 $\frac{1}{5}$ 周
2	甕	(底径) 8.0 —	胎土 砂粒を多く含 む 色調 茶褐色 施成 良好	台付甕の台部、底部折 れし。	ヨコナデ	ヨコナデ	現存 脱下品 $\frac{1}{3}$ 周
3	手 捏	(底径) 2.6 —	胎土 砂粒を若干含 む 色調 外面黄褐色 内面黒色 施成 良好	底部がやや丸く、胴部 がやや張る手捏土器。	刷毛目整形	ヨコヘラナデ	現存 底部 $\frac{2}{3}$ 周

5. C区第5号住居址と出土遺物

造構(第21図、第22図)

本住居址はC

区に位置し、第

3号方形周溝墓

東溝の平面プラン

の調査中に焼

土が検出され、

精査の結果住居

址プランが確認

された。本住居

址と第3号方形

周溝墓の溝中覆

土の差が判別し

にくく、西壁と

東壁の中央部が

確認できなかっ

た。本住居址は、

長辺3.3m、短辺1.9mの小堅穴で横長の長方

形の平面プランを呈する。主軸の方向はN-26

-Wである。住居址は表土下約50cmで砂質の茶

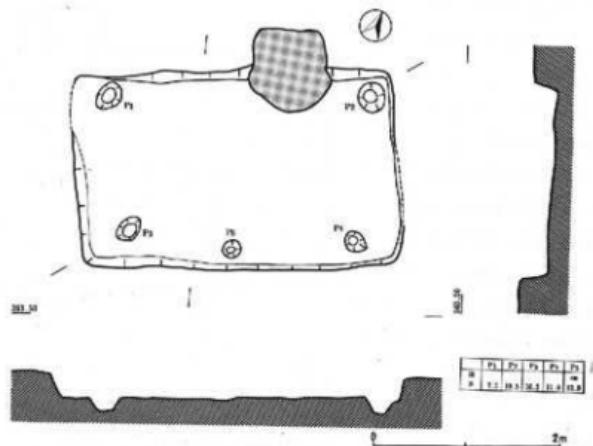
褐色土層を掘り込み、さらにその下層の黄褐色

砂層まで達している。

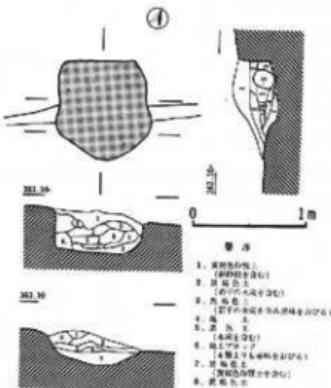
壁はほぼ垂直に立上り、確認面からの壁高は約24cm-30cmを測る。

床面はほぼ平担で、粘性のある砂質の茶褐色土を約3cm-5cm貼って、全体的に踏み固められ、パリパリであった。

ピットは5個認められ、P₁-P₄は直径20cm-30cmで深さ7.5cm-11.0cmで長方形プランのほぼ対角線上にある。P₅は直径20cm、深さ13cmでP₃とP₄の中間に検出された。5個のピットはいずれも柱穴と推定され、住居址の中央に向って、やや斜めに掘り込まれていた。



第21図 C区第5号住居址実測図



第22図 C区第5号住居址カマドセクション図

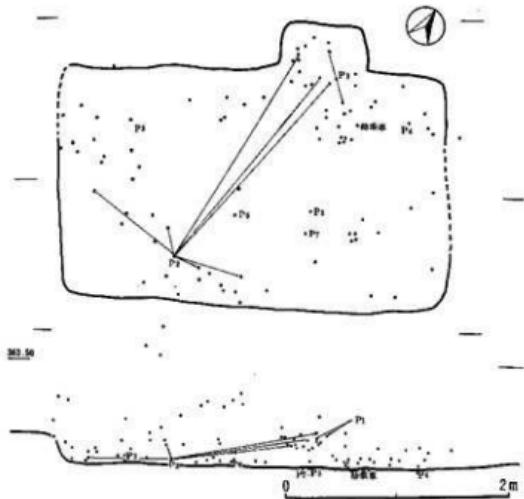
周溝は確認されなかった。

カマドは北壁の中央やや東よりに外に突出した状態であった。カマドの断面及びセクションは第22図のとおりで、焼土、炭化物及び土器片が多く検出されている。全長は86cm、焚口は幅約80cmであった。またカマド内には支脚と思われる長径約10cm、長さ約15cmほどの花崗岩質の河原石が1個立てられていた。このほかには特別な施設はなく、煙道部も認められなかつた。

遺物の出土状態

(第23図、第24図)

本住居址から出土した遺物は土師器及び多くの炭化物があつた。土師器はカマド内及びその周辺に多く集中して出土している。また住居址中央部の床面直上から甕が押し潰されたような状態で検出され、ピットP₁内からは甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片が、壁に立てかけたような状態で検出された。土製纺錘車もカマド付近から検出



第23図 C区第5号住居址遺物出土図



第24図 C区第5号住居址床面遺物出土図

されている。土師器の出土量はさほど多くはなかった。

また本住居址内からは覆土上部から下部に至るまで数箇所に部分的に集中してワラ状の炭化物が出土した。
(佐野勝広)

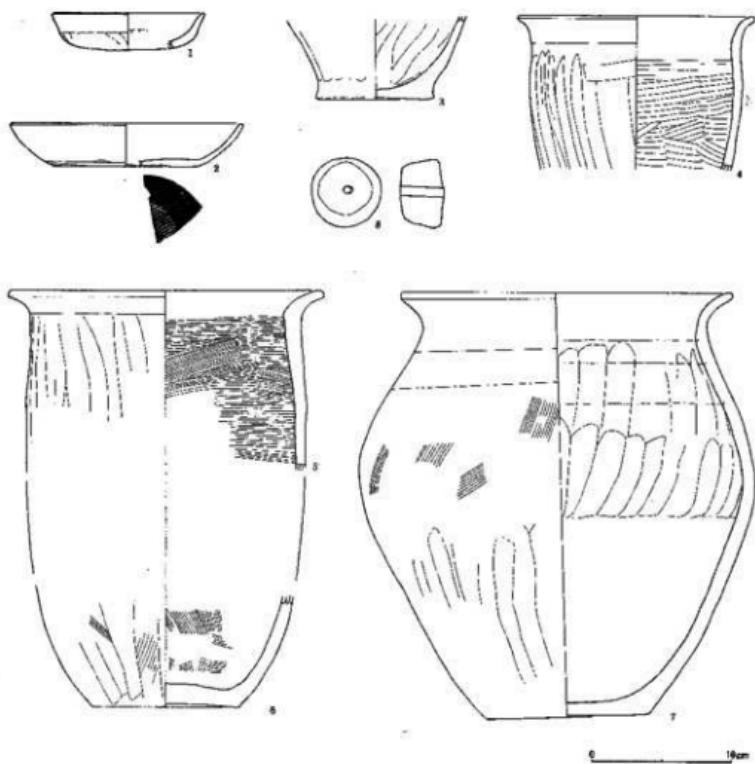
出土遺物（第25図）

本住居址から出土した土器は土師器の壊、甕であり、このほか土製の筋縫車が出土した。また須恵器の伴出はまったく確認されなかった。

壊形土器（第25図1.2）

1は胴部に風化した稜が1条めぐる。調整は、口辺部内外面は横ナデされ、胴部は斜のヘラケズリが行われている。カマド内から出土した。

2は角ばった大きな平底である。調整は、口辺部は内外面ともに横ナデで、底部は糸切後へ



第25図 C区第5号住居址出土遺物

ラケズリしている。カマド内及び南西部床面から出土した。

變形土器（第25図 3～7）

3は長胴の甕と思われる。調整は、胴部は内外面ともに不鮮明な縱方向のヘラケズリ、底は木の葉底である。北西部の覆土中から出土した。

4は口縁部が垂直に近い状態で立上がり後口辺部は短く外反する。調整は、口辺部は内外面ともに横ナデを行い、胴部外面は縱方向のヘラケズリと僅かに横方向の櫛齒状工具による横方向のケズリが行われている。北東部のピットPから出土した。

5は長胴を呈し、最大径は口縁部にある。口辺部は急激に外方に開く。調整は、口辺部は内外面とも横ナデが行われ、胴部外面は縱方向のヘラケズリが行われている。内面は櫛齒状工具による縱及び横方向のヘラケズリが行われている。中央部東寄りの床面から第2次の熱を受け、細かくひび割れ密着した状態で出土した。

6は胴下部は下ぶくれ状である。調整は、胴部外面は縱方向のヘラケズリで、底部もヘラケズリが行われている。胴部内面は櫛齒状工具による縱及び横方向のヘラケズリが行われている。中央部床面から出土した。

7は口縁部は緩やかに外反する。胴部は丸味をもち最大径は胴部にある。調整は、口辺部は内外面ともに横ナデが行われている。胴部外面は上半部は刷毛目整形され、下半部は縱方向のヘラケズリを行っている。底は木ノ葉底である。胴部内面上半は二段に渡る指頭搔痕を有する。完形の土器で口径 23.7cm、器高 30.5cm、底径 11.5cm を測る。中央部床面から出土した。

このほか細片のため図示しなかったが、口径、底径ともに大きな环の口縁部破損が2個出土している。

土製紡錘車（第25図 8）

8は円錐台で直径 5cm、高さ 3.2cm で直径 6.5mm の小孔を穿っている。カマド前部の床面から出土した。
（坂本美夫）

第5表 C区第5号住居址出土土器一覧表

機器番号	器形	口縁 縦 横 底	土器の性質	器形の特徴	調		備考
					外 面	内 面	
1	甕	11.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 棕褐色 施成 良好	胴部に退化した棱が1 条めぐる。底は丸底。	口辺部ヨコナデ。 胴部側面のヘラケ ズリ、表面が凹 凸を呈する。	口辺部ヨコナデ	現存 $\frac{1}{10}$ 周
2	杯	16.7 3.1	粘土 精々されている 色調 茶褐色 施成 良好（硬）	角ばった大きな平底で ある。	口辺部、胴部ヨコ ナデ、底部横方向 のヘラケズリ、底 は、柔軟後器邊を ヘラケズリ。	口辺部ヨコナデ	現存 $\frac{1}{4}$ 周
3	甕	— — 8.5	粘土 砂粒を含む 色調 棕褐色 施成 良好	長胴のものと思われる。	胴部不明瞭な縱 方向のヘラケズリ、 底は木の葉底	胴部縱方向のヘラ ケズリ	現存 下半分の $\frac{1}{4}$ 周

4	裏	17.9 —	胎土 砂粒を含む 色調 棕褐色 焼成 良好	口辺部が垂直に近い状態で立ちあがった後、 口縁部が短く外反する。	口辺部ヨコナデ、 胴部縦方向のヘラ ケズリ。僅かに横 方向彎曲状工具に によるケズリ。	口辺部ヨコナデ、 胴部横方向に彎曲 状工具によるケズ リ	現存 上半部の $\frac{1}{4}$ 回
5	裏	22.6 —	胎土 砂粒を含む 色調 黒褐色 焼成 良好	長削を呈し最大径が口 縁部にある。口辺部は 急激に外方に開く。	口辺部ヨコナデ、 胴部縦方向のヘラ ケズリ	口辺部ヨコナデ、 胴部横方向の彎曲 状工具によるケズ リ	現存 上半分の $\frac{1}{2}$ 回
6	裏	(底径) 10.4 —	胎土 砂粒を含む 色調 黑褐色 焼成 良好	剥下部は下ぶくれ状で ある。	胴部縦方向のヘラ ケズリ 底はヘラケズリ	胴部に縱方向およ び横方向の彎曲状 工具によるケズリ	現存 底部の $\frac{1}{4}$ 回
7	裏	23.7 30.5	胎土 砂粒を含む 色調 棕褐色 焼成 良好	口縁部はなめらかに外 反、胴部は丸味をもち 最大径は胴部にある。 底は木ノ葉	口辺部ヨコナデ、 胴部上半部ハケメ、 下半部に縱方向の ヘラケズリ 底は木ノ葉	口辺部ヨコナデ、 胴部上に二段に 渡る指摩接痕	完形

6. C区第6号住居址と出土遺物

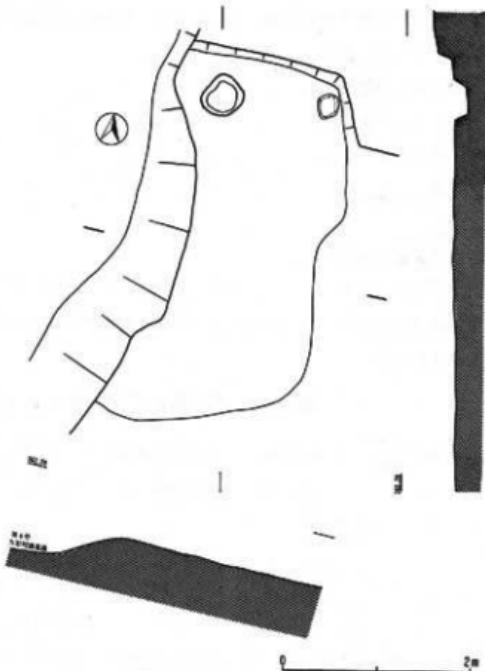
造構(第26図)

本住居はC区に位置する。

表上下約40cmで北壁遺構確
認面に達し、砂質の茶褐色
土層を掘り込んで構築して
いる。また本住居址の東側
約17cmほど下部には第4号
住居址があり、この上に張
床を行っている。西側は第
4号方形周溝基の東溝によ
って切られている。主軸の
方向はN-2°-Eで、長方
形を呈すると思われる。

壁は北壁及び東壁の一部
のみ残存していた。壁は外
傾し、確認面からの壁高は、
約14cmほどである。

床面は北部は平坦であり、
南部はやや凹凸があった。
床は北部が固く、南部にな
るにつれ軟弱になっていた。



第26図 C区第6号住居址実測図

ピットは1つ検出され、深さは15cmを測る。地床が確認されなかった。また住居址北東隅には扁平な河原石が床面に置かれていた。

遺物の出土状態

本住居址より出土した遺物は土師器片と若干の炭化物のみであった。土師器の出土量はきわめて少く、住居址北部に集中していた。

出土遺物（第27図）

本住居址から出土した土師器の図示できる器種は、壺、甕であった。

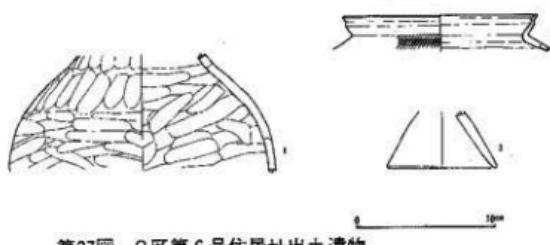
壺形土器（第27図1）

1は壺の頸部より上を欠き、胴部上半の資料である。頸部は細く胴部は張るものと思われる。調整は、外面は肩部は縦のヘラミガキ、胴部は横のヘラミガキを行っている。内面は頸部はヨコナデを行い、胴部はヘラ整形している。北部床面から出土した。

甕形土器（第27図2.3）

2はS字状口縁甕の口縁部から肩部の資料である。肩部が張る。調整は、口縁部は内外面ともに横ナデを行い、肩部は縦の刷毛目整形痕を残し、横に一条の平行線が施されている。中央部床面から出土した。

3はS字状口縁甕の台部と思われ、台部はやや内湾する。調整は、内外面ともに刷毛目整形後指頭によるナデを行っている。南部の床面から出土した。



第27図 C区第6号住居址出土遺物

第6表 C区第6号住居址出土土器一覧表

拂匿番号	器形	口径 器高	土器の觀察	器形の特徴	調整		備考
					外面	内面	
1	壺	—	粘土 細かい砂粒を含む 色調 黄褐色 燃成 良好	頸部がやや細くなり、胴部が張る。	刷毛板形後、ヘラミガキ	頸部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	
		—					
2	甕	14.0	粘土 (石英、雲母) を多量に含む 色調 黄褐色 燃成 良好	S字状の口縁付箋で肩部がやや張る。	口縁部ヨコナデ、肩部はタテの刷毛目とヨコへ一条の刷毛目痕	口縁部ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{8}$ 周
		—					
3	甕	(直径) 8.0	粘土 砂粒を多く含む 色調 赤褐色 燃成 良好	口付甕形土器の台部で合部はやや内湾する。	指頭によるナデ	指頭によるナデ	現存 台部 $\frac{1}{4}$ 周

7. C区第7号住居址と出土遺物

遺構(第28図)

本住居址はC区に位置する。表土下約40cmで北壁の落込みが確認され、砂質の赤褐色土層さらに黄褐色砂層を掘り込んで構築している。本住居址の後、西側上部に第6号住居址構築のため張床を行っている。東の部分は路線外のため調査することはできなかった。また住居址中央部には第4号方形周溝墓に伴うものははっきりしないが土壤が掘込まれていた。

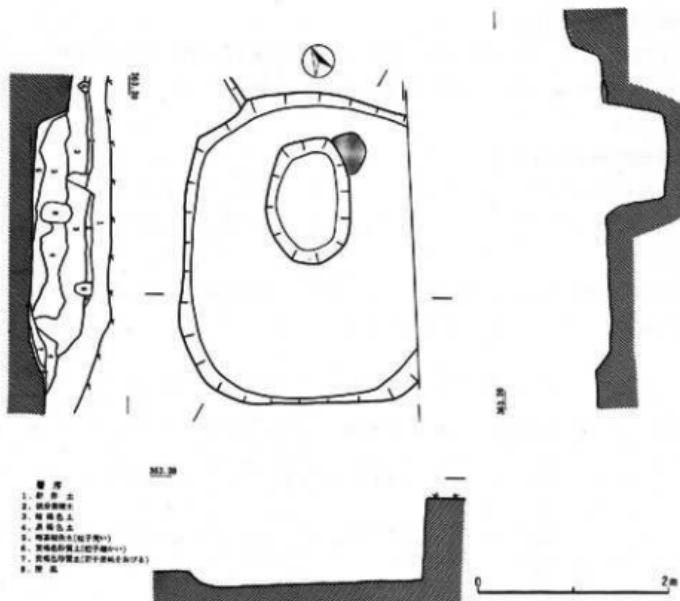
本住居址は東西約2.6m、南北3.2mの胴張り気味の隅丸長方形を呈する。主軸の方向はN-32°-Eである。

壁は外傾し、確認面からの壁高は北壁で約34cm、西壁で14cmほどである。壁の残存状態はしっかりしている。

床面は平坦で粘性のある黄褐色土を張っており、固く踏固められている。

ピットは土壤を除いては、細心の注意を払った精査の結果からも残存していなかった。

地床炉は住居址中央部や北にあり、土壤に西部を切られていた。地床炉の最高深さは8cmほ



第28図 C区第7号住居址実測図

どで焼土及び炭化物が少量であるが、レンズ状に堆積していた。

遺物の出土状態

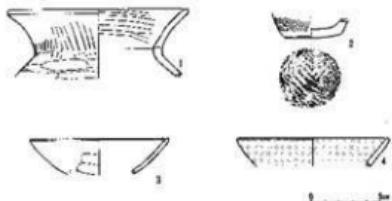
本住居地内からは少量の土師器と若干の炭化物が出土した。土師器は東側に多く出土した。

出土遺物（第29図）

本住居址から出土した土師器で図示できる器種は壺、手捏、高杯であった。

壺形土器（第29図1）

1は頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。胴部は張るものと思われる。調整は、外面は口縁部は縱方向に木目の広い刷毛目整形後横ナデを行っている。肩部は横にへラミガキを行っている。内面は口縁部は横の刷毛目整形後横ナデを行つてある。頸部も横ナデである。中央部東寄りから出土した。



第29図 C区第7号住居址出土遺物

2は手捏のミニチャアの土器である。調整は、胴部外面は縦の刷毛目整形痕を残し、底は掃状工具によるナデを行つてある。内面は指頭によるナデを行つてある。中央部東寄りの覆土中から出土した。

手捏形土器（第29図2）

3は高杯がさほど大きくなないが、高杯と思われる。調整は、杯部外面口唇部は横ナデを行い杯部下部は横のヘラケズリを行つてある。内面は細い縦のヘラミガキを行つてある。北部床面から出土した。

高杯形土器（第29図3,4）

4は3と同様高杯であるが外形されている。調整は、杯部外面は斜めの細のヘラミガキ、内面は細い縦のヘラミガキを行つてある。北部床面から出土した。

5は3と同様高杯であるが外形されている。調整は、杯部外面は斜めの細のヘラミガキ、内面は細い縦のヘラミガキを行つてある。北部床面から出土した。

第7表 C区第7号住居址出土土器一覧表

圖面番号	器形	口径 器高	土器の種類	器形の特徴	調整		備考
					外 面	内 面	
1	壺	13.0	粘土 砂粒（石英・雲母）を含む 色調 黄褐色 施成 良好	頸部が「く」の字状に 屈曲し、口縁部は外反 する。	口縁部は刷毛目整形後、ヨコナデ 肩部はヨコのヘラ ミガキ	口縁部は刷毛目。 肩部は指頭による ナデ	
2	手 捏	(底径) 4.0	粘土 砂粒を含む 色調 單褐色 施成 良好	手捏のミニチャア土器 と思われる。	クテの刷毛目拭 底部は掃状工具の 調整	指頭によるヨコナ デ	
3	高 杯	10.0	粘土 精々 色調 單褐色 施成 良好		杯部ヨコナデとヘ ラケズリ	杯部クテヘラミガ キ	全体に施耗してい る 現存 器受部 $\frac{1}{6}$ 回

4	高 环	11.0 -	粘土 粘々 色調 赤褐色 地成 良好	丹影されている。	环部は斜めのヘラ ミガキ	环部タテヘラミガ キ	現存 鋸歎部 $\frac{1}{6}$ 番
---	--------	-----------	--------------------------	----------	-----------------	---------------	------------------------

8. C区第8号住居址と出土遺物

遺構(第30図)

本住居址はC区に位置する。本住居址は第4号方形周溝墓上にあり、西側は路線外のため調査することができなかった。本住居址は表土下約50cmほどで遺構確認面に達し、砂質の茶褐色土層を掘り込んで構築している。本住居址の南部の床面下には集石土壙があり、張床を行っている。

本住居址の主軸の方

向はN-32°Eで、平

面プランは不整形の方

形を呈するものと思わ

れる。

壁は外傾し、確認面

からの壁高は北面で約

24cm、南壁はやや浅く、

約22cmほどであった。

東壁は約20cm-13cmほ

どであった。

床面は平坦で粘性の

ある黄褐色土を2-5

cmほど張って構築し、

固くいわゆるバリバリ

の状態であった。

ピットは3個確認さ

れ、ピットP₁は長径40

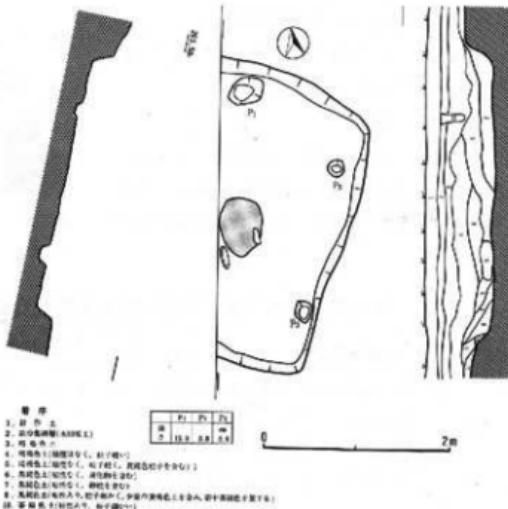
cm、短径28cm、深さ15

cm、ピットP₂P₃は直径

約18cmで深さはきわめ

て浅く4cm-5cmであった。

地床炉は住居址中央部に位置し、長径61cm、短径48cmの楕円形を呈し、最高深さは約6cmほどで焼土及び炭化物はレンズ状に堆積していた。また地床炉内及びその南西には直径6cm、長さ16cmと20cmの河原石が置かれていた。



第30図 C区第8号住居址実測図

また地床炉南面には直径15cm、長さ20cmほどの河原石が6個ほど乱雑に投げ込まれていた。

遺物の出土状態

本住居址よりの出土遺物は窮屈で少い土師器と炭化物が出土した。

出土遺物（第32図）

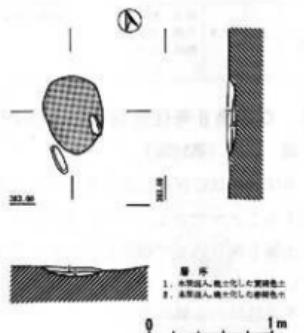
本住居址より出土した土師器は総数6点ほどで、器種は壺、甕、このほか細片で図示できなかったが、高杯も出土している。

壺形土器（第32図1）

1は小型壺の底部の資料である。恐らく胴部最大幅は下部にあると思われる。調整は、外面は大まかに縦のヘラミガキを行い、内面は細かいヘラによるミガキを行っている。底部はやや丸味を帯びている。南部の覆土中から出土した。

甕形土器（第32図2）

2は単口縁の台付壺形土器の胸部の破片と思われる。調整は、外面は縦の刷毛目整形痕を残し、内面は、横の刷毛目整形痕を残している。南東部床面から出土した。



第32図 C区第8号住居址地床炉セクション図



第33図 C区第8号住居址出土遺物

第8表 C区第8号住居址出土土器一覧表

順番号	器形	口径 器高	土器の觀察	器形の特徴	調整		備考
					外面	内面	
1	壺	5.0 — —	胎土 砂粒を多く含む 色調 黄褐色 施成 良好	小型の壺形土器の底部で胴部最大幅は下位にあると思われる。	タテヘラミガキ	タテヘラミガキ	
2	甕	— — —	胎土 砂粒を多く含む 色調 黄褐色 施成 良好	単口縁の台付壺形土器の胸部と思われる。	タテ刷毛目痕	ヨコ刷毛目痕	

9. D区第9号住居址と出土遺物

造構（第33図）

本住居址はD区に位置する。この区域は耕作者の天地返しが深く行われていたこともあり、

遺構は擾乱を受けていた。第33図のとおり確認できたのは床面とピットのみで壁、地床炉等は検出されなかった。

本住居址は粘性がなく砂分を多量に含む暗茶褐色土層を掘り込んで構築している。

床面は粘性のある茶褐色土を4cm~5cm張っており、固めて固くいわゆるバリバリの状態であった。

ピットは2個検出された。P₁は短径5.5cmで梢円形を呈し、深さ68cm、P₂は長径7.8cm、短径6.3cmで梢円形を呈し、深さ

は45cmであった。これらのピットの性格については住居址が擾乱を受け部分的に残っているのみで性格はつかめなかった。

遺物の出土状態

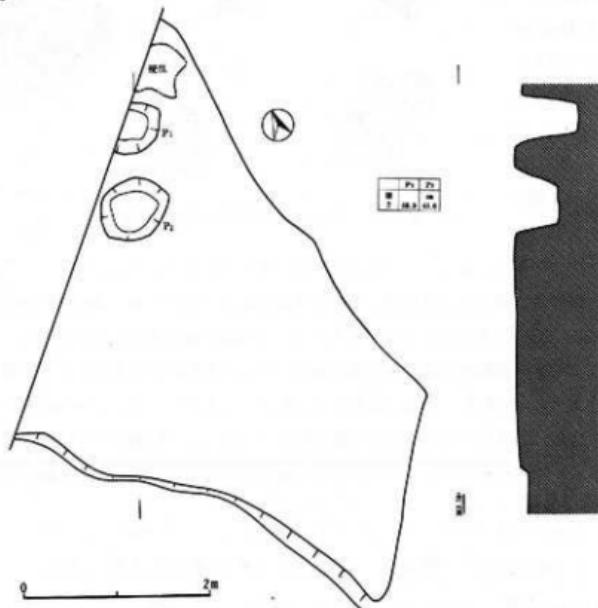
本住居址からの出土遺物は土師器片と木炭のみであった。土師器は覆土に若干と床面に密着して十数点ほど出土した。

出土遺物（第34図）

本住居址より出土した土師器の器種は高壺、甕であった。

高壺形土器（第34図1）

1は壺部の資料と思われる。調整は、外面は縦のヘラミガキ、内面は横のヘラミガキを行っている。ピットP₂内の覆土より出土した。

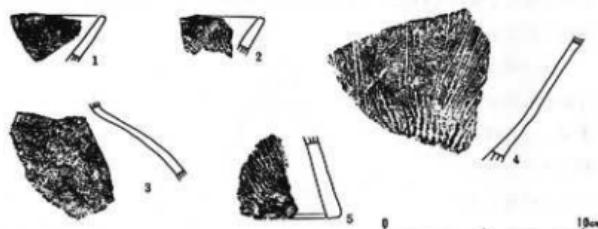


第33図 D区第9号住居址実測図

變形土器

(第34図 2～5)

2は単口縁
の台付變形土
器の口縁部と
思われる。調整
は、外面は、
口縁部は縱の
刷毛目整形後



第34図 D区第9号住居址出土遺物

横ナデを行っている。ピットP₁とP₂の間の床面から出土した。

3は器肉が薄くS字状口縁台付器の肩部の破片と思われる。調整は、外面は縱の刷毛目整形を残し、内面は指頭による押圧痕を残す。中央部の覆土中から出土した。

4は3と同様器肉は薄くS字状口縁台付器の胴下部の破片と思われる。調整は、外面は縱の刷毛目整形痕を残し、内面は指頭による横ナデを行っている。中央部の覆土中から出土した。

5は台付器の台部の資料で器肉は厚い。恐らく単口縁の台付器の台部と思われる。外面は斜めの刷毛目整形痕を残し、内面は指頭による押圧痕を残す。北東部の床面から出土した。

第9表 D区第9号住居址出土土器一覧表

器皿番号	器形	口縁 器形	土器の概要	器形の特徴	調整		備考
					外 面	内 面	
1	高 環	—	粘土 砂粒を含む 色調 赤褐色 焼成 良好	高環の环部と思われる	タテのヘラミガキ	ヨコのヘラミガキ	
		—					
2	變	—	粘土 砂粒を含む 色調 淡褐色 焼成 良好	単口縁の台付變形土器 の口縁と思われる。	口唇部 ヨコナデ 口縁部 タテの刷 毛目	口縁部はヨコの刷 毛目整形後ヨコナ デ	
		—					
3	變	—	粘土 砂粒を多く 含む 色調 黄褐色 焼成 良好	S字状口縁台付變形土器の 肩部の資料で、肩部は遼 る。	タテの刷毛目痕	指頭による押圧痕	器底は摩耗してい る。
		—					
4	變	—	粘土 砂粒を含む 色調 外面赤褐色 内面 指頭によるナ デ 焼成 良好	S字状口縁後の胴下部。	タテの刷毛目痕	指頭によるヨコナ デ	ヌス付垂
		—					
5	變	—	粘土 多量の砂粒を 含む 色調 茶褐色 焼成 ややもろい	台付器の台部で、器肉 は厚い。	斜めの刷毛目痕	指頭による押圧痕	
		—					

10. C 区据立柱建物址

遺構(第35図)

本建物址は第3号方形周溝墓内に構築されている。柱間は東西約1.87m、南北1.30mほどの

2間四方の掘

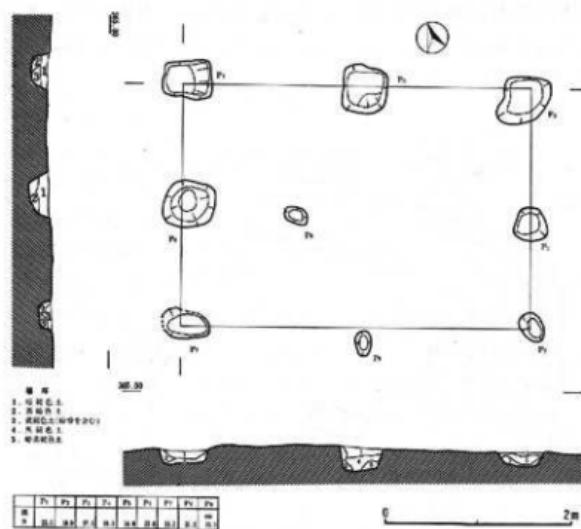
立柱建物であ

る。主軸の方
向はN-Z3°-
Eである。

ビットは全部で
9個確認され
た。ビットP₁
～P₄まではや
や不整形であ

るが、1辺約
40cm～50cm
ほどの方形状
を呈する。ビ
ットP₅～P₉は
先のビットP₁
～P₄よりはや
や小さく円形

または梢円形を呈する。ビットP₅とビットP₆の位置はややずれている。ビットの深さは不揃い
であるが深さ14cm～38cmを測る。ビットP₁～P₄まではいずれも柱穴址と思われた。なお遺物
は、ビットP₄内から真間期の土器片が2片出土した。

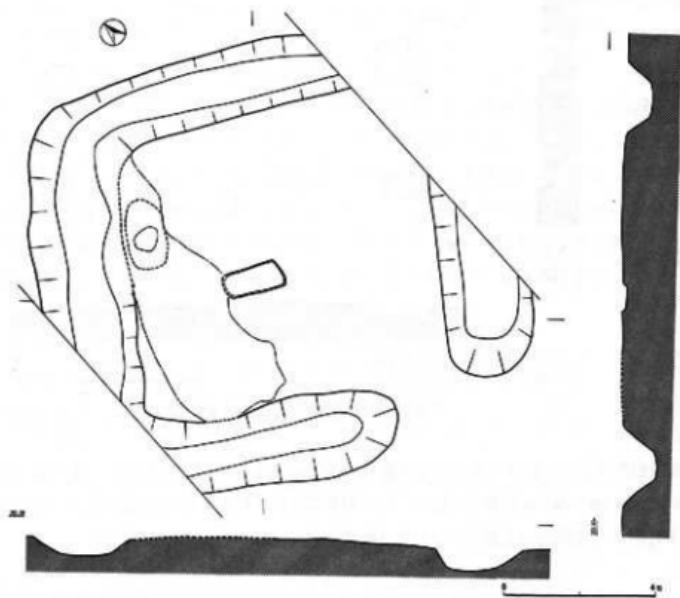


第35図 C区据立柱建物址実測図

11. A区第1号方形周溝墓と出土遺物

遺構（第36図、第37図）

本方形周溝墓はA区に位置する。北から南へなだらかに堆積している茶褐色土層に掘込んだプランが確認された。方形周溝墓の規模は東西12.6m、南北約11.7mを測り、主軸の方向はN-37-Eである。



第36図 A区第1号方形周溝墓実測図

溝は幅1.8m~2.5mを測り、南東部で切れ台状部との陸橋を作っている。形態、及び遺構確認面からの深さはU字状を呈し、南・北溝は深さ70cm~80cmほどで、東・西溝は幅も南・北溝に比べやや広く、深さは50cm~60cmほどでやや浅くなっている。

台状部は西部を農耕による擾乱を受けている。台状部の盛土の有無についてはベルトを残し細心の注意を払ったが、農耕による擾乱が遺構確認面のすぐ上層まで及び確認するまでは至らなかった。台状部中央や西寄りに主体部（第37図）と思われる落込みが確認された。調査の結果、西側は擾乱を受けていたが、東西に長くやや不整形ではあるが長方形を呈し、長辺約1.4m、短辺約0.7m、遺構確認面からの深さ15cmほどであった。深さが浅いのは上部が削り取られているためと推察されるところである。覆土中からは土器等の副葬品は認められなかった。また台状部北西部には、上部を擾乱されているが、土壤状の遺構が検出された。

遺物の出土状態（第38図、第39図）

本方形周溝墓のあるA区は表土が約1mほどあるため機械による導入を余儀なくされ、第3層の河川氾濫の砂層まで掘削を行なっている。第38図の遺物出土図は第4層の黒褐色土層からの遺物ドット図である。遺物は古墳時代前期の土師器が主体であった。土師器は第38図のとおり溝中に多く出土し特に東溝南部及び南溝西部に集中して出土している。溝中の土師器は遺構確認面よりやや上部から出土しはじめ、遺構確認面よりやや下った覆土中には同一レベル上に完形土器を含め破片も集中していた。溝底部に密着して出土した土師器片はほんの5,6点ほどの細片であった。覆土上面の東溝及び南溝の遺物の出土状況は第39図微細図のとおりである。東溝及び南溝では完形に近い土器がやや意識的に置かれていた。その状況は南溝の西部からP₂₀は高壙で壙部と脚部の裾が欠損し横転して出土。P₃は壙で口縁部を下にして置かれ胴下部は欠損していた。東溝では南部からP₅は壙の完形で横転していた。P₁は壙で東西に直径20cmほどの河原石があり、その間に口縁部を上に置かれていた。P₆は壙で、出土したときは口縁部は壊れにくいためかび割れもせず完全で、胸部は押潰された状態で出土し、復元の結果胴部を3割ほど欠く。P₄は広口壙の完形で、台状部の方向へやや斜めに傾いた状態で出土した。P₇は壙の完形で口縁部を北に向ける横転していた。土器中の土層の溜り具合から当初は直立していたものが横転したものと推察される。以上のとおりであるがP₄の下の部分の土層堆積状況を見た結果、

土層の堆積はさほど傾斜をもっていなかった。これらの結果から台状部から転がり落ちたものではなく、当初からこの位置にあったものと思われる様な出土状態であった。

出土遺物（第40-1図、第40-2図）

本方形周溝墓からはきわめて多量の土師器が出土した。その器種は壺、甕、鉢、盆、塊、壇、高环、器台である。

壺形土器（第40-1図1～8）

1は口縁部が直立に近く立上がりながら若干外反する。調整は、口唇部は内外面ともに横ナデを行い、口縁部は外面が縦のヘラミガキ、内面は横のヘラミガキを行っている。南溝西部の覆土中から出土した。

2は1と同様の器形の特徴をもち、調整は、口唇部外面と口縁部内面は横ナデを行い、口縁部外面は縦のヘラミガキが行われている。南溝西部の覆土中から出土した。

3は口唇部が折返しで、口縁部はラッパ状に開く。調整は、口唇部の折返し部及び口縁部の内外両面とも刷毛目整形後、横ナデを行っている。南溝西部の覆土中から出土した。

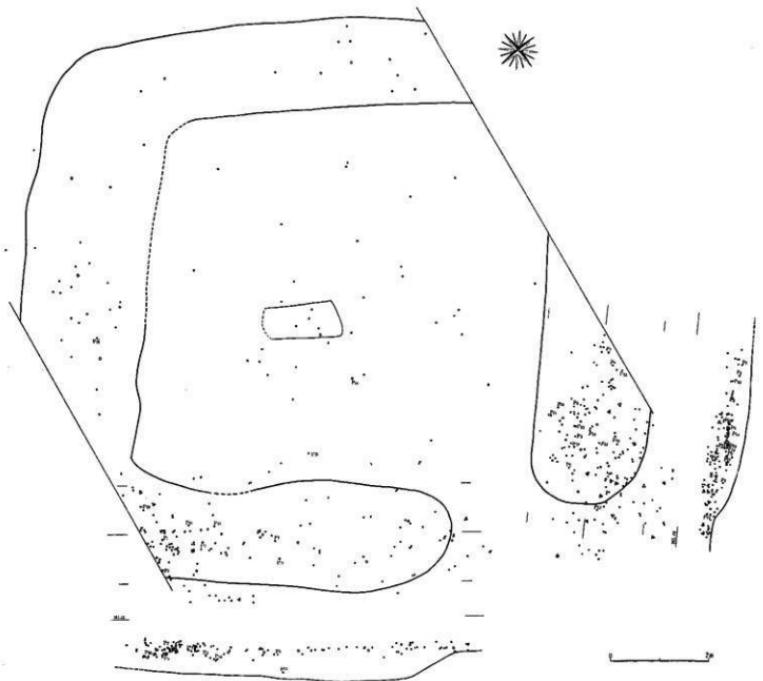
4は完形の広口壺で口径13.0cm、器高14.4cmで口縁部はゆるやかに外反する。胴部最大幅は中位にある。丹彩されている。調整は、口唇部は内外面ともに横ナデが行われ、外面は口縁部が縦、肩部は斜めのヘラミガキが行われ、内面は口縁部から肩部にかけて横のヘラミガキが行われている。東溝中央部覆土中から出土した。

5は全体にまとまった感じのする完形の壺である。口径は12.2cm、器高は17.8cmで頭部は「く」の字状に屈曲し口縁部は外傾し、口唇部近くでやや内湾する。胴部は球形である。調整は、口縁部は内外面ともに横ナデされ、胴部外面は縦方向に3段階のヘラ状工具によるナデが行われている。底部は周辺に粘土を貼り一段高くし、凹みをもたせ胴部と底部の境はヘラで粘土を削り取り底部をより明瞭化している。東溝南部の覆土中から出土した。

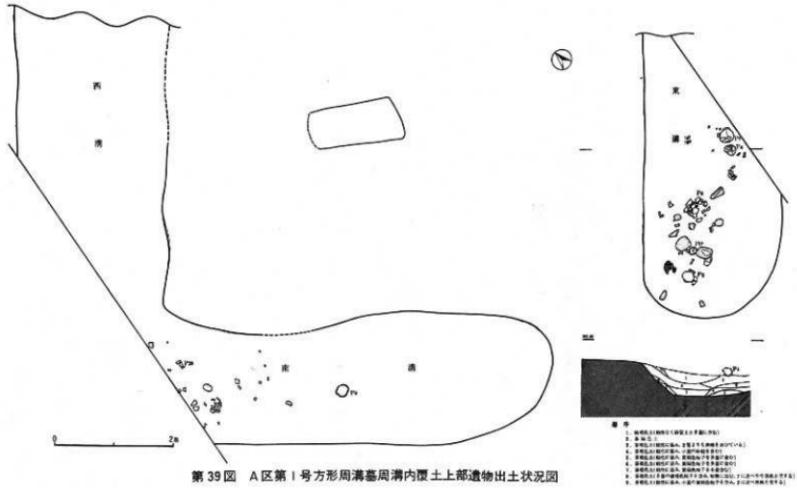
6は口径13.6cm、器高28.2cmで胴部は球形のはば完形の壺である。頭部は極端ではないが「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反し口唇部近くでやや内湾する。調整は、外面の口縁部は内外とも刷毛目整形後横ナデされ、胴部も刷毛目整形後単位がわからないほど浅い縦のヘラミガキが行われている。底部はやや上っている。東溝覆土中から出土した。

7は口径13.0cm、器高25.8cmで胴部最大幅はやや下位にある。頭部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は中ほどでやや内湾し稜を作りながら外反する。調整は、口縁部は内外面ともに横ナデを行い、頭部外面は刷毛目整形痕を残す。胴部外面は刷毛目整形後、3段階によるヘラ状工具により縦のナデを行っている。肩部の内面は指頭による押圧痕が認められる。胴部内面はヘラ状工具による横ナデを行っている。東溝覆土中から出土した。

8は頭部は「く」の字状に屈曲する。胴部最大幅は下位にあるものと思われる。調整は、粗い刷毛目整形のままで、口縁部のみ外面は横ナデされ、頭部から肩部の内面は指頭による押圧痕を有する。東溝覆土中から出土した。

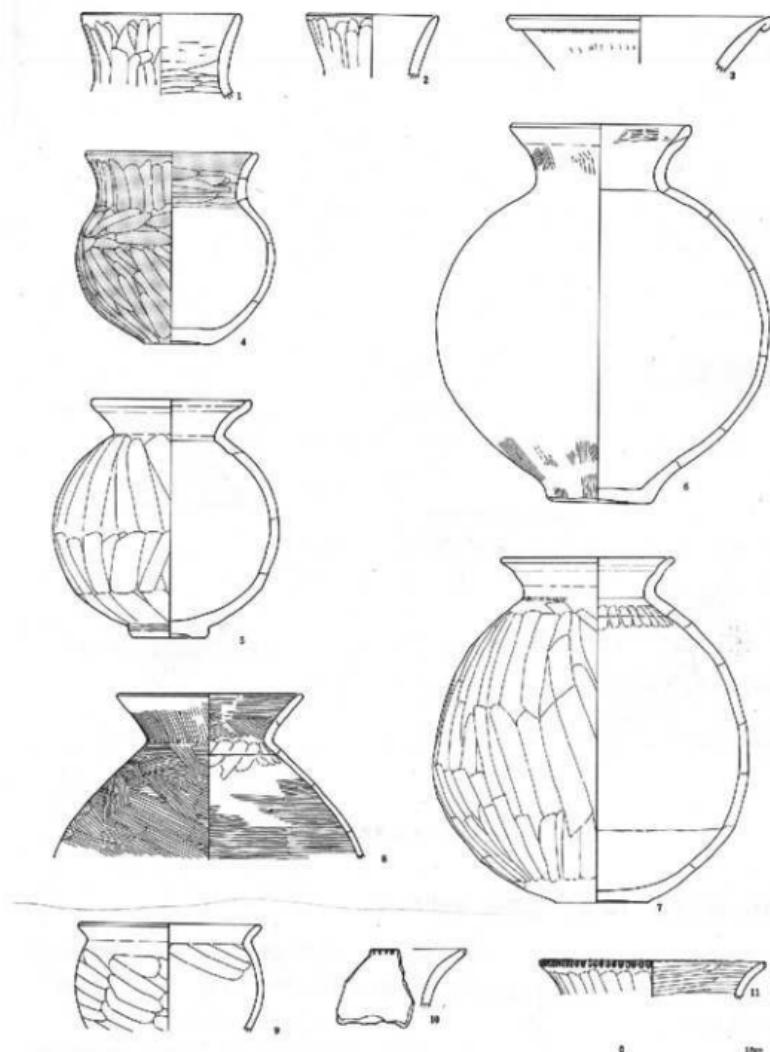


第38図 A区第1号方形周溝墓遺物出土図

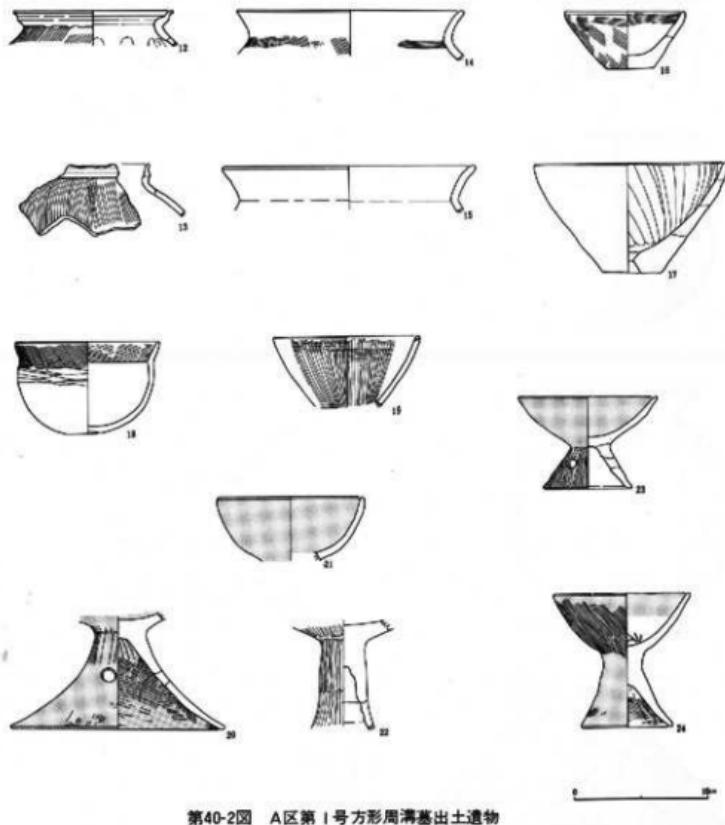


第39図 A区第1号方形周溝墓周溝内埴土上部遺物出土状況図

- 図例
1. 墓頂埴土に散在する土器片(手縫)
 2. 墓頂埴土に散在する土器片(手縫)
 3. 墓頂埴土に散在する土器片(手縫)
 4. 墓頂埴土に散在する土器片(手縫)
 5. 墓頂埴土に散在する土器片(手縫)
 6. 墓頂埴土に散在する土器片(手縫)
 7. 墓頂埴土に散在する土器片(手縫)
 8. 墓頂埴土に散在する土器片(手縫)



第40-1図 A区第1号方形周溝墓出土遺物



第40-2図 A区第1号方形周溝墓出土遺物

變形土器 (第40-1図 9~11、第40-2図12~15)

9は口縁部は短い。頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部最大幅は上位にある。調整は、口縁部内外面ともに横ナデを行い、胴部は内外面ともに斜めのヘラナデを行っている。南溝覆土中から出土した。

10は口唇部にヘラ状工具により付した刻目を有し、口縁部は外反する。調整は、口縁部は横ナデを行い、内面頸部は横のヘラミガキを行っている。東溝覆土中から出土した。

11は口唇部に刷毛状工具の先端により付した刻目を有する。口縁部は外反する。調整は、外

面はヘラ状工具による縫のナデ、内面はヘラ状工具により横のナデが行われている。南溝中央部覆土中から出土した。

12はS字状口縁甕の資料である。調整は、口縁部は内外面とも横ナデされ、外面肩部以下は縫方向の刷毛目整形痕を有する。内面肩部には指頭による押圧痕が認められる。陸橋部より出土した。

13は12と同様S字状口縁甕の資料であるが口径が12よりやや大きいと思われる。口縁部は外反せず立上る。肩部は張るものと思われる。調整は、口縁部内外面とも横ナデし、肩部は縫の刷毛目整形痕を有し、肩部内面は指頭による押圧痕を有する。東溝覆土中から出土した。

14は口縁部はゆるやかに外反する。調整は、口縁部から頸部にかけて刷毛目整形後横ナデを行い頸部では部分的に刷毛目整形痕が残る。東溝覆土中から出土した。

15は口縁部はやや急激に外反し、先端でさらにちょっぴり外に開く。調整は、口縁部内外面ともに横ナデが行われている。台状部南部の造構確認面直上から出土した。

鉢形土器（第40-2図16）

16は鉢形を呈する。調整は、部分的ではあるが刷毛目整形痕を残す。台状部南部の造構確認面直上から出土した。

瓶形土器（第40-2図17）

17は鉢形を呈し、作りは粗雑である。完形で直径14.8cm、器高8.3cmを測る。底部には両面からあけた孔が穿ってある。調整は、外面は指によるナデを行い、内面は縫の深いヘラケズリを行っている。東溝覆土中から出土した。

壺形土器（第40-2図18）

18は器肉が薄く、底部は凹底を呈する。調整は、口縁部外面は縫の刷毛目痕、肩部外面は横のヘラミガキを行い、口唇部内面付近は横ナデ、口縁部は斜めの刷毛目痕を残す。肩部内面は指によるナデを行っている。東溝覆土中から出土した。

壺形土器（第40-2図19）

19は小型の壺の口縁部である。口縁部は大きくやや外方に開き最大径を口縁部にもつ。肩部は小さいものと思われる。調整は、内外面ともにいねいに縫のヘラミガキを行い、口唇部近くで指頭による横ナデが認められる。また頸部外面は横のヘラミガキを行っている。西溝覆土中から出土した。

高壺形土器（第40-2図20-23）

20は脚部を大きく開く。3孔を穿っている。内外面ともに丹彩されている。調整は、脚部の外面は刷毛目整形後縫のヘラミガキ、根部は横ナデを行い、内面は縫のヘラナデ及び斜めの刷毛目整形と裾部に横ナデを行っている。南溝西部覆土中から出土した。

21は壺部は内湾しつつ立上がる。丹彩され、調整は、壺部外面は横の細いヘラミガキ、内面は縫の細いヘラミガキを行っている。西溝覆土中から出土した。

22は脚部が柱状化している。調整は、坏部及び脚部外面は縦のヘラミガキ、坏部内面はヘラミガキ、脚部はヘラによる横のケズリを行っている。東溝覆土中から出土した。

23は脚部に比べ坏部が大きく開く。3孔を穿っており、丹彩されている。調整は、坏部外面は横ナデ、脚部外面は縦のヘラミガキ、坏部内面は剥落して不明である。脚部内面は指頭によるナデを行っている。東溝覆土中から出土した。

器台形土器（第40-2図24）

24は脚部が高く器受部は小さく湾曲する。丹彩されている。調整は、外面は縦の刷毛目整形後指頭によるナデを行い、器受部と脚部間に若干刷毛目痕が残る。内面は器受部は指頭による横ナデを行い、底部はヘラキズ痕が認められる。脚部は刷毛目整形である。東溝覆土中から出土した。

第10表 A区第1号方形周溝墓出土土器一覧表

番号	器形	口径 器高	土器の要素	器形の特徴	調整		備考
					外 面	内 面	
1	盃	12.0 —	粘土 精々 色調 淡褐色 焼成 良好	口縁部は直立に近くや や外反する	口部はヨコナデ 口縁部タテのヘラ ミガキ	口部はヨコナデ 口縁部はヨコのヘ ラミガキ	現存 口縁部の1/4 周 外側スヌ付着
2	盃	10.0 —	粘土 細かい砂粒を 含む 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部は直立に近くや や外反する	口部はヨコナデ 口縁部はタテのヘ ラミガキ	口部はヨコナデ	現存 口縁部の1/4 周
3	盃	20.0 —	粘土 砂粒を多く含 む 色調 外面黄褐色 内面暗黄褐色 焼成 良好	口縁部は折返しである	口部はヨコナデ 口縁部はタテの刷 毛目整形後、指頭 によるヨコナデ	口縁部はヨコナデ	現存 口縁部の1/4 周
4	盃	13.0 14.4	粘土 細かい砂粒を 含む 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は、直立しながらやや外反する。広口 の盃である。脚部最大 幅は中位にある。 平底。	口部はヨコナデ 口縁部はタテのヘ ラミガキ。脚部は 斜めのヘラミガキ	口部はヨコナデ 口縁部から脚部に かけてヨコのヘラ ミガキ	器外面と口縁部 にかけて外接され ている。
5	盃	12.2 17.8	粘土・小石を 含む 色調 淡茶褐色 焼成 良好	口縁部は外傾しながら 口唇部がやや内湾する。 脚部は直形で、外面は ヘラ状工具タテに3 段階に調整している。 底部は周囲に粘土を貼 付け凹底状にしている。 底部と脚部の境部はヘ ラで熱土を削り取って いる。	口縁部はヨコナデ 脚部は3段による タテのヘラナデ	口縁部はヨコナデ 脚上位から脚中位 までにかけて斜め のヘラ状工具によ る調整。脚下位は ヨコのヘラ調整。	墨斑あり

6	壹	13.6 28.2	胎土 砂粒を含む 色調 外面茶褐色 焼成 良好	口縁は外反し、口唇部近くで棱を作る。脣部は刷毛目焼形後3段階にヘラミガキをしている。底部は平底でやや上っている。	口縁部はヨコナデ 脣部は刷毛目整形後3段階に細くていねいにタテのヘラミガキをしていく。 底部は平底でやや上っている。	口縁部はヨコナデ 脣部はヨコのヘラ 底部はヨコのヘラ 溝底。	
7	參	13.0 25.8	胎土 細かい砂粒を 多く含む 色調 内面茶褐色 焼成 良好	口縁部は棱を作りながら外反する。脣部は刷毛目整形後、ヘラ状工具で3段階にタテのナデを行っている。脣部最大幅は下位にある。底部は平底でやや上っている。	口縁部はヨコナデ 脣部は刷毛目底を残し、脣部はヘラ状工具で3段階にタテのナデを行っている。底部はヘラケズリ。	口縁部はヨコナデ 脣部は指頭による 押圧底。 脣部はヘラ状工具 によるヨコのナデ。	
8	壹	14.0 —	胎土 砂粒が多く含む 色調 茶褐色 焼成 良好	頬部は「く」の字状に外反し、器皿は刷毛目整形で、脣部最大幅は下位にあると思われる。	口唇部はヨコナデ 口縁部は刺めの刷毛目。 脣部は刺めの刷毛目。	口縁部はヨコの 刷毛目。下部は ヨコの刷毛目。 脣部は刺めの刷毛目。 脣部はヨコの 刷毛目。	
9	寅	14.0 —	胎土 細かい砂粒を 多く含む 色調 茶褐色 焼成 やや悪い	口縁部は短く、脣部は「く」の字状に屈曲する。脣部最大幅は上位にある。	口縁部はヨコナデ 脣部は刺めのヘラ ナデ。	口縁部はヨコナデ 脣部はヨコの ヘラナデ。	スヌ付着
10	寅	— —	胎土 砂粒を多く含む 色調 淡茶褐色 焼成 良好	口縁部は外反し、口唇部にヘラ状工具による削刮をもつ。	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ で、頭部ヨコの ヘラミガキ。	現在 口縁部約 $\frac{1}{8}$ 周
11	寅	17.0 —	胎土 細々な繊維か い砂粒を含む 色調 外面茶褐色 内面茶褐色 焼成 良好	口縁部は外反し、口唇部に刷毛状工具による押圧の削刮をもつため口唇部が若干疲状である。	口唇部は削目とタテのヘラ状工具によるナデ	口縁部はヨコのヘラ 状工具によるナデ。	現存 口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
12	寅	12.0 —	胎土 砂粒（石英、 蛭石）を多量 に含む 色調 茶褐色 焼成 良好	S半状口縁の合付底	口縁部はヨコナデ 脣部から下はタテの刷毛目	口縁部はヨコの刷 毛目。脣部は指頭 の押圧底。	現存 口縁部から 脣部にかけて $\frac{1}{4}$ 周
13	寅	— —	胎土 砂粒（石英、 雲母）を多量 に含む 色調 茶褐色 焼成 良好	S字状口縁の合付底の 資料である。 口縁部は外反せず立上がる。	口縁部はヨコナデ 脣部はタテの刷毛 目底による 押圧底。	口縁部はヨコナデ 脣部は指頭による 押圧底。	現存 口縁部から 脣部にかけて $\frac{1}{6}$ 周
14	寅	17.0 —	胎土 砂粒を含む 色調 外面茶褐色 内面茶褐色 焼成 良好	口縁部は丸くゆるやかに外反する。 広口の盡である。	口縁部はヨコナデ 脣部はタテの刷毛 目底を残す。	口縁部はヨコナデ 脣部はヨコナデで 部分的に刷毛目底 が残る。	口縁部外側にスヌ 付着 現存 口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
15	寅	19.0 —	胎土 砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	口縁部はやや急傾に外反し、さらに先端でちよびり外へ開く。	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ	口縁部外側にスヌ 付着 現存口縁部の $\frac{1}{4}$ 周
16	林	9.0 4.4	胎土 細かい砂粒を 多く含む 色調 茶褐色 焼成 良好	彫形を呈する。脣部は 刷毛目底を有する。	ヨコと斜めの刷毛 目底	ヨコの刷毛目底 目底	内面剥落している。

17	鉢 底	14.8 8.0	粘土 砂粒・小石を含む 色調 貫青色 焼成 良好	体形を呈するのである。 上部の作りは粗陋である。	指によるナデ	タテのヘラケズリ
18	底 端	10.6 7.0	粘土 精々されてい 色調 外面黄褐色 内面茶褐色 焼成 良好	口縁部は刷毛目状をそ のまま残し、副部はヨ コのヘラミガキ。底は 同様である。	口縁部はタテの刷 毛目状。副部はヨ コのヘラミガキ	口縁部はヨコナデ 口縁部に斜めの刷 毛目状を残す。副 部は指頭によるナ デ
19	端	11.0 —	粘土 精々 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は大きくやや外 方に開き、最大幅を口 縁部にもち、副部は小 さいものと思われる。	口縁部はタテのヘ ラミガキを行い、 口縁部近くは指頭 のヨコナデ。底部 はヨコのヘラミガキ	口縁部はタテのヘ ラミガキを行い、 口縁部近くはヨコ のナデを行ってい る。
20	高 坏	— —	粘土 砂粒を含む 色調 赤褐色 焼成 良好	脚部が大きく聞く。 3孔を穿っている。	脚部は脚部後タテの ヘラミガキ	タテのヘラナデ 斜めの刷毛目状
21	高 坏	11.0 —	粘土 粘かい砂粒を 多く含む 色調 赤褐色 焼成 良好	脚部は内凹しつつ立上 る。内外面舟形である。	脚部はヨコのヘラ ミガキ	現存 脚部のみ 1/4 周
22	高 坏	— —	粘土 砂粒・小石を含む 色調 外面暗黃褐色 内面暗灰褐色 焼成 良好	脚部が柱状化し高く延 びている。	器受部、脚部とも にタテのヘラミガ キ	脚部内面はヘラミ ガキ 脚部はヨコのヘラ ケズリ
23	高 坏	10.4 7.0	粘土 砂粒・小石を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	脚部に比べ脚部は大 きく聞く。孔は3孔。	脚部はヨコナデ、 脚部はタテのヘラ ミガキ	脚部はヨコのヘラ ミガキ 脚部はヨコナデ
24	器 内	10.0 10.0	粘土 砂粒を含む 色調 贊青色、脚部は赤 褐色 焼成 良好	脚部が高く、器受部は 小さく消済する。	器受部はタテの刷 毛目状。底部は部 分的に指頭による ナデを行っている。	器受部は指頭によ るヨコナデ、底部は ヘラによる押えの キズ痕。脚部内面 はヨコの刷毛目状

12. A区第2号方形周溝墓と出土遺物

遺構(第41図)

本方形周溝墓はA区に位置する。弥生時代後期の住居址を西溝で切って構築している。東側は路線外のため調査することができなかつたが、南北約8.8mを測り方形の周溝墓と思われる。主軸の方向はN-12°-Eである。溝はU字状を呈し幅は1.0m~1.4mを測る。遺構確認面からの溝の深さは50cm~60cmを測る。溝は南西部が切れ陸橋となつてゐる。台状部の比高差

はほとんど認められなかった。主体部及びピット等は認められなかった。

遺物の出土状態

本方形周溝墓からの遺物の出土は窮屈で少く、溝中から出土した遺物も底部より浮いた状態で出土した。

出土遺物

(第42図)

本方形周溝墓から出土した土器の器種は壺、甕、器台、蓋であった。

壺形土器 (第42図 1.2)

1は口縁部がラップ状に開き、口唇部は折返し口縁である。調整は、口縁部外面は斜めのヘラミガキを行い、内面は刷毛目整形後横ナデを行っている。

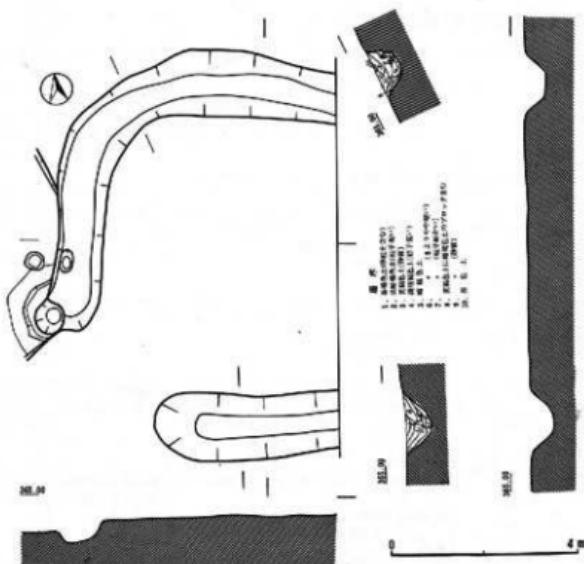
2は底部は小さく小型壺の底部と思われる。調整は、外面は縦のヘラミガキを行い、内面は浅い刷毛目整形痕を残す。

甕形土器 (第42図 3)

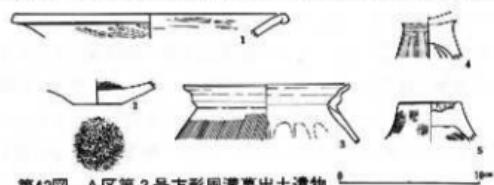
3はS字状口縁台付甕の口縁部から肩部にかけての資料で、調整は、口縁部は内外面とも横ナデを行っている。肩部はあまり張らず胴部は縦の刷毛目痕を残し、胴部内面は指頭による押圧痕を有する。

器台形土器 (第42図 4)

4は器台の脚部と思われる。調整は、外面は杯部との接合部外面は横ナデを行い、脚部外面は縦のヘラミガキ、脚部



第41図 第2号方形周溝墓実測図



第42図 A区第2号方形周溝墓出土遺物

内面は縦のヘラナデが行なわれている。

蓋形土器（第42図5）

5は蓋形土器と思われる。調整は、外面は刷毛目整形後ヘラミガキを行い部分的に刷毛目痕を残し、内面は上部は指頭による押圧痕、下部は刷毛目整形及びヘラケズリを行っている。

第11表 A区第2号方形周溝墓出土土器一覧表

測定番号	器形	口径 器高	土器の觀察	器形の特徴	調査		備考
					外 面	内 面	
1	壺	20.0	粘土 細かい砂粒を含む 色調 外面暗茶褐色 地成 良好	口縁部がラバ状に開く。 口唇部は折返し口縁。	口縁部ヘラミガキ	刷毛目整形後、ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{6}$ 周
2	壺	(底径) 3.6	粘土 砂粒を多く含む 色調 外面茶褐色 地成 良好	底部は小さく、平底で 小型壺の底部と思われる。	細いタテのヘラミ ガキ	浅い刷毛目	
3	壺	12.0	粘土 砂粒(石英、 雲母)を多量に含む 色調 茶褐色 地成 良好	S字形口縁整形土器で 肩部が突出する。 腹部は肩部中位よりや や上にある。	口縁部ヨコナデ、 肩部タテ刷毛目	口縁部ヨコナデ。 肩部は指頭による 押圧痕	現存 口縁部から 肩部にかけて $\frac{1}{5}$ 周
4	器台	-	粘土 砂粒を多く含む 色調 外面赤褐色 地成 良好	器台形土器の脚部。	脚部との接合部は ヨコナデ、脚部は ヘラミガキ	脚部内面はタテの ヘラナデ	
5	壺	5.0	粘土 砂粒を多く含む 色調 外面黄褐色 地成 良好	蓋形土器と思われる。	タテの刷毛目整形 後、タテのヘラミ ガキ	上部は指頭による 押圧痕、内部はヘ ラケズリ、刷毛目痕	

13. C区第3号方形周溝墓と出土遺物

造構（第43図、第44図）

本方形周溝墓はC区に位置する。プランは砂質の黄褐色土層を掘り込んで構築しているのが確認された。本方形周溝墓は南溝が古墳時代前期(五領期)の第4号住居址と、縄文時代中期の土壙の一部を切って構築されていた。また南溝と東溝の間には、奈良時代(真間期)の第5号住居址が後に構築されている。さらに台状部には近世の溝状の擾乱を受けている。

本方形周溝墓の規模は東西約8.8m、南北9.7mで、幅1.0m~1.5mの溝に囲まれている。主軸の方向はN-24°-Eで大きく東に傾いている。溝はU字状を呈し北溝及び西溝北部が浅く、南溝は深く掘込んでいる。南溝と東溝の間は後の住居址が溝底部と同一レベル程度に掘込んで構築されているが、南溝と東溝のカーブからこの間に陸橋があったことが推定できる。台状部はセクションで観る限り、若干の比高差がうかがえる。台状部及び溝中内には、本方形周溝墓に伴う施設は認められなかったが、西溝の外には土壙が西溝と繋がるように長径を西溝と平行に土壙が検出された。土壙の規模は長径約1.2m、短径約60cm、深さ60cmで精円形を

呈していた。性格については明確にできなかつたが、土壤内からは古墳時代前期（五領期）の土器片が数点出土した。

遺物の出土状態

本方形周溝墓から出土した遺物は南東部の住居址内及びその周辺を除いては、古墳時代前期の土器片であつた。その出土状況は北溝西部から第44図3の壺が溝底部に直立し置かれた状態で出土したほかは碎片であり、その量も多くなく溝覆土中に浮いた状態で出土した。

出土遺物（第45図）

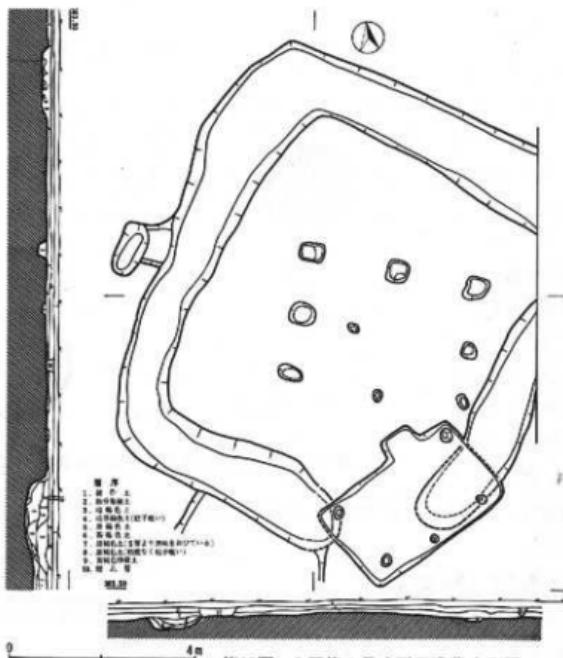
本方形周溝墓から出土した土器はさほど多くはない、器種は壺、甕、瓶であった。

壺形土器（第45図1,2）

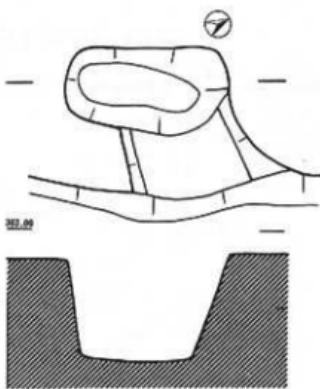
1は平底で底部がやや上っている。調整は、胴下部外面は横のヘラケズリ後縦に刷毛目整形を行っている。胴下部内面から底部内面にかけては横にヘラケズリを行っている。底部はヘラケズリである。西溝覆土中から出土した。

2は壺と思われ、胴部があまり張らない。調整は、

胴部外面は縦のヘラナデ、胴部内面から底部内面にかけ



第43図 C区第3号方形周溝墓実測図



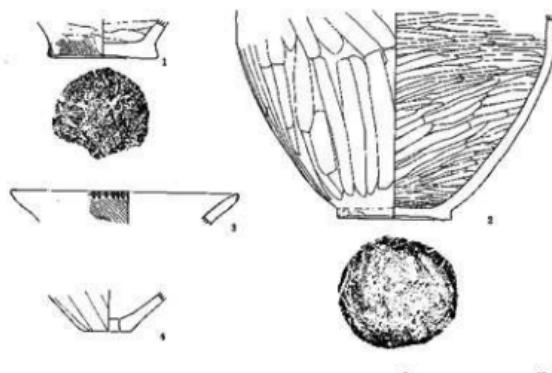
第44図 C区第3号方形周溝墓西溝外土壤

けては斜めのへラナデを行い、底部はヘラケズリを行っている。北溝西部の溝底に直立して置かれていた。

變形土器

(第45図3)

3は口唇部にヘラ状工具による刻目をもち、口縁部は外反する。調整は、口



第45図 C区第3号方形周溝墓出土物

縁部外面は斜の刷毛目を残し、内面は刷毛目整形後横ナデを行っている。西溝覆土中から出土した。

飯形土器 (第45図4)

4は底部に孔を有する鉢形の瓶と思われる。調整は、外面は斜のヘラケズリを行い、内面は横ナデを行っている。南溝覆土中から出土した。

第12表 C区第3号方形周溝墓出土器一覧表

器種番号	器形	口径 器高	土器の構成	器形の特徴	調整		備考
					外 面	内 面	
1	甕	(底径) 7.6	粘土 砂粒・小石を 多く含む	平底。	刷下部はヨコのヘ ラケズリ後タテの 刷毛目	刷下部及び底部は ヨコのヘラケズリ	
		-	色調 茶褐色 地成 良好		底部はヘラケズリ		
		(底径) 8.0	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 地成 良好	刷部はあまり盛らない	タテヘラナデ 底部ヘラケズリ	底部斜めのヘラケ ズリ 底部ヘラケズリ	
2	甕	15.0	粘土 細かい砂粒を 多く含む	口縁部に刷毛先による 押えつけの痕目をもつ	刷の刷毛目	刷毛整形後。ヨコ ナデ	現各 口縁部の $\frac{1}{10}$ 回
3	甕	(底径) 3.0	粘土 砂粒を含む 色調 外面黄褐色 内面茶褐色 地成 良好	鉢形を呈する動形土器	タテのヘラケズリ	ヨコナデ	
		-					

14. C区第4号方形周溝墓と出土遺物

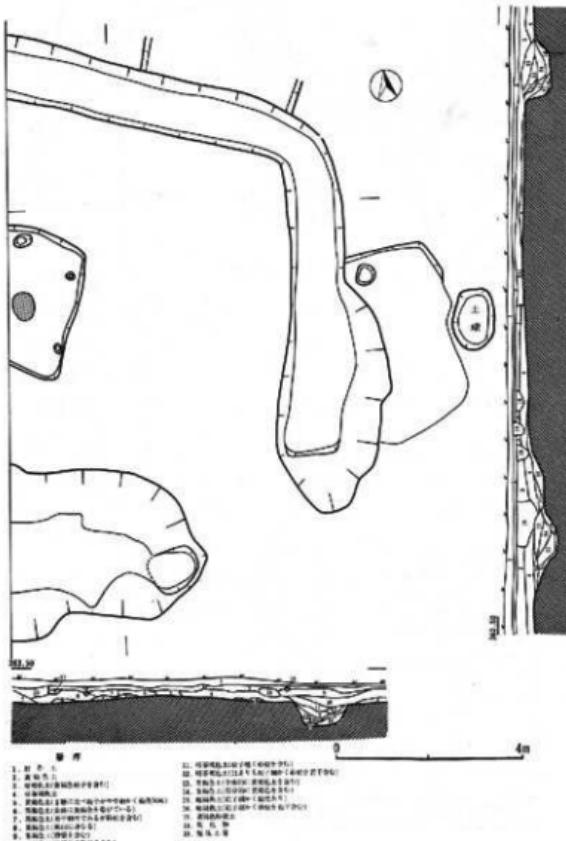
遺構(第46図、第48図)

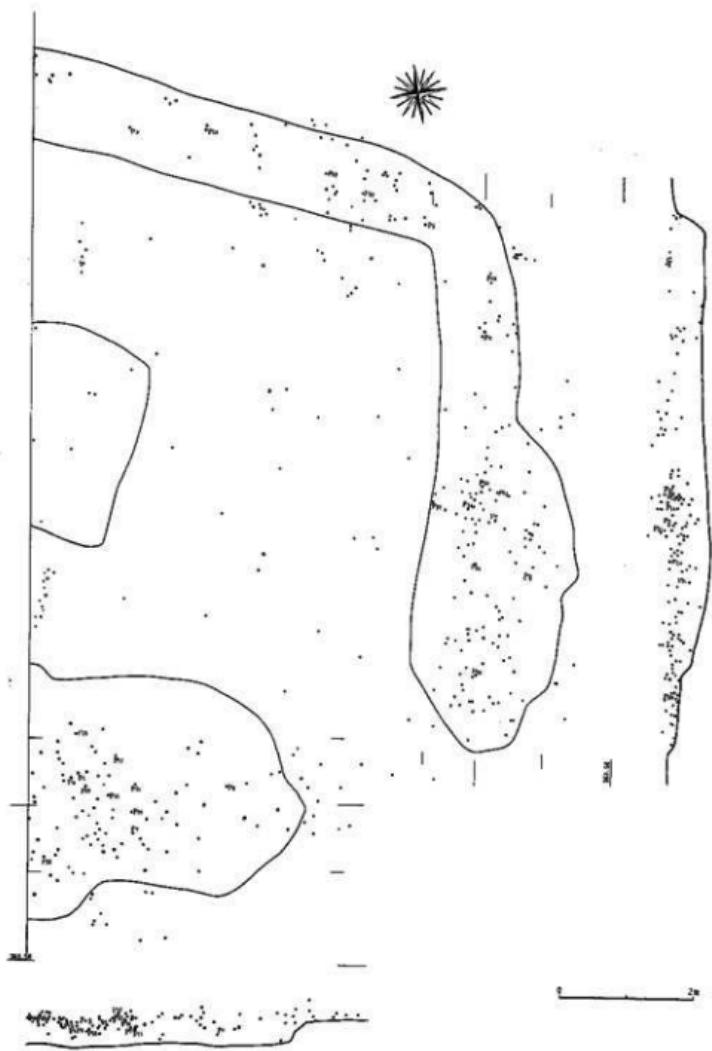
本方形周溝墓はC区に位置する。古墳時代前期を北側を第4号住居址、東側を第6号住居址を切って構築している。また台状部には本方形周溝墓の構築前か後かは不明であるが第8号住居址がある。本方形周溝墓の西部は路線外のため調査できなかったが規模は南北約12.3mを測る。主軸の方向はN-20°Eである。溝は東・北溝はU字状を呈し、南溝は段がある。北溝は幅1.2m、深さ60cm

を測る。東溝の南部は急激に溝幅が広くなり最大で2.3mを測る。南溝は幅が広く3.5mを測る。台状部は若干であるが、比高差があるようである。台状部に主体部は認められなかつたが南溝内溝中に土壤らしき落ち込みが確認された。また東溝東部に東溝と主軸を同じくする楕円形の土壤が確認された。土壤の規模は長径1.3m、短径0.9mの楕円形を呈し深さ0.93mを測る。本土塙は、第4号方形周溝墓に伴うものと考えられる。土壤内の覆土中から古墳時代前期(五領期)の壺の破片が出土した。

遺物の出土状態

(第47図)





第47図 C区第4号方形周溝墓遺物出土図

本方形周溝墓からはきわめて多量の土師器の破片が出土した。土師器は北溝東コーナー付近及び東溝南部及び南溝に多く出土している。遺物はすべて破片で完形のものは1つとしてなかった。またその出土状況は北溝底部からの数点を除いては、溝覆土中に浮いた状態で出土した。

出土遺物（第49図）

本方形周溝墓から土師器の破片が多量に出土し、器種は壺、甕、高杯、器台、紡錘車であった。

壺形土器（第49図1~12）

1はやや内湾気味に立上る口縁部である。調整は、外面は、口縁部は縦のヘラミガキ、頸部は部分的に刷毛目痕を残す。内面は、口縁部は横ナデ、頸部は指頭による押圧痕を有する。丹採されている。北溝覆土中から出土した。

2は口縁部は大きく外反し折返し口縁である。調整は、口縁部内外面とも横ナデを行っている。東溝覆土中から出土した。

3は口縁部はまっすぐ立上り上部で外反し、口唇部にヘラ状工具による切目をもつ。調整は、外面口縁部は斜めの刷毛目、内面口縁部上半は横ナデ、下半は横の刷毛目整形を行っている。東溝覆土中から出土した。

4は口縁部は「く」の字状に屈曲する。調整は、口縁部から頸部にかけての外面は縦の刷毛目整形、口唇部は横ナデを行っている。口縁部内面は横ナデを行っている。南溝覆土中から出土した。

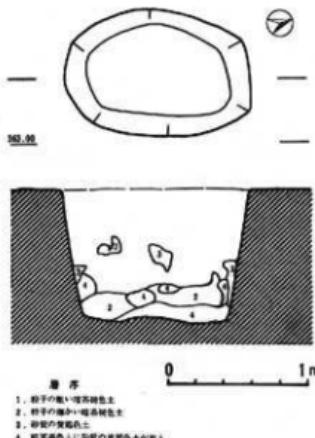
5は4と同様であるが頸部の屈曲がやや強く肩部器肉はやや薄い。調整は外面の口縁部から頸部にかけて縦の刷毛目整形を行い、口唇部は横ナデを行っている。内面は口縁部は横の刷毛目整形を残し、肩部は横のヘラナデを行っている。北溝底部の覆土中から出土した。

6,7は口縁部はラバ状に大きく外反する。調整は、内外面ともに横の刷毛目整形を行っている。南溝覆土中から出土した。

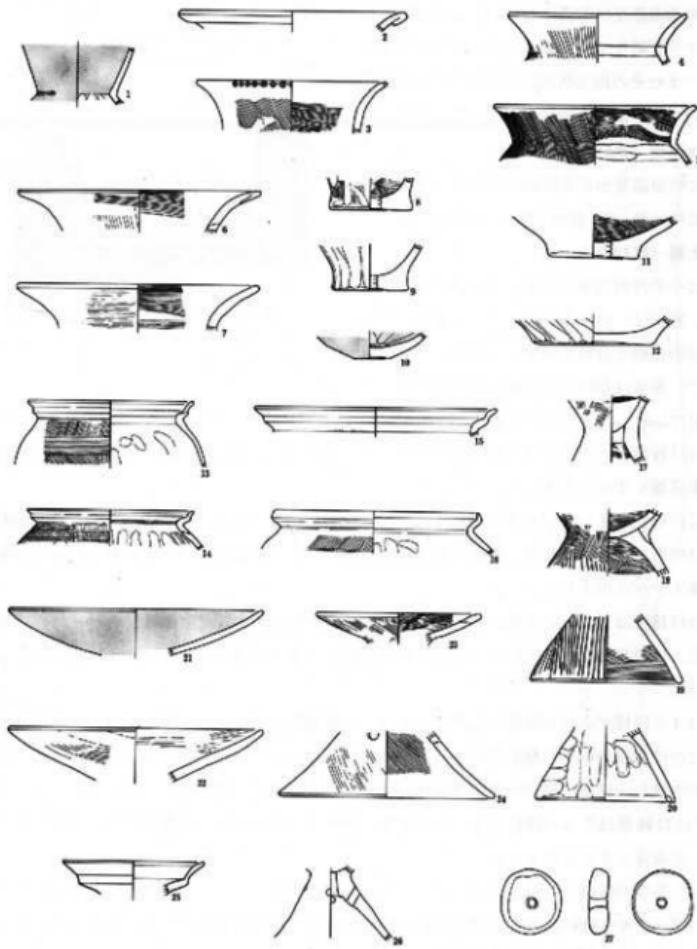
8は小型壺の底部で、粘土のはみ出しがみられる。調整は、胴下部外面は縦の刷毛目整形後、縦のヘラミガキを行った部分に刷毛目痕が残る。内面は横の刷毛目整形痕を残し、底部は木ノ葉底である。南溝覆土中から出土した。

9は胴下部外面は縦のヘラケズリが行われ内面は指頭によるナデが行われている。底部は木ノ葉底である。東溝覆土中から出土した。

10は底部が小さく凹み底で丹彩されている。胴部最大幅は胴下部にあると思われる。調整は、



第48図 C区第4号方形周溝墓東溝外塚



第49図 C区第4号方形周溝墓出土遺物

1 cm

胴下部外面は縦のヘラミガキ、内面は縦のヘラケズリが行われている。北溝覆土中から出土した。

11は底部が高く、調整は、胴下部外面は縦のヘラミガキ、内面は刷毛目整形を残している。底部は縦のヘラケズリを行っている。南溝覆土中から出土した。

12は11と同様大型の壺の底部である。底部はやや上り器肉は薄い。調整は、胴下部外面は縦のヘラケズリ、底部内面は指頭によるナデを行い、底はヘラケズリが行われている。東溝覆土中から出土した。

變形土器（第49図13~20）

13はS字状11縁台付壺の口縁部から胴上部の資料である。肩部はあまり張らないが、胴上部に最大幅があると思われる。肩部に一条の刷毛目による平行線文を有す。調整は、口縁部内外面ともに横ナデを行い、胴部外面は刷毛目整形を残し、内面は指頭による押圧痕を有する。東溝覆土中から出土した。

14は肩部が張るS字状口縁台付壺の資料である。調整は、口縁部は内外面ともに横ナデを行い、胴部外面は縦の刷毛目整形後横に一条の刷毛目による平行線文を有する。内面は指頭による押圧痕を有する。東溝覆土中から出土した。

15は口径の大きいS字状口縁台付壺の口縁部の資料である。調整は、内外面ともに横ナデを行っている。南溝覆土中から出土した。

16は口縁部先端が内湾するS字状口縁台付壺の資料である。肩部に刷毛目による平行線文が引かれている。調整は、口縁部内外面ともに横ナデを行い、胴部外面は刷毛目整形、内面は指頭による押圧痕を有する。南溝覆土中から出土した。

17は台付壺の胴部下部から台部にかけての資料で半球形の粘土塊を埋込んで底を作っている。調整は、外側は縦の刷毛目整形と指頭によるナデを台部に行っている。内面は横の刷毛目整形を行っている。南溝覆土中から出土した。

18は台付壺の胴部下部から台部の資料である。台部はやや内湾する。調整は、外側は縦の刷毛目整形、内面は胴部及び台部とも横の刷毛目整形を残している。北溝覆土中から出土した。

19は台付壺の台部である。台部はやや内湾している。調整は、外側は荒い縦の刷毛目整形、内面は上部が指によるナデ、下部は横の刷毛目整形を残している。北溝覆土中から出土した。

20は台付壺の台部である。台部はやや内湾し、先端は内側に折返している。調整は、台部外面は縦のヘラケズリ、内面は指頭による押圧痕を行っている。東溝覆土中から出土した。

高环形土器（第49図21~24）

21は環部が大きく浅く大きく開く。調整は、内外面ともに横ナデを行っている。丹採されている。南溝覆土中から出土した。

22は粗製で器肉はやや厚く、環部は浅く大きく開く。調整は、环部内外面とも筋めの刷毛目整形後ヘラにより横ナデを行っている。北溝覆土中から出土した。

23は粗製で杯部は浅くやや小さい。調整は、内外面ともに斜めの刷毛目整形を行っている。北溝覆土中から出土した。

24は高杯の比較的大きい資料である。調整は、脚部外面は斜めの刷毛目整形後縫のヘラミガキ、内面は中央部は刷毛目整形を残し先端は横ナデを行っている。

器台形土器（第49図 25, 26）

25は器受部に縫を有する。調整は、器受部先端は内外面ともに横ナデを行い、内面は縫のナデを行っている。南溝覆土中から出土した。

26は4孔を有する器台の脚部で器受部底部には孔が穿っている。脚部外面は縫の細いヘラミガキ、内面は横の細いヘラミガキを行っている。南溝覆土中から出土した。

土製筋錐車（第49図 27）

27は筋錐車と思われる。直径 5.0 cm、厚さ 1.5 cm、孔の直径は 7 mm を測る。

第13表 C区第4号方形周溝墓出土土器一覧表

器名番号	器形	口径 器高	土器の種類	器形の特徴	調整		備考
					外面	内面	
1	壺	-	粘土 精々 色調 外面茶褐色 内面赤褐色	やや内凹気味に立上 り縫部である。	口縫部はタテのヘ ラミガキ	口縫部はヨコナデ 縫部は指摘による 押圧痕	現存 口縫部から 肩部にかけて $\frac{1}{4}$ 周
		-	地成 良好		縫部はわずかに刷 毛目痕が残る。		
		25.0	粘土 砂粒を多く 含む 色調 茶褐色 地成 良好	口縫部は大きく外反し、 折返し縫である。	口縫部はヨコナデ	口縫部はヨコナデ	
2	壺	15.0	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 地成 良好	口縫部はまっすぐ立上 り上部で外反し、口縫 部に切口をもつ。	口縫部は斜めの刷 毛目、口縫部近く はヨコナデ、口縫 部は刷毛状工具の 切口をもつ。	口縫部の上半はヨ コナデ 下半はヨコの刷毛 目	現存 口縫部 $\frac{1}{6}$ 周
		-					
3	壺	14.0	粘土 細かい砂粒 を多く含む 色調 黄褐色 地成 良好	口縫部は「く」の字状 に削曲する。	口縫部近くはヨコ ナデ 口縫部から縫部に かけてタテの刷毛 目	口縫部はヨコナデ	現存 口縫部から 肩部にかけて $\frac{1}{3}$ 周
		-					
4	壺	16.0	粘土 細かい砂粒 を多く含む 色調 黄褐色 地成 良好	縫部が「く」の字状に 削曲し、肩部の 器肉は薄い。	口縫部はヨコナデ 口縫部から縫部に かけてタテの刷毛 目	口縫部はヨコの刷 毛目、肩部内側は ヨコのヘラナデ	現存 口縫部から 肩部にかけて $\frac{1}{2}$ 周
		-					
5	壺	19.0	粘土 砂粒を含む 色調 茶褐色 地成 良好	口縫部はラップ状に大 きく外反する。	口縫部はヨコの刷 毛目	口縫部はヨコの刷 毛目、	現存 口縫部 $\frac{1}{6}$ 周
		-					
6	壺	19.0	粘土 砂粒を含む 色調 茶褐色 地成 良好	口縫部はラップ状に大き く外反する。	口縫部はヨコの刷 毛目	口縫部はヨコの刷 毛目	現存 口縫部 $\frac{1}{6}$ 周
		-					
7	壺	19.0	粘土 砂粒を含む 色調 外面暗褐色 内面黒褐色 地成 良好	口縫部はラップ状に大き く外反する。	口縫部はヨコの刷 毛目整形後、ヨコ ナデ	口縫部はヨコの刷 毛目	現存 口縫部 $\frac{1}{6}$ 周
		-					

8	臺	(底径) 7.0 —	粘土 砂粒・小石 を含む 色調 外面 黄褐色 内面 黄褐色 焼成 良好	小型の壺の底部で、底 部は粘土のはみ出しが みられる。平底である。	肩下部はタテの刷 毛目機、タテのヘ ラミガキ、底部は 木の彫刻	肩下部はヨコの刷 毛目	現存 肩下部から 底部にかけて $\frac{1}{2}$ 周 外面スス付着
9	壺	(底径) 6.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 増茶褐色 焼成 良好	小型の壺の底部と思われ る。平底である。	肩下部はタテのヘ ラケズリ 底部は木ノ彫刻	肩下部は指頭によ るナデ	現存 肩下部から 底部にかけて $\frac{1}{2}$ 周 外面スス付着
10	壺	(底径) 2.6 —	粘土 精々 色調 赤褐色 焼成 良好	底部が小さく凹底であ る。内外ともに丹影され、小型丸底壺。	肩下部はタテのヘ ラミガキ	肩下部はタテのヘ ラミガキ	
11	壺	(底径) 7.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 外面 黑褐色 内面 黄褐色 焼成 良好	平底。 底部がやや高い。	肩下部はタテのヘ ラミガキ 底部はヘラケズリ	肩下部から底部に かけて刷毛目	現存 肩下部から 底部にかけて $\frac{1}{4}$ 周
12	壺	(底径) 9.0 —	粘土 精々され、細 い砂粒を含む 色調 外面 黄褐色 内面 茶褐色 焼成 良好	平底。 底部がやや上る。	肩下部はタテのヘ ラケズリ 底部はヘラケズリ	底部は指頭による ナデ	現存 並部 $\frac{1}{2}$ 周
13	壺	13.0 —	粘土 砂粒(石英・雲 母等を多く含む) 色調 外面 黃褐色 内面 茶褐色 焼成 良好	S字状口縁で肩部があ まり張らないと思われる。 肩部に一条の刷毛目 の平行線文が入る。	口縁部はヨコナデ 肩部から胴部にか けてタテの刷毛目 で、ヨコに一条の 平行線文が入る。	口縁部がヨコナデ、 肩部は指頭による 押圧紋を残す。	現存 口縁部から 胴上部にかけて $\frac{1}{5}$ 周
14	壺	13.0 —	粘土 砂粒(石英・雲 母等を多く含む) 色調 外面 黄褐色 内面 茶褐色 焼成 良好	S字状口縁で肩部が張 るものと思われる。肩 部に一条の刷毛目の平 行線文が入る。	口縁部はヨコナデ 肩部から胴部にか けてタテの刷毛目 で、ヨコに一条の 平行線文が入る。	口縁部はヨコナデ、 肩部は指頭による 押圧紋。	現存 口縁部から 胴上部にかけて $\frac{3}{5}$ 周
15	壺	19.0 —	粘土 砂粒(石英・母 母)を多く含む 色調 外面 黄褐色 内面 増黄褐色 焼成 良好	S字状口縁	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ	現存 口縁部のみ $\frac{1}{5}$ 周 外面スス付着
16	壺	16.0 —	粘土 砂粒(石英・雲 母)を多く含む 色調 增茶褐色 焼成 良好	S字口縁の 横で口縁 肩部が内済する。肩部に ヨコに刷毛目による平 行線文が入る。	S字口縁部はヨコナデ 肩部はタテの刷毛 目とヨコの刷毛目 による平行線文	S字口縁部から肩部に かけてヨコナデ、 肩部は指頭による 押圧紋。	現存 S字口縁から 肩部にかけて $\frac{1}{5}$ 周
17	壺	—	粘土 砂粒(石英・雲 母)を多く含む 色調 黄褐色 焼成 良好	合併窓の右部と胴部の 接合部で、胴部の底部 として粘土塊を埋め込 んでいる。	肩下部はタテの刷 毛目。右部の上部は 指頭によるナデ	底部はヨコの刷毛 目。右部の上部は ヨコの刷毛目	
18	壺	—	粘土 砂粒(石英・雲 母)を多く含む 色調 茶褐色 焼成 良好	合併窓の右部と胴部の 接合部で、右部はやや内済する。	右部はタテの刷毛 目	底部はヨコの刷毛 目 右部はヨコの刷毛 目	
19	壺	(底径) 12.0 —	粘土 砂粒(石英・ 雲母)を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	合併窓の右部である。 右部はやや内済する。	荒いタテの刷毛目	細いヨコの刷毛目	現存 右部 $\frac{1}{4}$ 周

20	壺 —	(底径) 11.0 —	胎土 砂粒(石英・ 雲母)を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	古付痕の右部である。 右部はやや内凹し、先 端を内側に折返す。	右部はヘラケズリ	指標による押住痕	現存 右部 $\frac{3}{4}$ 周
21	高 环	20.0 —	胎土 砂粒を含む 色調 赤褐色 焼成 良好	环部が大きく、浅く開 く。丹形されている。	环部はヨコナデ	环部はヨコナデ	現存 环部 $\frac{1}{4}$ 周
22	高 环	20.0 —	胎土 砂粒を含む 色調 外面黄褐色 内面黒褐色 焼成 良好	粗製で环部は大きく、 浅く開く。	环部は削めの刷毛 目整形後、ヘラの ヨコナデ	环部は削めの刷毛 目整形後、ヘラの ヨコナデ	現存 环部 $\frac{1}{4}$ 周 外面 スス付基
23	高 环	13.0 —	胎土 精々されてい るが、細かい 砂粒を含む 色調 増茶褐色 焼成 良好	粗製で、环部はやや小 さい。	环部は削めの刷毛 目	环部は削めの刷毛 目	現存 器全周 $\frac{3}{4}$ 周
24	高 环	(底径) 17.0 —	胎土 精々されてい る 色調 外面赤褐色 内面黒茶褐色 焼成 良好	高环の脚部で3孔を有 する。	脚部は削めの刷毛 目整形後、タチの ヘラミガキ	脚部中央は刷毛目 残 先端はヨコナデ	現存 脚部下の $\frac{1}{4}$ 周
25	器 台	11.0 —	胎土 精々 色調 茶褐色 焼成 良好	器台の器受部で棱を有 する。	器受部はヨコナデ	器受部先端はヨコ ナデ それ以下はタチナ デ	現存 器受部 $\frac{1}{4}$ 周
26	器 台	— —	胎土 精々されて おり。砂粒を若干含む 色調 赤褐色 焼成 良好	器台の脚部で、孔は4 孔。 丹形されている。	脚部はタチの粗い ヘラミガキ	脚部はヨコの粗い ヘラミガキ	現存 脚部 $\frac{3}{4}$ 周
27	筋 縫車	直径 5.0 厚さ 1.5	胎土 砂粒を多く含 む 色調 茶褐色 焼成 良好	比較的器内は薄い。 孔径約 8mm	—	—	—

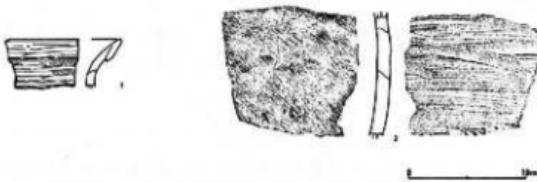
C区第4号方形周溝墓土塊出土遺物（第50図）

本土壙内から出土した遺物は2点のみでいずれも要形土器の破片であった。

要形土器（第50図1.2）

1は口縁部は直立しながらやや内反し、口縁部に折返しをもつ。調整は、外面は横、内面は横の刷毛目整形後横にヘラミガキを行っている。

2は壺の脚部破片である。調整は、外面は細かく弧状にヘラミガキを行い、内面は粗い横の刷毛目整形痕を残している。



第50図 C区第2号方形周溝墓東溝外土塚出土遺物

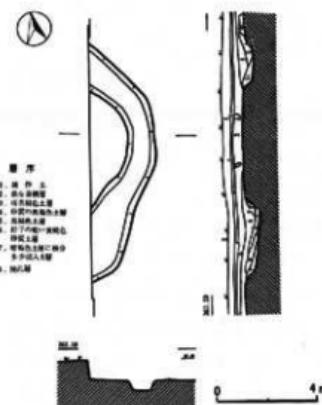
第14表 C区第4号方形周溝墓土壤出土土器一覧表

測定番号	器形	口径 器面	土器の觀察	器 形 の 特 徴	調		備 考
					外 面	内 面	
1	実	20.0	粘土 砂粒・小石を含む 色調 外面茶褐色 内面暗茶褐色 焼成 良好	口縁部は直立しながらやや外反し、口脣部は折返しである。	口縁部はタテの刷毛目整形後、ヨコのヘラミガキ	口縁部はヨコの刷毛目整形後、ヨコナナ	
2	実	-	粘土 砂粒・小石を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	比較的大きな臺の剥離破片である。	細い斜めの延状のヘラミガキ	ヨコの刷毛目	黒斑あり

15. C区第5号方形周溝墓

遺構(第51図)

本方形周溝墓はC区に位置する。表土下35cmほどで遺構確認面の砂質の黄褐色土層に達し、落ち込みが確認された。本方形周溝墓は東側を1部調査したにすぎなかつたが、ほぼ方形周溝墓とみてさしつかえないと考えられる。方形周溝墓は第3号住居址を切って構築されていた。主軸の方向はN-35°Eである。規模はよくつかめなかつたが溝幅0.6m~1.0mほどで狭い。溝内覆土中からは2,3点古墳時代前期(五領期)の土師器の破片が出土した。

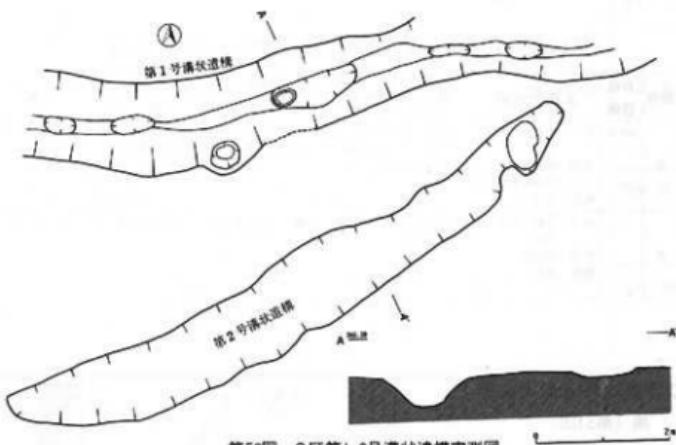


第51図 C区第5号方形周溝墓実測図

16. C区第1号溝状遺構と出土遺物

遺構（第52図、第53図）

本溝状遺構はC区北側に位置する。幅1.3m、深さ40cm～60cmを測り東西に伸びている。底部には部分的にピット状の遺構が検出されている。西側が深く東側はやや浅くなっている。遺物は第53図のとおり覆土中の全般に渡って古墳時代前期(五領期)の土師器の破片が発見された様な状態で出土した。特にピット状の遺構内には摩耗した土師器の細片がブロック状に堆積して出土した。本溝状遺構は方形周溝墓の溝ではなく、遺物の発見溝的な性格が強く感じられた。



第52図 C区第1,2号溝状遺構実測図

出土遺物（第54-1図、第54-2図）

本溝状遺構から出土した土師器は総数で800余点であった。器種は壺、甌、手捏、高坪、器台であった。

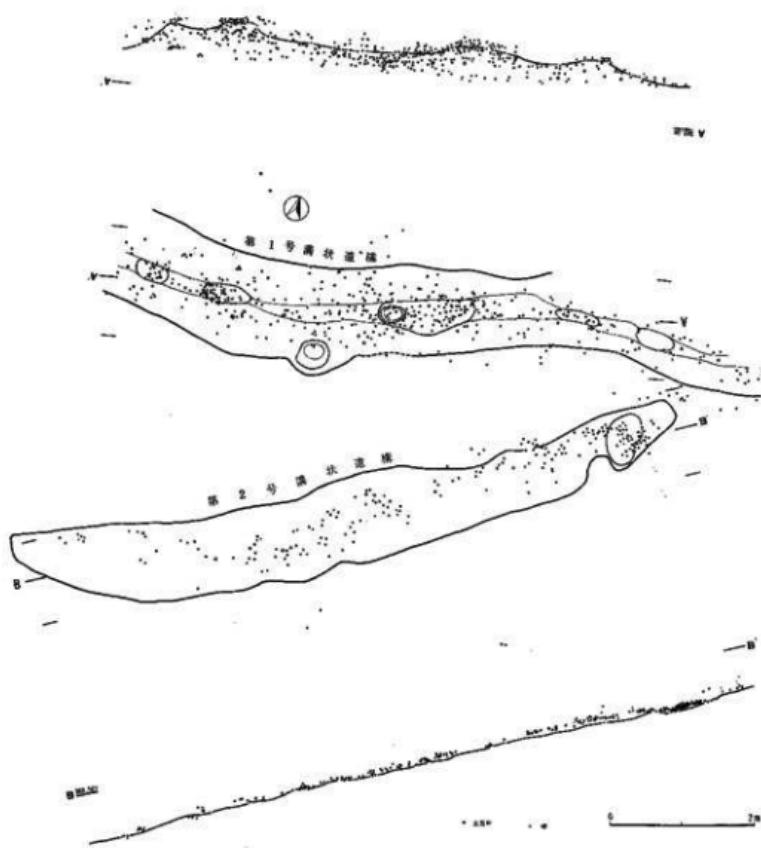
壺形土器（第54-1図1～14）

1は口唇部に折返しをもち、口縁部は外反する。調整は、外面は口唇部は横ナデが行われ、口縁部には縦の刷毛目整形痕を残す。内面は横ナデが行われている。

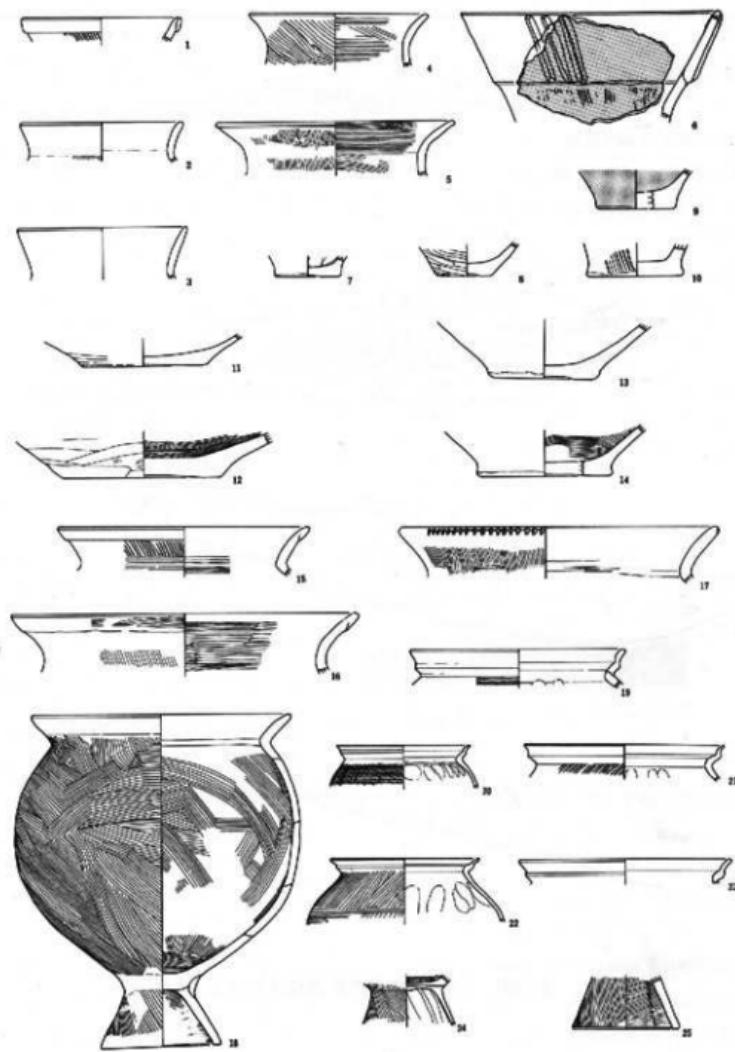
2,3は口縁部は直立ぎみでやや外反する。調整は、外面の口縁部は2は縦の刷毛目整形後横ナデを行い、3は縦の細いヘラミガキを行っている。内面は2,3とともに横ナデを行っている。

4は口縁部は直立後外反する。調整は、外面の口縁部は斜めの刷毛目整形痕を残し、内面の口縁部は斜め及び横の刷毛目整形後横ナデを行っている。

5は4と同様の器形と思われ、口縁部は直立後外反する。調整は、外面の口縁部は縦の刷毛



第53図 C区第1,2号溝状遺構遺物出土図



第54-1図 C区第1号溝状遺構出土遺物

目整形後横ナデを行っている。内面の口縁部は横ナデを行っている。

6は口縁部は複合口縁で、3本1組の棒状浮文が4単位で付してある。丹採されている。調整は、口縁部の上部は継のヘラミガキ、下部は継の刷毛目整形後、継のヘラミガキを行っている。内面は剥落が激しく不明である。

7~10は小型の壺の底部と思われる。8は底がやや上がりしている。あるいは鉢の底部かもしない。9は丹採されている。10は底部に粘土のはみ出しが見られる。調整は、外面胴下部は、7が指頭によるナデを行い、8は斜めのヘラミガキ、9は細い継のヘラミガキ、10は継の刷毛目整形痕を残している。内面は、胴下部は、7は指頭による押圧痕、8,10は指頭によるナデを行っている。10は剥落しており不明である。

11,12は平底で底はやや上がる。底部から胴下部への移行は低く移行し、胴部最大幅は下位にあるものと思われる。調整は、胴下部が11は斜め、12は横のヘラケズリを行っている。内面は胴下部から底部にかけて11は指頭によるナデを行い、12は横の刷毛目整形痕を残している。

13,14はやはり平底であるが、11,12に比べ底部から胴下部への移行はやや高く、13は底に様の圧痕を残す。調整は、外面の胴下部は13,14ともに指頭による横ナデが行われ、内面は胴下部から底部にかけて横の刷毛目整形痕を残す。なお13の刷毛目整形痕は剥落が激しく不鮮明である。

彫形土器（第54-1図15~25、第54-2図26・27）

15,16は口縁部上部に複合口縁の粘土貼付けの退下とも思える稜を有する。調整は、15は外面は口唇部付近は横ナデが行われ、口縁部中央部は継の粗い刷毛目整形を残し、下部は横ナデを行っている。内面の口縁部は横の刷毛目整形後、横のヘラミガキを行っている。16は外面は口唇部は横の刷毛目、口縁部は継の刷毛目整形後、横ナデを行っている。内面は口唇部付近は横ナデが行われ、口縁部は横のヘラミガキを行っている。

17は口唇部にヘラ状工具による刻目をもつ。頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。調整は、外面は口唇部は横ナデを行い、口縁部は継の刷毛目整形痕を残す。内面は口縁部は横の刷毛目整形後横ナデを行っている。

18は単口縁の台付甕で頭部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。胴部と台部の接合部には粘土帶の貼付けが見られる。調整は、外面は口縁部は横ナデを行い、胴部と台部は粗い刷毛目整形後指頭によるナデを行っている。

19~23はS字状口縁台付甕の口縁部の資料である。

19は器肉が厚い。調整は、口縁部内外面とも横ナデが行われ、肩部外面は継の刷毛目整形後、横に一条刷毛目による平行線文が引かれている。肩部内面は指頭による押圧痕を有する。

20は口縁部は外反し、肩部がやや張る。口径10cmで比較的小型の台付甕で、調整は、口縁部内外面とも横ナデを行い、肩部は継の刷毛目整形後横に刷毛目による平行線が引かれ、格子目を作っている。内面は肩部に指頭による押圧痕を有する。

21は20と同様の口縁部を有し、調整は、口縁部内外面とも丁寧な横ナデを行い、肩部外面は粗い刷毛目、内面は指頭による押圧痕を有する。

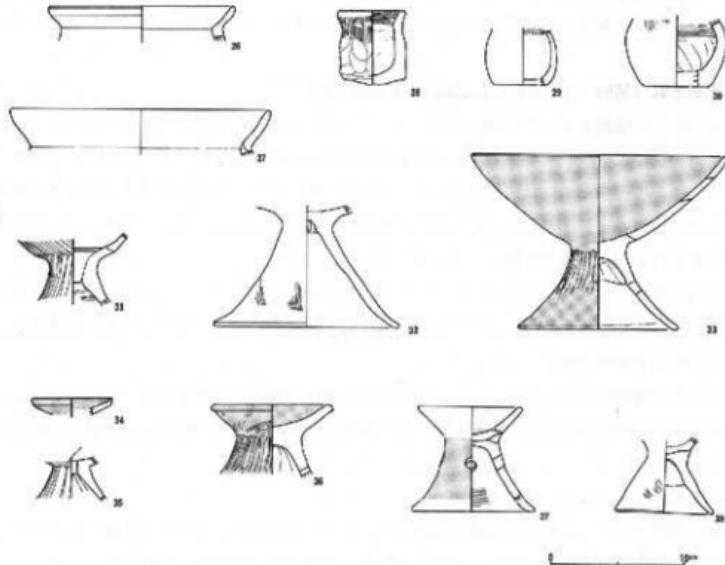
22は肩部がやや張る。口縁部は下部の器肉が太く丸味を帯び、上部は細く突出している。口径は11cmを測る。口縁部外面は丁寧な横ナデを行い、肩部外面は斜めの刷毛目整形後胴上部に横に刷毛目による平行線文が引かれている。内面は指頭による押圧痕を有する。

23は22と同様の口縁部を有する。

24は台付斐形土器の胴下部と台部の接合部で口縁部は低く、開いている。調整は、外面は縦の刷毛目整形痕を残し、内面は胴下部は横の刷毛目整形痕を残し、台部内部は指頭による押圧痕を有する。

25は台付斐の台部で、台部は小さく先端がやや折曲がる。調整は、外面は縦の刷毛目整形、内面は斜めの刷毛目整形痕を残している。

26, 27は広口の口縁をもち、口縁部は外傾しながらやや内湾する。調整は、内外面ともに横ナデを行っている。



第54-2図 C区第1号溝状遺構出土遺物

手捏形土器（第54-2図28-30）

28は鉢形で口縁部はやや外反する。調整は、外面は口縁部から頸部にかけて縱の刷毛目整形痕を残し、胴部は指頭による押えぎみのナデを行っている。内面は口縁部が横の刷毛目整形痕を残し、胴部は指頭による横のナデを行っている。

29は胴部はやや張る。調整は、外部胴部は指頭によるナデを行い、内面は口縁部に縱の刷毛目整形痕を残している。胴部は指頭によるナデを行っている。

30は29と同様胴部がやや張る。調整は、胴部外面に刷毛目整形痕が部分的に残る。内面は胴上部は横の刷毛目整形痕を、下部は斜めの指頭によるナデを行っている。

窓坏形土器（第54-2図31-33）

31は坏部と脚部の接合部で嵌込式である。坏部下部に稜をもつ。調整は、外面は坏部は斜め、脚部は縱の丁寧なヘラミガキを行っている。内面は坏部は指頭によるナデ、脚部はヘラケズリを行っている。

32は脚部は比較的大きく高く開く。孔を有しない。調整は、外面は縱の刷毛目整形後ヘラミガキを行っている。内面は脚部上部はヘラケズリが行われている。

33は坏部が大きく開き、脚部は小さい。丹彩され孔を有する。調整は、外面は坏部が斜めの細い丁寧なヘラミガキを行い、坏部と脚部の接合部は横のヘラミガキを行い、脚部は縱のヘラミガキを行っている。内面は坏部は横のヘラミガキを行い、脚部上部は指頭による押圧痕が認められ、下部は横ナデされている。

器合形土器（第54-2図34-38）

34は器台の器受部である。器受部口縁部は直立し稜を有する。調整は、器受部外面は縱の細いヘラミガキを行い、内面は横ナデを行っている。

35は器受部下部から脚部にかけての資料である。調整は、外面は縱方向のヘラミガキ、内面はヘラ状工具により横のヘラケズリを行っている。

36は器受部は小さく、脚部は比較的大きい。3孔を有し丹彩されている。調整は、外面は器受部が刷毛目整形後横ナデを行い、脚部は縱のヘラミガキを行っている。内面は器受部は剥落している。脚部は指頭による押圧痕が認められる。

37は36と同様の器形を呈するものと思われ、4孔を有する。丹彩されている。調整は、脚部外面は縱のヘラミガキが行われ、内面は、器受部は横ナデを行っている。脚部は横の刷毛目整形後横ナデを行っている。

38は脚部は小さく開く。調整は、外面は、脚部が斜めの刷毛目整形後、縱のナデを行っている。内面は、脚部上部はヘラ状工具による横のヘラケズリで、下部は横の刷毛目整形後ナデを行っている。

第15表 C区第1号溝状造構出土土器一覧表

探査番号	器形	口径 器高	土器の性質	器形の特徴	調 整		備考
					外 面	内 面	
1	壺	12.0	粘土 精々され 細い砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	口縁部は斜めに外反し、 口付部は折返し口縁である。	口付部はヨコナデ 口縁部はタテの崩毛目	口縁部はヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{6}$ 周
2	壺	12.0 -	粘土 細かい砂粒を含む 色調 内面赤褐色 焼成 良好	口縁部は直立ぎみで、 やや外反する。	口縁部はタテの崩毛目整形後、ヨコナデ	口縁部はヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{2}$ 周
3	壺	12.4 -	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	口縁部は直立ぎみで、 やや外反する。	口縁部はタテの崩毛目 ヘラミガキ	口縁部はヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
4	壺	13.0 -	粘土 細かい砂粒を含む 色調 外面赤褐色 内面茶褐色 焼成 良好	口縁部は直立後、外反する。	口縁部は斜めの崩毛目	口縁部は斜め及びヨコの崩毛目整形後、ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
5	壺	18.0 -	粘土 細かい砂粒を多く含む 色調 明褐色 焼成 良好	口縁部は直立後、外反する。	口縁部はタテの崩毛目整形後、ヨコナデ	口縁部はヨコの崩毛目	現存 口縁部 $\frac{1}{5}$ 周
6	壺	- -	粘土 砂粒・小石を含む 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部は複合口縁で、 3本1組の棒状突起が 4単位つく。	口縁部は上部がタテのヘラミガキ、 下部は崩毛目整形後、タテのヘラミガキ	調査により不明	現存 口縁部 $\frac{1}{4}$ 周
7	壺	(底径) 10.0 -	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	小型の壺の底部である。平底。	剥下部は指頭によるナーテ	剥下部は指頭による押圧痕	
8	壺	(底径) 4.0 -	粘土 砂粒を含む 色調 外面赤褐色 内面茶褐色 焼成 良好	小型の壺の底部で、底 がやや上っている。	剥下部は斜めのヘラミガキ	剥下部から底部は指頭によるナーテ	
9	壺	(底径) 6.0 -	粘土 砂粒を含む 色調 赤褐色 焼成 良好	小型の壺の底部である。平底、片影されている。	剥下部は細いタテのヘラミガキ	剥下部から底部にかけて剥落がはげしく不明	現存 口縁部の $\frac{1}{2}$ 周
10	壺	(底径) 7.0 -	粘土 砂粒を多く含む 色調 外面茶褐色 内面茶褐色 焼成 良好	小型の壺の底部で、底 部に粘土のはみ出しが認められる。	剥下部はタテの崩毛目	剥下部から底部にかけてハクラ部は剥下部から底部は指頭によるナーテ	
11	壺	(底径) 9.0 -	粘土 多量の砂粒を含む 色調 外面黄褐色 内面灰褐色 焼成 良好	平底で側部最大幅が下 底にあるものと思われる。	剥下部は斜めのヘラミガキ 木の葉底	剥下部から底部にかけて指頭のナーテ	

12	亞	(底径) 11.6 —	粘土 砂粒を多く含む 色調 黄褐色 焼成 良好	平底で、阿那岐大瓶が下位にあるものと思われる。	瓶下部はヨコのへラケズリ 木ノ葉底	瓶下部から底部にかけてヨコの刷毛目	
13	東	(底径) 8.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	平底。底部がやや凹む。 底に様の压痕を残す。	瓶下部は指頭によるヨコナデ	瓶下部から底部にかけてヨコの刷毛目 底が残るようであるが、剥落している。	様の压痕
14	亞	(底径) 10.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 外面茶褐色 内面灰褐色 焼成 良好	平底。	瓶下部は指頭によるヨコナデ	瓶下部から底部にかけてヨコの刷毛目	現存 瓶下部 $\frac{2}{3}$ 剥落
15	東	19.0 —	粘土 砂粒を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	颈部が「くの字」状に曲り、口唇部は粘土の貼付けにより、後ができる。	口唇部付近はヨコナデ。 口唇部中央部はタテの刷毛目。 下部はヨコナデ	口唇部はヨコの刷毛目整形後、ヨコのヘラミガキ	現存 口縁部 $\frac{1}{6}$ 剥落
16	東	26.0 —	粘土 砂粒を多く含む 色調 外面黒褐色 内面茶褐色 焼成 良好	口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は粘土の貼付けにより複ができる。	口唇部はヨコの刷毛目。 口縁部はタテの刷毛目整形後、ヨコナデ	口唇部付近はヨコナデ 口縁部はヨコの刷毛目整形後ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{6}$ 剥落
17	東	24.0 —	粘土 砂粒を多く含む 色調 外面茶褐色 内面黒褐色 焼成 良好	口縁部は外反し、口唇部に凹凸をもつ	口唇部はヨコナデ 口縁部はタテの刷毛目	口縁部はヨコの刷毛目整形後ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{5}$ 剥落
18	東	29.2 25.0	粘土 小石を多く含む 色調 外面茶褐色 内面黒褐色 焼成 良好	瓶口縁の台付裏で、瓶部は「く」の字状に屈曲する。瓶頭と台部の接合部は粘土層の貼付けがみられる。	口縁部はヨコナデ。 瓶頭は刷毛目。台部は先端部のみ刷毛目整形後ヨコナデ	口縁部はヨコナデ。 肩部はタテの刷毛目整形後ヨコナデ 指頭によるナデ	スヌ付着
19	東	16.0 —	粘土 砂粒(石英、雲母)を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	S字状口縁で瓶肉が厚く、肩部は平行線文が横に引かれている。	口縁部はヨコナデ。 肩部はタテの刷毛目後、ヨコに一束の平行線文が走る。	口縁部はヨコナデ。 肩部は指頭による押圧痕	現存 口縁部から瓶頭にかけて $\frac{1}{8}$ 剥落 外側スヌ付着
20	東	10.0 —	粘土 細かい砂粒(石英、雲母)を含む。 色調 基褐色 焼成 良好	S字状口縁で肩部が張り、肩部は平行線文が横に引かれている。	口縁部はヨコナデ。 肩部はタテの刷毛目後、ヨコに一束の平行線文が走る。	口縁部はヨコナデ。 肩部は指頭による押圧痕	現存 口縁部から肩部にかけて $\frac{1}{2}$ 剥落 外側スヌ付着
21	東	15.0 —	粘土 砂粒(石英、雲母)を含む 色調 基褐色 焼成 良好	S字状口縁	口縁部はヨコナデ。 肩部は内側の刷毛目	口縁部はヨコナデ。 肩部は指頭による押圧痕	現存 口縁部から肩部にかけて $\frac{1}{5}$ 剥落
22	東	11.0 —	粘土 砂粒(石英、雲母)を含む 色調 外面茶褐色 内面茶褐色 焼成 良好	S字状口縁で肩部がやや張り、肩部は平行線文が横に走る。	口縁部はヨコナデ。 肩部はタテの刷毛目後、ヨコに一束の平行線文が走る。	口縁部はヨコナデ。 肩部は指頭による押圧痕	外側スヌ付着
23	東	16.0 —	粘土 砂粒(石英、雲母)を含む 色調 外面茶褐色 内面茶褐色 焼成 良好	S字状口縁	口縁部はヨコナデ	口縁部ヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{10}$ 剥落

24	實	-	粘土 細かい砂粒 (石英・雲母)を含む 色調 外面及び側 面内面 黄褐色 焼成 良好	台付變形十器の脚下部 と台部の接合部	台部はタテの刷毛 目	脚部底部はヨコの 刷毛目 台部内面は指頭に による押圧痕	
25	實	-	粘土 砂粒・小石 を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	台付變形上器の内部で 先端がやや折り曲る。	台部はタテの刷毛 目	台部は斜めの刷毛 目	現存 台部 $\frac{1}{4}$ 部
26	實	14.0	粘土 粒々 色調 外面黒褐色 内面黄褐色 焼成 良好	口縁部は内凹しながら やや内湾する。 外縁	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{4}$ 部
27	實	19.0	粘土 細い砂粒を 含む 色調 外面暗褐色 内面茶褐色 焼成 良好	口縁部は外傾しながら やや内湾する。	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ	現存 口縁部 $\frac{1}{4}$ 部
28	手 捏	5.0 5.6	粘土 細かい砂粒 を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	鉢形の小形の手作の土 器	口縁部から腹部に かけて、タテの刷 毛目、脚部は指頭 による押圧ざみの ナデ	口縁部はヨコの刷 毛目 脚部は指頭による ヨコのナデ	
29	手 捏	(底径) 4.0 -	粘土 砂粒を含む 色調 外面暗褐色 内面茶褐色 焼成 良好	口縁部はやや外反する ものと思われる。脚部は やや張る。	脚部は指頭による ナデ	脚部はタテの刷毛 目 脚部は指頭による ナデ	現存 脚部 $\frac{1}{2}$ 部
30	手 捏	5.0 -	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	脚部はやや張る。	脚部はタテの刷毛 目整形が部分的に 残り、ザラついて いる。	脚上部はヨコの刷 毛目 下部は斜めの指頭 のナデ	現存 脚部 $\frac{1}{2}$ 部
31	高 环	-	粘土 砂粒・小石 を含む 色調 茶褐色 焼成 良好	环部下部に棱をもつ。 接合部は嵌込式である。	环部は斜めのヘラ ミガキ 脚部はタテのヘラ ミガキ	环部の内面は指頭 によるナデ 脚部はヘラケズリ	
32	高 环	-	粘土 砂粒を含む 色調 黄褐色 焼成 良好	脚部は比較的大きく開 く。 孔を有しない。	脚部はタテの刷毛 目整形後、タテの ヘラミガキ	脚部はヘラケズリ	
33	高 环	19.0 13.2	粘土 砂粒を含む 色調 赤褐色 焼成 良好	环部が大きく開き、脚 部はそれに少し小さい 升形され、3孔を有す る。	环部は斜めのヘラ ミガキ、环部と脚 部の接合部はヨコの ヘラミガキ。脚 部はタテのヘラミ ガキ	环部はヨコのヘラ ミガキ 脚部は上部が指の 押圧痕、下部はヨ コナデ	
34	器 台	6.0 -	粘土 粒々 色調 内外赤褐色 焼成 良好	器受部は小さい。	器受部はタテの細 いヘラミガキ	器受部は横ナデ	
35	器 台	-	粘土 精々されて いる 色調 外面黄褐色 内面暗褐色 焼成 良好	器受部と脚部の接合部 に孔を有する。	器受部と脚部はタ テのヘラミガキ	脚部はヨコのヘラ ケズリ	

36	29 台	9.0 -	粘土 砂粒小石を 多く含む 色調 赤褐色 焼成 良好	器受部が小さく、脚部 は比較的大きい。 3孔を有する。 丹影されている。	器受部は刷毛目整 形後ヨコナデ 脚部はタテのヘラ ミガキ	器受部は剥落して いる。 脚部は指による押 圧痕	
37	25 台	- -	粘土 砂粒を多く含 む 色調 外面赤褐色 内面暗褐色 焼成 良好	器受部は小さく、脚部 も開かない。4孔であ る。丹影されている。	脚部はタテのヘラ ミガキ	器受部はヨコナデ 脚部はヨコの刷毛 整形後ヨコナデ。	
38	第 2 台	- -	粘土 細い砂粒を 多く含む 色調 外面黄褐色 内面茶褐色 焼成 良好	脚部は小さく開く。器 受部もあまり開かない ものと思われる。	脚部は新めの刷毛 目整形後タテのナ デ	脚部は上部がヘラ ヨコケズリで下部 はヨコの刷毛目整 形後ヨコナデ	

17. C区第2号溝状造構と出土遺物

造 構(第52図、第53図)

本溝状造構はC区の第1号溝状造構の南側に位置する。第1号溝状造構と平行ではないが用途は同じ遺物の廃棄溝的なものと思われる。本溝状造構は東側に延び、西端は第3号住居址の上部を掘込んでいた。規模は長さ9.3m、幅0.7m~1.3mを測り、深さは浅く約10cm前後の掘込みであった。遺物は古墳時代前期(五領期)の土器器の破片が廃棄された状態で出土した。

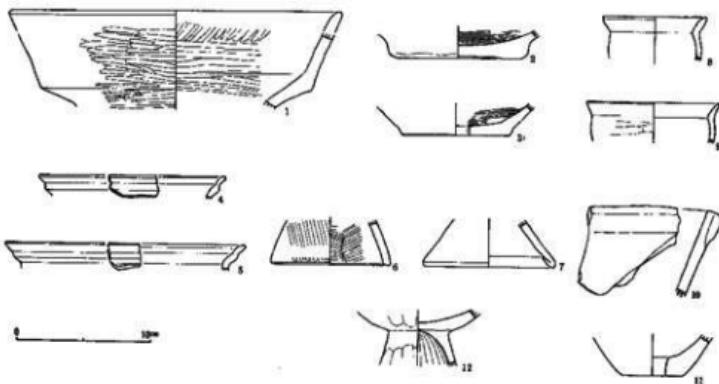
出土遺物(第55図)

本溝状造構から出土した遺物数は300余点であり、全てが破片であった。図示できる器種は壺、甕、甌、瓶、高环であった。

壺形土器(第55図1~3)

1は複合口縁を有する。調整は、外面の口縁部は横のヘラミガキを行い、頸部は縦の刷毛目整形後横のヘラミガキを行っている。内面は口縁部近くは縦のヘラミガキを行い、その下部は横のヘラミガキを行っている。

2,3は平底である。2は底が若干上る。調整は、外面は両者とも底部は指頭による横ナデを行い、内面は2は横の刷毛目、3は横ナデを行っている。



第55図 C区第2号溝状遺構出土遺物

塊形土器（第55図 4～7）

4.5はS字状口縁台付裏の口縁部の細片である。調整は、内外面とも丁寧な横ナデが行われている。

6は台付裏の台部でやや内湾する。調整は、外面は継の刷毛目整形を残すが、先端上部は横ナデを行っている。内面は斜め及び横の刷毛目整形痕を残している。

7は台部が「八」の字状に開き、先端は折返す。調整は、内外面ともに指頭によるナデを行っている。

塊形土器（第55図 8、9）

8,9は口縁部は短く「く」の字状に外反する。調整は、外面は、8は口縁部から胴上部にかけて横ナデを行っている。9は口縁部は横ナデを行い、胴部は横のヘラミガキを行っている。内面は8,9とともに口縁部から胴上部にかけて横ナデを行っている。

鉢形土器（第55図 10,11）

10は鉢形を呈するものと思われる。口縁部近くは粘土帯を貼付け核を有している。調整は、内外面ともに指頭によるナデを行っている。

11は底部で孔を穿っている。調整は、内外面ともに指頭によるナデを行っている。

高坏形土器（第55図 12）

12は坏部が大きく開き、脚部はあまり開かないものと思われる。調整は、内外は坏部及び脚部ともにヘラケズリが行われている。外面は坏部は横ナデを行い、脚部はヘラ状工具による横ケズリを行っている。

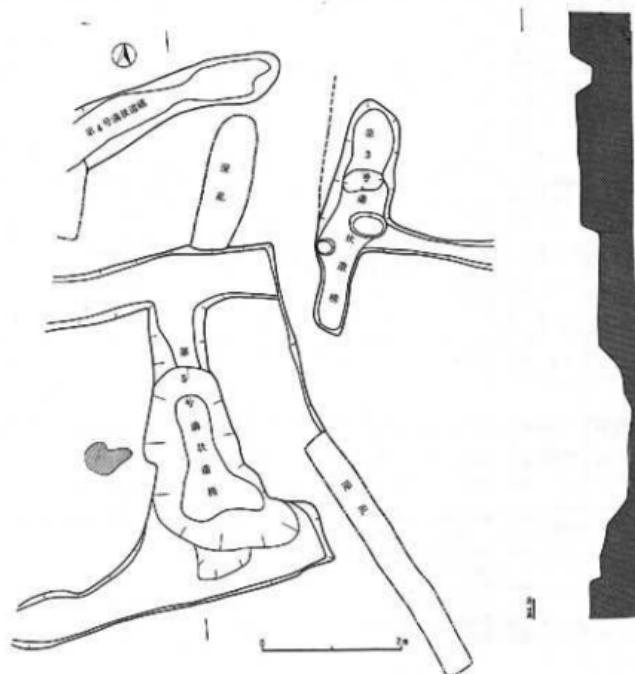
第16表 C区第2号構状遺構出土土器一覧表

擇回番号	器形	口径 器高	土器の特徴	器形の特徴	調 整		備考
					外 面	内 面	
1	盃	-	粘土・砂粒を多く含む。 色調・黄褐色 焼成・良好	口縁部は複合口縁である。	口縁部はヨコのヘラミガキ。腹部はタテのヘラミガキで、その下部はヨコのヘラミガキ	現存口縁部の $\frac{1}{5}$ 用	
2	盃	(底径) 10.0	粘土・砂粒・小石を含む。 色調・外面赤褐色 内面・暗褐色 焼成・良好	平底で底面部が若干上る。	底部は指頭によるナデ	底部はヨコの刷毛目	
3	盃	(底径) 8.0	粘土・砂粒を含む 色調・茶褐色 焼成・良好	平底	底部は指頭によるナデ	底部内面は横ナデ	現存口縁部の $\frac{2}{3}$ 用
4	盃	-	粘土・砂粒(石英、雲母)を多量に含む。 色調・黄褐色 焼成・良好	S字状口縁張の口縁部	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ	現存口縁部の網片スス付着
5	盃	-	粘土・砂粒(石英、雲母)を多量に含む。 色調・黄褐色 焼成・良好	S字状口縁張の口縁部	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ	現存口縁部の網片スス付着
6	盃	(底径) 9.0	粘土・細かい砂粒を含む。 色調・茶褐色 焼成・良好	台付捷の内底部で、やや内溝する。	台部はタテの刷毛目・先端や上部をヨコナデしている。	台部は斜めとヨコの刷毛目	現存台部 $\frac{1}{5}$ 用
7	盃	-	粘土・細かい砂粒を含む。 色調・黄褐色 焼成・良好	S字状口縁合付捷の台部で先端は折返す。	台部は指頭によるナデ	台部は指頭によるナデ	現存台部の $\frac{1}{4}$ 用
8	碗	8.0	粘土・砂粒を含む 色調・黄褐色 焼成・良好	口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部から胴上部にかけてヨコナデ	口縁部から胴上部にかけてヨコナデ	現存口縁部から胴上部にかけて $\frac{1}{2}$ 用
9	盆	10.0	粘土・積々されている。 色調・黄褐色 焼成・良好	口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部はヨコナデ 胴部はヨコのヘラミガキ	口縁部から胴上部にかけてヨコナデ	現存口縁部から胴上部にかけて $\frac{1}{4}$ 用
10	鉢	(底径) 5.0	粘土・細かい砂粒を含む。 色調・外面黄褐色 内面灰褐色 焼成・良好	鉢形を呈するものと思われる。 口縁部に粘土帶貼付けの縫を有する。	指頭によるナデ	指頭によるナデ	
11	鉢	-	粘土・砂粒を含む 色調・茶褐色 焼成・良好	鉢形を呈するものと思われる。	指頭によるヨコナデ	指頭によるヨコナデ	現存胴下部 $\frac{1}{2}$ 用
12	高 杯	-	粘土・様々な色調・茶褐色 焼成・良好	口縁は大きく開き、調査はあまり圓かないものと思われる。	口縁及び脚部とともにヘラケズリ	脚部はヘラケズリ 脚部はヨコナデ	

18. B区第3,4,5号溝状遺構と出土造物

遺構(第56図)

これらの溝状遺構はB区に位置する。この地域は溝状の擾乱もあるが、性格不明の溝状遺構



第56図 B区第3,4,5号溝状遺構実測図

が数箇所見られた。第3号溝状造構は幅90cm、深さ20cmほどで南北に長く3.5mを測り、第2号住居址の南西部を切っている。第4号溝状造構は東西に延び幅60cm~80cm、深さ25cmを測る。第5号溝状造構はH型を呈し、その中央部にピット状の遺構が掘り込んでいた。またその西部には焼土の堆積が見られた。溝の幅は北側及び南側とも60cm~80cmほどで深さは北側で30cm、南側で15cmほどであった。ピットは底部には凹凸があり、深さ50cmを測る。各溝状造構とも覆土中から古墳時代前期(五頭期)の土器片が出土した。

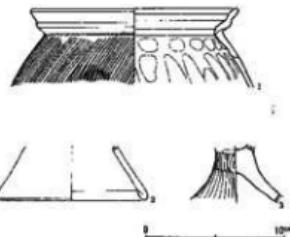
出土遺物(第57図)

第3,4,5号溝状造構から出土した土師器はほとんど細い破片であり図示できるのは次のものだけであった。

変形土器(第57図1, 2)

1はS字状口縁台付器で肩部はあまり張らず、胴部最大幅は胸部のやや上位にあるものと思われる。調整は、口縁部は内外面ともに横ナデを行い、胸部外面は縦の刷毛目整形痕を残し、内面は指頭による押圧痕を有する。第3号溝状造構底部から出土した。

2はS字状口縁台付器の台部で、台部は「ハ」の字状に開く。調整は、内外面ともに指頭による横ナデを行っている。第3号溝状造構底部から出土した。



第57図 B区第3,4号溝状造構出土遺物

第17表 B区3,4号溝状造構出土土器一覧表

発掘番号	基形	口径 基高	土器の觀察	器形の特徴	調整		備考
					外 面	内 面	
1 壶	-	15.0	粘土 砂粒(石英・雲母)を多量に含む 色調 茶褐色 施成 良好	S字状口縁台付窓で、肩部はあまり張らない。 肩部最大幅は胸部のやや上位にある。	口縁部はヨコナデ 胸部はチテの刷毛目	口縁部はヨコナデ 胸部内面に指頭による押圧痕	現存 口縁部から 肩部にかけて スス付着
2 壺	-	-	粘土 砂粒(石英・雲母)を多量に含む 色調 茶褐色 施成 良好	S字状口縁台付窓の台部	指頭によるヨコナデ	指頭によるヨコナデ	現存 台部 スス付着
3 环	-	-	粘土 砂粒を含む 色調 茶褐色 施成 良好	肩部は小さいがやや大きくなる	瓶のヘラミガキ	指頭によるナデ	

19. B区第6号溝状遺構

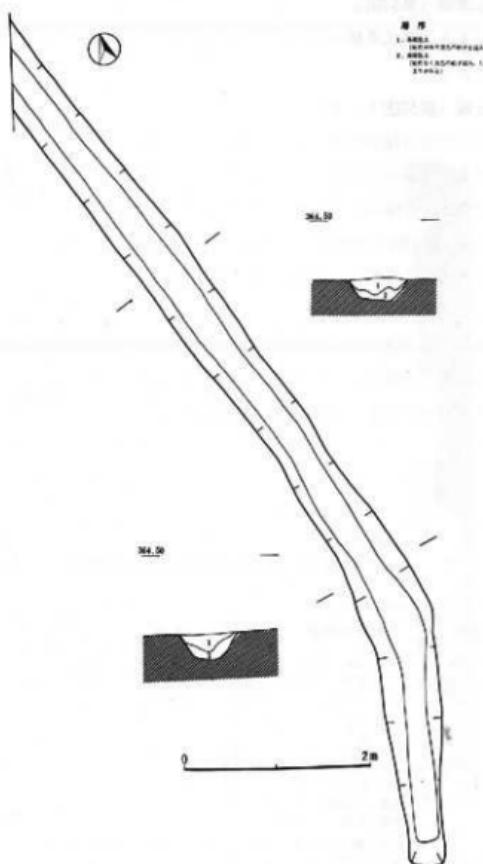
遺構(第58図)

本溝状遺構はB区の北西隅から第2号住居址近くまで続いている。溝中覆土は、上層は砂層が堆積し、下層は粘土質の黒褐色土層が堆積していた。溝幅は5.5cm~7.5cm、深さ20cm~30cmほどであり、北から南へ水路が流れているものと思われる。溝中からの出土遺物は見られず時期は不明である。

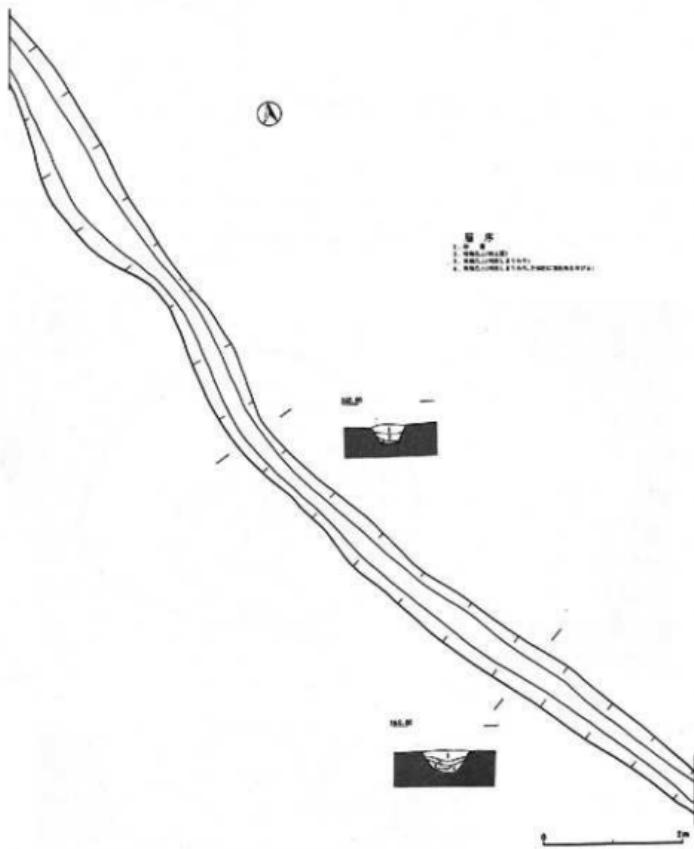
20. A区第7号溝状遺構

遺構(第59図)

本溝状遺構はA区の北西部から南東部へ続いている。北西部では床面までは達していなかったが第1号方形周溝墓と第2号方形周溝墓の間をぬうように続いている。溝中覆土は上層は砂層が堆積し、下層は粘性のある黒褐色土層が堆積し、さらに黒褐色土層は3層に分けられる。溝幅は50cm~100cmで深さ26cm~30cmほどである。溝中からの出土遺物は見られず、時期は不明である。



第58図 B区第6号溝状遺構実測図



第59図 A区第7号溝状遺構実測図

21. C区第1号土壙

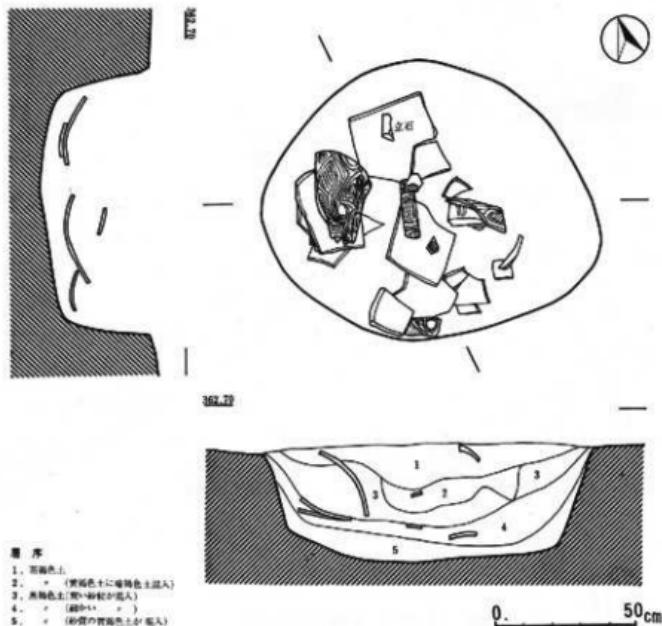
遺構(第60図)

本土壙はC区に位置し、第4号住居址、第3号方形周溝墓南溝及び第5号住居址にそれぞれ上面を削られたものと推察される。土壙は長径1.2m、短径1.0mの楕円形を呈し、遺構確認面からの深さは40cmほどである。出土遺物は繩文式土器が出土し、大形の深鉢形土器1個体を割って、その破片の多くは土壙内底部へ外面を下にして敷くような状態で出土した。また土壙内北部の土器の上面には長さ18cmほどの角螺旋の立石が認められた。

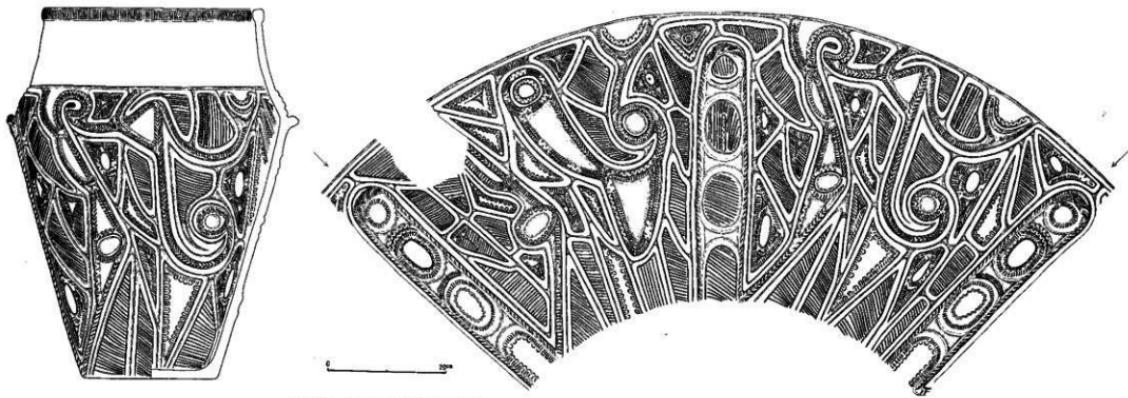
(山崎金夫)

出土遺物(第61図)

本土壙内から出土した繩文式土器は、第61図の1個体の破片のみであった。口径38.7cm、胴部最大径51.0cm、底径23.3cm、器高64.7cmを計る無頸胴張りのタル形を呈する大型の深



第60図 C区第1号土壙



第61図 C区第1号土塚出土遺物

鉢形土器である。胴部の上半はやや黒みを帯びた暗褐色を呈し、下半は赤褐色を呈している。これは二次的に火熱を加えられたことをものとする。口唇は内外共にやや肥厚しており、外面のその部分には竪状工具によって細い縱方向の沈線が施文されている。以下約11cmほどの幅で無文帯が形成されて1本の浅くて太い沈線を境として以下体部文様帯となる。体部文様帯は余白なく底部ぎりぎりまで全面にわたって装飾の手が加えられている。

体部文様帯は粘土紐の貼付によるΩ字状の隆線モチーフ2つによって2つに区画されている。それら2つの大単位をAとA'にして理解するならば、両大単位はそれぞれ抽象化された異なる人体文2つから成り立っている。それもAのものとA'のものとでは、かなりの類似点が認められるものの若干の相違点も存在する。すなわち、この土器の文様単位構成は、AとA'の2つの大単位とそれらを形づくるaとb、a'とb'の各2つの人体文の単位から成立している。これを表記すると次のようになる(安孫子、1969)。

$$A + A' = (a + b) + (a' + b')$$

また、Ω字状のモチーフを1つの単位c、c'に理解すると、AもA'もc、c'を大単位の出発点としている節があるため、次のように表記することも可能となるだろう。

$$A + A' = (c + a + b) + (c' + a' + b')$$

これらの文様単位の間を竪状工具による太い沈線で隆線化し区画して、沈線・瓜形文・三叉文・鋸齒状刺突文などで自由奔放に装飾を加えている。人体文を表現した隆線は粘土紐の貼付による。施文工具は竪状工具が主体であり、他に半裁竹管状工具が用いられている。

以上のような文様単位構成と施文手法は明らかに勝坂式土器として把握でき、それも勝坂式の中頃——所謂「藤内式」(藤森、1965)——に属するものであろう。人体文と区画文の複雑な関係から見ても、東京西部の勝坂式よりも信州地方のそれに近く思われる。ただこのような大型で特異な器形、念入りで細かな装飾の土器は他に類例を見出できなかった。

(米田明訓)

〈参考文献〉

- 安孫子昭二 1969 「No.46 遺跡——縄文中期前半の土器」 多摩ニュータウン遺跡調査報告書 第7号
- 藤森栄一 1965 「中期中葉の縄文式土器群」 井戸尻

22. C区第2号土壙

遺構(第62図)

本土壙はC区に位置し、第4号方形周溝墓の台状部の第8号住居址の下にある。土壙上部を住居址に切られており、その上面には住居址の張床(2cm~5cm)が認められた。土壙は確認面からの深さ50cmを測る。土壙内上部には直径10cmほどの河原石が集積していた。遺物は検出さ

れなかった。

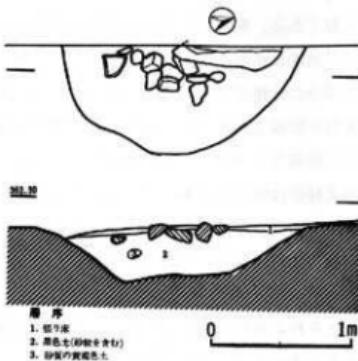
23. B区第3号土壤 遺構(第63図)

本土壤はB区に位置する。土壌の西半分は路線外のため調査することができなかった。規模は直径1mで遺構確認面からの深さ約50cmほどであった。

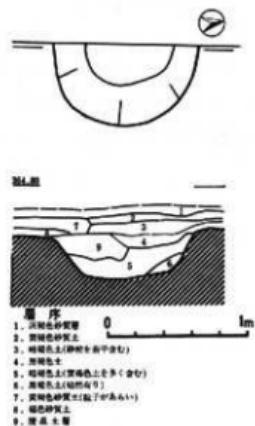
土壌内からは古墳時代前期の土師器(五領式)の破片が出土した。

24. B区第4号土壤 遺構(第64図)

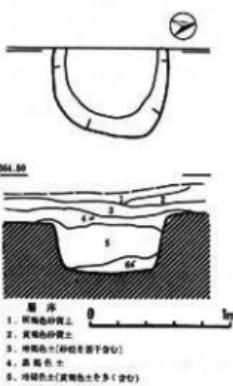
本土壤はB区に位置し、土壌の西半分は路線外のため調査することができなかった。規模は直径80cm、遺構確認面からの深さ約60cmほどであった。土壌内からの遺物の出土は認められなかった。(山崎金夫)



第62図 C区第2号土壤



第63図 B区第3号土壤



第64図 B区第4号土壤

25. その他の出土遺物

これまで各遺構に伴う出土遺物は、その項でそれぞれ紹介してきたところである。これら以外の出土遺物のうちで主なものは次のとおりであった。

(1) 繩文時代の遺物

a. 繩文式土器 (第65図)

I 群 土 器

I 群土器は前期の土器である。

1は、半截竹管による平行沈線が施され、その間に「く」の字型の爪形文を施している。胎土は少量の小粒砂利を混入、焼成はあまり良くない。色調は褐色を呈している。諸磯a式の土器である。

II 群 土 器

II群土器は中期の土器を主体としたものを一括した。以下、I類よりIV類まで、文様別に分類する。

I類土器 (第65図 2,3)

I類土器は沈線文土器を主体とした。(1)はヘラ状のもので沈線が施されている。胎土は少量の砂粒子を混入、焼成は良好で褐色土呈している。五領ヶ台系の土器である。(3)は半截竹管による平行沈線の区画文が施されている。胎土は少量の雲母末を混入、焼成は良好で、チョコレート色を呈している。藤内系の土器である。

II類土器 (第65図 4~7)

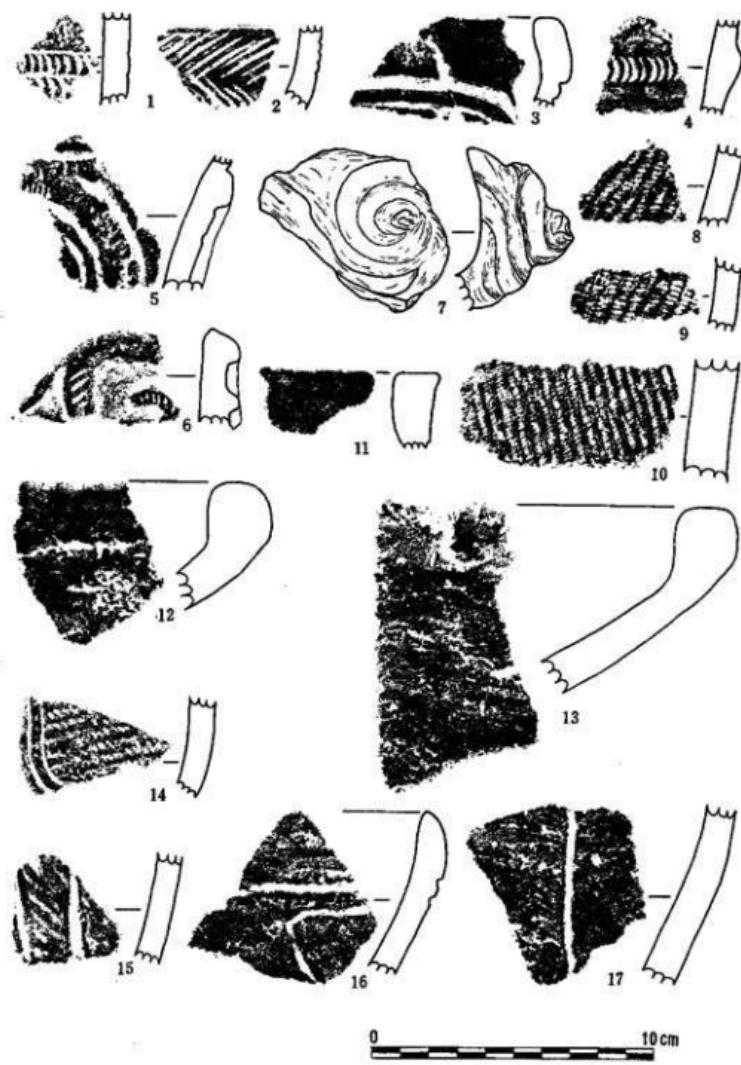
II類土器は隆帶文土器を主体とした。4は低い隆帶上面に「く」の字型の爪形文を施し、1部に繩文が認められる。胎土は少量の小粒の砂利を混入、焼成は良好で黒褐色をしている。藤内系の土器である。5は隆帶で区画された土器で、隆帶上面に爪形土を施し、区画内には沈線が施されている。表面は幾分割落している。胎土は少量の砂利を混入、色調は褐色を呈している。藤内系の土器である。6は抽象文を型取った土器で、隆帶上面に爪形文を施している。胎土は少量の小粒の砂利を混入、焼成は良好で褐色を呈している。藤内系の土器である。7は口縁部付近に付けられた溝文の土器である。胎土は雲母末を混入、焼成は良好で褐色を呈している。藤内系の土器である。

III類土器 (第65図 8~10)

III類土器は繩文を主体とした。8,9は単節繩文 RL が施されている。胎土は少量の小粒の砂利を混入、焼成は良好で褐色を呈している。10は単節繩文 RL が施された胴部あたりの破片である。胎土は少量の小粒の砂利を混入、焼成は良好で褐色を呈している。

IV類土器 (第65図 11~15)

IV類土器は無文土器を主体とした。11は口縁部の土器でヘラ状工具によって、ナデ仕上げさ



第 65 図 その他の出土遺物 I

れているため、器面はよく整形され、光沢をおびている。胎土は小粒の砂利を混入している。焼成は良好、色調は黒褐色を呈している。森内系の土器である。12は口縁部の土器でヘラ状の工具によってナデ仕上されているため器面はよく整形され光沢をおびているが一部剥落している。胎土は小粒の砂利と少量の雲母末を混入し、色調は褐色を呈している。13は口縁部の土器でヘラ状の工具によってナデ仕上げされているため、整形の際に生じた砂利すれの擦痕状のすじが器面に見られる。焼成は良好で褐色を呈している。森内系の浅鉢形の土器である。

III群土器（第65図16,17）

III群土器は後期の土器である。

16,17は地文は無文で、沈線が施されている。胎土は少量の砂利を含み、色調は褐色を呈している。称名寺系の土器である。

b. 石器（第66図）

本遺跡より出土した石器類は打製石斧7点、石匙1点、石鎌1点、磨石1点、凹石1点の計11点である。

1～7は打製石斧で、短櫛形と撥形に分類できる。

1～5は短櫛形打製石斧である。側縁がややふくらみ、刃部は弧をなしているもの（1,3）、側縁が直線をなしているもの（2,4,5）がある。1,2は、側縁および刃部がよく整形されている。3,5は、粗く剥離されており、粗糙な作りである。4は、側縁にいくぶんか自然面を残しているが、よく整形されている。石材は、1～3、5が凝灰岩、4が粘板岩を使用している。

6,7は撥形打製石斧であり、ともに側縁がやや湾曲し、刃部は弧をなしている。6は、やや部厚ではあるが、よく整形されている。7は、東田A区より2つに割れて出土し、刃部と頭部がそれぞれ別の地点から出土している。頭部は1号溝底から出土した単口縁台付甕の下より出土した。頭部は一部欠損している。6,7は、共に凝灰岩を石材に使用している。

8は石英を石材に使用した横形の石匙で、薄く小形である。つまみの部分にかなり入り込んだ整形が施されており、抉りこみの調整剥離がある。

9は黒耀石を石材とした石鎌である。三角形で、基部は比較的抉りこみが浅い。

10は凹石で、閃綠岩を石材として使用している。凹は表に2個、裏に1個あり、石の表面はざらついている。

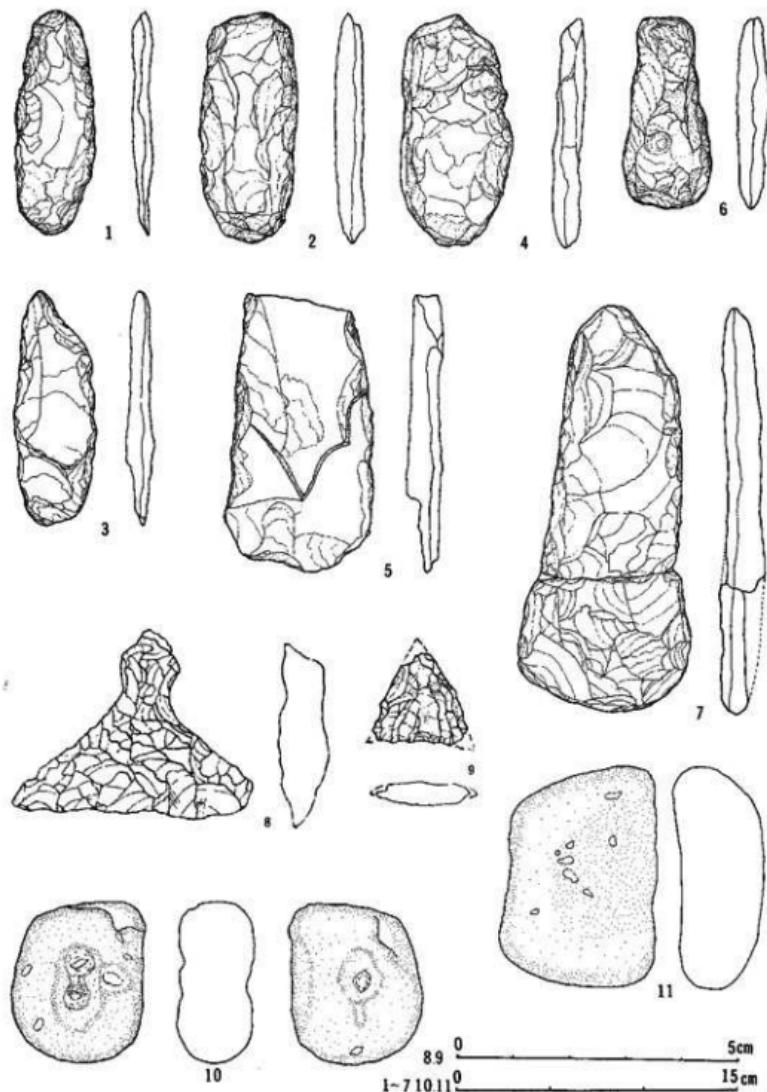
11は磨石で、閃綠岩を石材として使用している。表は浅くくぼんでおり、研磨痕が認められる。

（三浦恭裕）

(2) 古墳時代後期の遺物（第67図）

1～4までは鬼高期のものと思われる。1,2は土師器の环で胴部に棱を有する。1は内面黒色で、外表面は黒褐色を呈している。調整は、内外面ともに細い横のヘラミガキを行っている。

2は茶褐色の呈する。調整は、内外面ともに細い横のヘラミガキを行っている。3は須恵器の

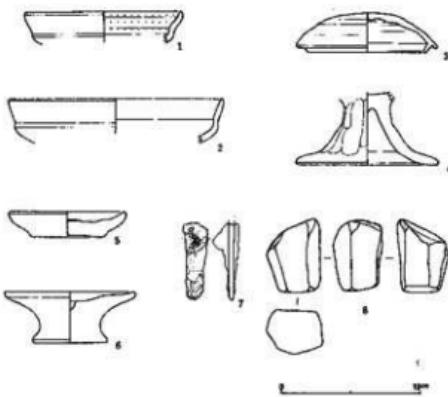


第 66 図 その他の出土遺物 2

蓋で器面にロクロ整形による棱を有する。色調は灰青色を呈している。4は高坏の脚部で脚部は低い。色調は茶褐色を呈し、脚部はヘラケズリが行われている。1,2,4はC区、3はB区から出土した。

(3) 平安時代の遺物 (第67図)

5,6は国分期のものと思われる。5は小形の坏である。胎土に少量の砂粒を含む。色調は茶褐色を呈する。器肉は厚い。器面内面はロクロ水引きによる棱が認められる。6は器台である。胎土に少量の砂粒を含み、色調は茶褐色を呈する。器面内面は、ロクロ水引きによる棱を残している。B区から出土した。



第67図 その他の出土遺物 3

第18表 古墳時代後期・平安時代出土土器

擇出番号	器形	口径 器高	土器の性質	器形の特徴	調整		備考
					外面	内面	
1	坏	11.5 -	胎土 砂粒を含む 色調 内面黒色 外表面褐色 施成 良好	脚部に棱を有する。 内面黒色土器である。	ヨコのヘラミガキ	ヨコのヘラミガキ	
2	坏	15.5 -	胎土 少量の砂粒を含む 色調 茶褐色 施成 良好	脚部に棱を有する。	ヨコのヘラミガキ	ヨコのヘラミガキ	
3	盖	8.3 3.0	胎土 精々 色調 灰青色 施成 良好	口縁は内側に内溝し、 ロクロ整形の棱を有する。	ロクロ整形	ロクロ整形	現在 類似器 ³ / ₄
4	高 坏	-	胎土 少量の砂粒を含む 色調 茶褐色 施成 良好	脚部は低い。	脚部はヘラケズリ	脚部はヘラケズリ	
5	坏	8.5 -	胎土 少量の砂粒を含む 色調 茶褐色 施成 良好	器内は薄い。 底は素切り。	ロクロ水引き	ロクロ水引き	
6	器 台	9.5 3.6	胎土 少量の砂粒を含む 色調 茶褐色 施成 良好	内面はロクロ水引きによる棱を残す。 底部は素切り後ヘラケズリ。	ロクロ水引き	ロクロ水引き	

(4) その他 (第67図)

7は鉄製品で錆びによる腐蝕が激しく原形は不明であるが刀子状のものと思われる。A区の第1号方形周溝墓表土から出土した。8は砥石で砂岩系の石を用いている。磨面は6面からなっている。B区から出土した。

(佐野勝広)

VI 西田遺跡におけるまとめと若干の考察

1. 住居址について

西田遺跡の調査の結果、堅穴住居址 9軒、掘立柱建物址 1軒が検出された。その内訳は、弥生時代後期 1、五領期 7、真間期 2である。弥生時代後期の堅穴住居址は、A区第1号住居址で、出土遺物から後期初頭に位置づけられよう。この時期の堅穴住居址は1軒のみの検出であったが、規模は南北7.1m、東西6.6mと比較的大型の楕円形のプランを呈するようであり、凸堤区画の貯蔵穴ピットを持つ。この期の集落は、A区以北を中心にあるものと推察される。

五領期の堅穴住居址としてはB区第2号・C区第3・4・6・7・8号、D区第9号住居址の7軒が検出された。B区第2号住居址を除き、これ以外のものはいずれも調査範囲の狭さもあり、また方形周溝墓によって切られ、完全に調査できた住居址はほとんどなかった。住居址の形態は、胴張り気味の隅丸方形及び隅丸長方形（C区第3号・4号・7号住）と単に隅丸方形あるいは、隅丸長方形（B区第2号・C区第6号・8号住）に分けられる。各堅穴住居址の主軸はややバラツキが認められる。内部施設としてはB区第2号住居址にみられるように、北西隅に貯蔵穴と思われるピットを有するものもある。地床炉はレンズ状に掘込まれており、C区第3号・4号・8号住居址には枕石が置かれていた。床面にはC区第3号・6号住居址にみられるように扁平な石を置いているものもみうけられた。堅穴住居址の構築方法としては、C区第7号住居址を除き、あらかじめ50~60cmの掘り方を行い、次に地山の砂質がかった土に粘性のある土を混ぜたものを20~30cm掘り方へ埋戻し、平に踏固めた後、その上に砂分を多量に

第19表 西田遺跡住居址一覧表

住居址番号	規 模	プラン	主軸方向	時 期	備 考
A区 1住	東西 南北 m 約 6.6×7.1	楕 圆 形	N-10°-W	弥生後期	
B区 2住	4.0×4.8	隅 丸 長 方 形	N-3°-W	五 領 期	
C区 3住	4.3×4.9	胴張り隅丸長方形	N-36°-W	"	
C区 4住	3.5×?	胴張り隅丸方形	N-25°-E	"	
C区 5住	3.3×1.9	長 方 形	N-26°-W	真 間 期	
C区 6住	?	隅 丸 長 方 形 ?	N-32°-E	五 領 期	
C区 7住	約 2.6×3.2	胴張り隅丸長方形	N-32°-E	"	
C区 8住	? ×3.1	隅 丸 方 形	N-32°-E	"	
C区 9住	?	?	?	"	
掘立柱建物	3.74×2.6	長 方 形	N-23°-E	真 間 期	

混入した粘土を1~5cmほど張って床面を構築している。これは住居址内の水はけを考慮しての構築と考えられるところである。なおC区第7号住居址は掘込みが深く、地山の黄褐色砂層まで達しており、地山の上に直接床を張っていた。

真間期は、C区で堅穴住居址1軒、掘立柱建物址1軒のみの検出であった。横長の長方形プランを呈し、長辺3.3m×短辺1.9mの小堅穴住居址である。柱穴は5個検出され、カマドは、北壁中央やや東寄りに外に突出して構築している。この堅穴住居址の北部に、主軸の方向はやや異なるが、掘立柱建物址が検出されている。いずれにしても2軒のみで集落の様子を推察することはできないが、周辺地域に同時期の住居址が予想される。

これに続く国分期の堅穴住居址は今回の調査では検出されなかったが、D区及びE区でこの時期の土師器片が発見され、また南方の一段下った地域のガソリンスタンドの建設の際には堅穴住居址の一部と土師片が出土している。これら真間期及びこれに続く国分期の集落はD区・E区のある微高地の南斜面を含む地域からさらにその南部の低い地域へ続いているものと考えられる。

2. 五領期集落址の様相

西田遺跡から検出された五領期の遺構としては、堅穴住居址・方形周溝墓及び土壙・溝状遺構がある。堅穴住居址については先に述べたとおりである。方形周溝墓と住居址群との関係で、方形周溝墓はA区とC区に検出され、堅穴住居址は、B区とC区以南に検出されている。B区付近は第2号住居址のみの検出であるが、この周辺地域には極めて多量の五領期の土器片が包含されていた。またB区以南に試掘ビットを掘った際にも擾乱は受けているもののこの時期の土器片が確認され、B区以南地域は相当数の住居址が想定されるところである。C区では5軒、この時期の堅穴住居址が検出されたが、この地域は同じ五領期の住居址群の上に方形周溝墓が構築されている。C区以南のD区では1軒、この時期の堅穴住居址が検出された。E区では遺構には結びつかなかったけれども、多数の五領期の土器片が確認されている。このことからC区以南一帯にも住居址群が想定されるところである。西田遺跡で検出された五領期の堅穴住居址の形態は、先に述べたとおりである。C区の住居址のうち2軒は、胴張り気味の隅丸方形及び隅丸長方形のものがあり、これらは弥生時代後期末に多くみられるようであるが、遺物での時間差は、県内ではこの期の編年が進んでおらず、現時点では不明である。B区から検出された堅穴住居址は、高環の脚部の形態など明らかに新しい要素もみられる。このことは集落の範囲をどうとらえるかで問題があるが、C区一帯及びそれ以南の斜面地帯から、北方のB区以南の微高地頂部へ、集落の拡大あるいは移動していることも考えられる。A区とC区の方形周溝墓群、つまり2つの墓域については、これらの方形周溝墓を設けた母体である農業協同組の集落址としては、それぞれ隣接するB区以南一帯及び、C区以南の堅穴住居址群と考えられることもできるが、むしろ複数以上の墓域が同時に営まれる例もあり、B区以南一帯の集落址

の農業共同体が設けたものと考えたい。

土壤は五領期のものは、方形周溝墓に伴うものは別として、これに何らかの関係があると思われるものがC区で2基検出され、またこれ以外にB区でいずれも路線に半分かかる程度で、2基検出された。このことは 方形周溝墓を含め、墓域としての性格を一層強くしている。

溝状遺構は五領期のものとして5本検出された。B区の第3・4・5号溝状遺構は覆土中に、五領式土器片が認められたものの、その性格については不明である。注目すべきはC区の第1・2号溝状遺構で、特に第1号溝状遺構は、溝中に部分的にピット状の落込みが認められ、その中に摩耗を受けた土師器（五領式土器）の細片がぎっしり詰って出土し、さらに上部の覆土中からも多量の土師器片が出土している。第2号溝状遺構は溝底部に土器片が出土している。これらの2本の溝状遺構は、当初通水のための溝として掘られたとしても、むしろ生活廃棄物である破損土器等の捨場としての用途が強く感じられるところである。このような溝の類例としては静岡県藤井原遺跡^{注1}・同県目黒身遺跡^{注2}・千葉県源訪原遺跡^{注3}があげられる。

3. 方形周溝墓について

昭和39年、八王子市宇津木向原遺跡において方形周溝墓が発見されて以来、各地でその存在が相次いで確認されてきた。山梨県において方形周溝墓の発見は遅く、昭和49年12月勝沼バイパス道路建設工事で伴う田村遺跡^{注4}の緊急調査で、初めてその存在が明らかにされた。しかしながら、それ以前でも土器などから予想はされていた。恐らく方形周溝墓の被葬者の埋葬以降の祭祀儀礼時に供献されたと思われる底部穿孔の壺形土器が、県立石和高校（東八代郡石和町）と三珠町立考古館（西八代郡三珠町）に所蔵されている。前者は焼成前に孔を穿った五領期の壺^{注5}が3点、後者は焼成後孔を穿った弥生後期終末期の壺^{注6}がやはり3点ある。これらの資料から、県内でも方形周溝墓の存在が予想され、その発見を願っていたところであった。田村遺跡（東八代郡一宮町）の方形周溝墓は3分の2ほどの調査ではあったが、弥生時代後期終末（前野町期）のもので、規模は東西14~15mで、方形を呈するものと思われており、台状部は農耕による擾乱を受けているものの、中央部よりやや北寄りの位置に主体部と思われる土壤の一部が確認されている。また台状部西隅及び東溝中にも、土壤と思われるピットがある。周溝の幅は、東溝で70~130cm、南溝で100~160cm、西溝はやや広く150~180cmを測る。周溝覆土中からは、弥生時代後期前野町期の土器の細片が出土している。周溝は未調査の部分もあるが、恐らく全周するものと思われている。また台状部には、セクションから僅かであるが盛土があったことが伺えた。この田村遺跡は、遺跡の東を流れる南川の自然堤防上に営まれた遺跡であり、縄文時代前期から中期・弥生時代後期・五領期・鬼高峰期・国分期の遺跡である。調査地域となった地域は、遺跡の北東部の小範囲であったためもあり、方形周溝墓と同時期と思われる遺構は検出されなかった。また方形周溝墓の北は崖になり、南川となっている。

山梨県内で方形周溝墓の発見された遺跡は、現在のところ、西田遺跡で2箇所である。し

かも5基の検出は幸であった。西田遺跡の方形周溝墓の個々について、前章の「V. 遺構と遺物」で説明してきたが、ここでは5基の方形周溝墓を通してのまとめと若干の考察を述べてみたい。

西田遺跡の5基の方形周溝墓の規模は、1辺約9~13mを測り、溝幅約0.6~3.5mを有し、陸橋部を挟む溝は他の溝よりもくらか広くなっている。方位は、C区の3基はやや同一方向を向いているが、A区の2基は各差がある。陸橋部は、南西隅に有するものはA区第2号方形周溝墓、南東隅に有するものは、A区第1号方形周溝墓、C区第4号方形周溝墓があり、さらには真間期の堅穴住居址との重複ではっきりは残っていないかったが、C区3号方形周溝墓は、南溝の形態からやはり南東隅に陸橋部があったと思われる。

台状部に主体部と思われる土壌が検出できたのは、A区第1号方形周溝墓だけであった。このほか一部分しか調査することはできなかったC区第5号方形周溝墓は別としても、他の方形周溝墓からは主体部土壌は検出されなかった。

従来、方形周溝墓には多少なりとも、構築当時には低平な盛土、すなわち封土があったものと考えられている。また発見されるいくつかの方形周溝墓は主体部土壌が、明瞭でないものがあり、また主体部土壌が検出されたとしても、A区第1号方形周溝墓例のようにごく浅くしか残っておらず、このことは既に云われているように、逆に封土のあったことの裏付けとしても受け取られている。このほか西田遺跡の土壌としては、A区第1号方形周溝墓台状部の西部に農耕のため、上部を搅乱されたやや隅丸長方形を呈した土壌状のピットが検出されたが、西溝よりも深く掘り込まれ、出土遺物もなく、本方形周溝墓に伴うものかは断定することは不可能である。第4号方形周溝墓の南溝底部にピットが確認されたが、その形態から土壌と思われた、溝中に土壌が存在する例としては、県内では先に触れた田村遺跡の方形周溝墓の例がある。また周溝外であるが、C区第3号方形周溝墓西溝外と、C区第4号方形周溝墓東溝外に隣接するそれぞれの方形周溝墓と主軸の方向を同一とした土壌が検出されている。前者は土壌上部が隣接する方形周溝墓の西溝と連っており、方形周溝墓との何らかの係わりを考えさせられるところである。後者は隣接する方形周溝墓の東溝との距離も約2mほどあり、同方形周溝墓と直接

第20表 西田遺跡方形周溝墓一覧表

番号	規模	主軸方向	時期	備考
A区1方形周溝墓	東西 12.6×11.7 m	N-37° E	五領期	主体部土壌あり
A区2方形周溝墓	? × 8.8	N-12° E	"	
C区3方形周溝墓	8.8×9.7	N-24° E	"	
C区4方形周溝墓	? × 12.3	N-20° E	"	
C区5方形周溝墓	?	N-35° E	"	

結びつけることは問題があるかもしれないが、それにしても5基の方形周溝墓の中に、この期の2基の土壙が、隣接する方形周溝墓の溝に近く、主軸を同じくして存在することに注目したい。出土遺物は、A区第1号方形周溝墓の主体部と思われる土壙からは、出土しなかった。溝中からは多少の差はある、五領期の土師器の破片が出土している。その出土状況は、A区第2号方形周溝墓、C区第5号方形周溝墓は極めて少量の破片が浮いて出土している。C区第3号方形周溝墓では、溝中に浮いた破片のほか、北東隅の溝底に瓊形土器の胴下部が立った状態で出土した。A区第1号方形周溝墓とC区第4号方形周溝墓は、陸橋部を挟む南溝と東溝に特に多量の土器が出土し、その多くは溝中に浮いた状態で出土した。A区第1号方形周溝墓では、完形土器及び復元可能な土器が、南溝ではやや規則的に配置したとも考えられ、東溝では不規則に散乱していた。溝中から出土する土器は、台状部より転がったものと見られる状態で出土するものもあるようであるが、A区第1号方形周溝墓の溝中出土の土器の場合、東溝中の甌は、石と石との間に口縁部を上に置かれており、また壺P4以下の土層セクションをみると限り、溝中に直接、供献土器として置かれたものと思われた。また東溝横土中では土器の包含されている層は厚い。このことは供献される期間の時間差を感じさせることである。土器の組成としては壺・甌・盤・高杯・器台があり、これらの中には仮器としての底部穿孔土器はみられなかった。C区第4号方形周溝墓では、溝中から出土した土器はすべて復元不可能な破片であった。これらの土器片は一部を除いては、先に述べた様にすべて溝中に浮いた状態で出土している。

これらのことから溝中から出土する土器については、土器の破片が特に多量に出土する場合など生活廃棄物の廃棄場所とも考えられるが、方形周溝墓の陸橋部を挟む溝に特に多く出土することなど不自然な点もあり、一般に云われているように、供献土器と考えられるところである。また遺物が多く出土する溝は、C区第4号方形周溝墓の東溝及び南溝のように広く掘られている。西田遺跡のA区第1号方形周溝墓及びC区第4号方形周溝墓でみると限り、溝中よりの出土状態をみると、数点ではあるが溝中底部からも出土すると同時に、溝中より浮いた状態で土器が多量に出土する事実は、ある期間を経て溝が埋った時点で供献されたものであろう。このことは被葬者を葬った時供献された土器は、溝中底部に存在する土器であり、浮いた状態で出土する土器は、ある期間を経た後、追供養として供献された土器ではないだろうかと考えるのである。溝中のある程度埋った所に土器が集中して散乱しているのは、封土の高さとの関係から溝がある程度埋ってしまうと、それ以上埋まることはこれまでより時間がかかる。この時点以後追供養を何回か行っていることが考えられる。これはたとえば、現在の1周忌とか10周忌の供養のようなものではないだろうか。この時点に完形、破片は問わず、土器が供献されたものと考えたいのである。溝中から出土する土器が破片で出土し、しかも復元が不可能であることは、一般にこれらの土器が他の場所で破壊され、持ち運ばれた感が強く、他の場所での何んらかの儀式が行われたとされており、西田遺跡の方形周溝墓の場合も、溝中出土の土器量の多少の差はある、A区第1号方形周溝墓の一部の土器を除いては、破片でありしかも欠

損し、復元不可能であり、他の場所より持ち運ばれ供獻されたものと思われるところである。これらの土器の組成については、A区第1号方形周溝墓では、先に述べたが壺・堆・器台・高杯のはか甕・瓶のような、日常什器的な器種も含まれていた。

- 註1 濑川裕市郎・鈴木裕篤・昭和50年5月『沼津市文化財調査報告第7集、藤井原遺跡発掘調査概報』沼津市教育委員会
- 註2 小野真一 昭和45年9月、『日黒身一弥生～古墳時代集落址の調査』へ沼津考古学研究所
- 註3 岩崎卓也・関根孝夫他、昭和49年8月『松戸市文化財調査報告第5集、兼訪原遺跡』松戸市教育委員会
- 註4 大場磐雄他、昭和48年9月、『宇津木遺跡とその周辺一方形周溝墓初発見の遺跡』中央高速道八王子地区遺跡調査団
- 註5 山本寿々雄他、昭和51年3月、『昭和49年度勝沼バイパス道路建設に伴う方形周溝墓等の調査』山梨県教育委員会
- 註6 このうちの1つは坂本美夫(旧姓菊島)、山崎金夫『甲斐考古10の3…東八代郡石和高校、一宮町公民館の古式土師器』1973年、山梨県考古学会に紹介されている。
- 註7 小出義治、昭和42年9月『日本の考古学V、古墳時代(下)祭祀』河出書房

4. 遺物について

(1) 五領式土器について

本遺跡から出土した土器群のうち主体となるものは、所謂古式土師器といわれている一群の土器である。五領式土器は杉原莊介・岡田淳子氏により和泉式土器以前のものとして、昭和30年に紹介されて以来、先学諸氏により研究されてきているが、弥生式土器から五領式土器の分別並びに五領式土器の細分について幾つかの考え方があり、必ずしも明確化されていないのが現状のようである。県内においても過去この期の遺跡として、京原遺跡^{注1}、柳坪遺跡^{注2}、頭無遺跡^{注3}など調査されているが、部分的であり京原遺跡を除き良好な出土遺物に恵まれない状況であって、この時期の様相はあまり明らかにされたとは言えず、西田遺跡のこの期の出土遺物は、これから県内において、さらにこの時期の様相を明らかにする一つの好資料と思われる。

さて本西田遺跡の所謂古式土師器について、器種ごとに分類を行い、一応その位置づけを試みてみたい。

壺形土器

A類 複合口縁で口縁部先端を折返す。小型のもの第54-1図1と比較的大型のもの第40-1図3がある。

B類 口縁部はやや内湾ぎみに立上る。頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部は球形を呈し、胴部最大幅は下位にある。器面は丁寧にヘラミガキが施される。第49図1。

C類 口縁部が有段口縁を呈し、胴部は球形を呈するもの。

C1 口縁部には3本1組の棒状浮文を有する。器面は丁寧にヘラミガキが施される。第54-1図6。

C2 口縁部の中段で下位の器体との接合部が「く」の字状に屈曲している。第55図1。

C3 頸部は極端に屈曲し、口縁部は途中で湾曲するため稜をなす。第13図6。

D類 口縁部は垂直に近い状態で立上りながらやや外反し、丁寧にヘラミガキが施されている。第40-1図1・2、第54-1図2・3。

E類 頸部は直立し口縁部先端近くで急激に外反する。口唇部に刻み目を有するもの第49図3もある。器面は内外面とも刷毛目整形痕を部分的に残している。第54-1図4・5。

F類 頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇がやや内湾するもの第40-1図5と、口縁部の途中に、輪積みの部分が有段とは言えないか縫が認められるもの第40-1図6・7がある。胴部はほぼ球形を呈し丁寧にヘラミガキまたはヘラナデが施されている。

G類 頸部は「く」の字状に屈曲し口縁部は外反する。胴部は張るものと思われ、器面全体に刷毛目整形痕を残している。第40-1図8。

H類 口縁部は短く立上り、肩部以下は急激に張る。第13図5。

I類 広口で小型のもの。あるいは甕、鉢などに区分すべきかも知れない。

I1 口縁部は太く、口縁部先端はやや外反する。第13図3、第40-1図4。

I2 口縁部は短く、頸部は「く」の字状に屈曲する。第13図2・4。

壺形土器

A類 単口縁を有し頸部が「く」の字状に屈曲し、胴部最大幅は中位にある台付の壺形土器。第54-1図18。

B類 所謂、S字口縁を有し無花果形の胴部を呈する台付の壺形土器。第13図10-12、第40-2図12・13、第49図13-16、第54-1図19-23。

C類 口縁部は外反し、口唇に刷毛状工具先端による刻み目を有する。第40-1図11、第45図3、

D類 口縁部は外反し、先端付近は折返す。第50図1、あるいはその痕跡を残している。第54-1図15・16。

E類 口縁部は外反し、頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部はやや張り最大幅は上位にあるようである。平底を呈する。第40-2図14・15。

F類 口縁部は外反し、頸部は「く」の字状に屈曲する。E類よりも口縁部が短い。胴部はやや張るようで最大幅は上位にある。平底を呈する。第40-1図9。

G類 頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はやや内湾ぎみに開く。胴部はやや張り、最大幅は上位にあるようである。平底を呈する。第54-2図26・27。

H類 脇部はやや張り、頸部はゆるやかに外反し、口縁部は折返し口縁を有すると思われるもの。第18図5・第50図1。

鉢形土器

- A類 比較的小型のもので器面に刷毛目整形痕が部分的に残る。第40-2図16。
- B類 片口付の鉢形土器で器面は内外面ともに細いヘラミガキが施されている。丹採されている。第18図8。
- C類 大形の鉢形を呈する。完形に恵まれないので定かでないが、あるいは無かも知れない。口縁部は粘土の貼付けにより肥厚している。全体に粗雑な作りである。第55図10。

鉢形土器

鉢形を呈し器面は内外面ともヘラケズリの痕が顕著に認められる。全体に粗雑な作りのもの第40-2図17と、やや丁寧に仕上げているもの第45図4・第55図11がある。

壺形土器

- A類 口縁部は小さくやや外反し、底部は凹底である。口縁部は内外面とも刷毛目整形痕を残す。胴部はヘラミガキが施されている。第40-2図18。
- B類 口縁部は短く「く」の字状に屈曲し、胴部外面はヘラケズリが施され、内面はヘラミガキが施されている。焼成は比較的良好である。第18図6、第55図8・9。

高坏形土器

- A類 坏部は比較的小さく壺形を呈し、脚部は「ハ」の字状に開く。第40-2図21。
- B類 坏部は浅く大きく開き、脚部は「ハ」の字状に開く。丁寧にヘラミガキが施されている。第49図21。
- C類 器形はB類とはほぼ同じであり、坏部は浅く大きく開き、脚部は「ハ」の字状に開くが、器内はやや厚く粗製でヘラミガキが施されているが、部分的に刷毛目整形痕を残している。第49図22・23。
- D類 坏部は大きく湾曲しながら開き、脚部はやや大きく開く。第54-2図33。
- E類 坏部は大きく開くが、坏部と脚部との接合部は嵌込式のためか坏部底部外面に稜を有する。第54-2図31。
- F類 坏部は有段をもって大きく湾曲しながら開き、脚部は柱状で胴部に至り急激に開く。調整は脚部外面はヘラケズリないしはヘラミガキが施されている。第13図14-16、第40-2図22。

壺形土器

小型で口縁は大きく開き、胴部は小さく底部は凹底を呈する。器面は内外面ともに細いヘラミガキが施されている。第13図17・18、第40-2図22。

器台形土器

- A類 器受部は小さく壺形を呈し、脚部は低い。3孔を有する。調整は丁寧にヘラミガキが施され、丹彩されている。第40-2図23。
- B類 器受部は小さく壺形を呈し、脚部はやや高く孔を有さない。調整は刷毛整形後に指頭によるナデを行っている。丹彩されている。第40-2図24、第54-2図38。

C類 器受部は浅く小さい。脚部もあまり開かない。X字状である。脚部に3孔または4孔を有する。丹彩されている。第54-2図36・37。

D類 盔形の器受部を呈し、器受部の口唇が小さく立上がり、器受部底部と脚部の間には貫通孔を有する。器受部の外面下部はヘラケズリが施され、内面に暗文状にヘラミガキが施されているものもある。第13図20、第49図25、第54-2図34。

E類 器受部は浅くやや大きく開く。器受部の外面はヘラケズリ、内面は暗文状にヘラミガキが施されている。第13図19。

手摺形土器

A類 口縁部は短くやや外反し、脚部は張らない。第54-2図28。

B類 口縁部を欠くが、脚部はやや張るもの、第54-2図29・30。

以上のとおり分類できる。これらの土器群はどのように位置づけられるかであるが、從来弥生式土器から土師式土器への区分について混迷とし且つ複雑な状況を示している。これは土師式土器の概念である「全國的齊一性をもつ土器」とする「齊一性」が具体的に何をもって規定するかが研究者によって若干づつではあるが、まちまちの考え方があり、その要因の一つともなっている。^{註5}

五領式土器は大きく前半・後半の2時期に分けられている。金井塙良一氏は前半のI期は「從来の弥生時代の伝統を多分に繼承しながらも、外來の新しい要素が認められる」時期とされ、後半のII期は「從来の弥生時代からの土器づくりを止揚して、土器の齊一化がなされる」時期としている。

先に分類した土器のうち、五領式土器に伴う積極的なものとしては、次のものがある。壺形土器では、C2類の有段口縁をなし、口縁部中段で下位の器体との接合部が「く」の字状に屈曲するもの。またC3類のように口縁部が稜をもつて湾曲するもの。調整ではヘラミガキのほかに第40-1図5・7のようにヘラナデも多くみられる。また第40-1図5のように胴下部と底部との境部は、調整段階で、ヘラ削りにより底部を一段と高く仕上げており、さらに底部の周囲には、粘土を貼付けることによって、中央部は凹状を呈しているもの。このような類例は、千葉県の東寺山石神遺跡にもみられる。^{註6} B類の口縁部は、やや内湾ぎみに立上り、頭部は「く」の字状に屈曲し、器面は丁寧にヘラミガキが施されているもの。この種のものは東海地方の欠山遺跡に類例がみられる。^{註7} 麗形土器では、B類のS字状口縁を呈し、無花果形の脚部を呈するもの。口縁部の形態は、大參義一氏の分類でb類がほとんどであるが、まれに第49図16のように変化したものもある。高环型土器では、C類のごとく粗製のものと、F類の脚部が柱状化し、裾部に至り急激に開き、和泉期への移行前を思わせられるもの。壺形土器は本遺跡からの出土は少ない。小形の壺で第13図17・18、第40-2図19の3点が出土しているがこれらのもの、器台形土器ではC類はX字状を呈し、D類は皿形の器受部を呈し、器受部の口唇が小さく立上がるものなどがある。^{註8}

これらは土師式土器の所以たる新しい要素と受けとることができる。これとは別に從来の弥生式土器の伝統を継承したものとしては、壺形土器では、A類の所謂複合口縁である折返し口縁を有するものと、C1類の棒状浮文を有するもの、さらにE類の口唇部に刻み目を有するものなどがある。壺形土器でも口唇部に刻み目を有するC類、あるいは口縁部に折返しを有するD類などがあげられる。遺構ごとではこれらの点を考慮に入れるとB区第2号住居址では、五領期でも、先にあげた弥生式土器の伝統を継承した土器は含まれておらず、高坏の脚部が柱状化し和泉期に近い様相も示し、また器台は器受部が皿状を呈し口唇部が小さく立上がるものが含まれていることなどを考えると五領II式の範疇に含められ、次に遺物に恵まれなかったC区第5号方形周溝墓を除く4基の方形周溝墓及びC区第1号溝状遺構は、五領期でも先にあげた弥生式土器の伝統的要素を継承した土器が含まれており、五領I式の時期に含めるのが妥当であろう。

県内で既に調査されたこの五領期の遺跡としては、先に挙げたところである、出土遺物を見てみると、京原遺跡では4軒の堅穴住居址が調査され、S字状口縁壺形土器をはじめ本西田遺跡の高環形土器D類及び器台形土器D類としたものの類似品もみられ、良好な資料に恵まれている。柳坪遺跡と頭無遺跡では、1軒または2軒の堅穴住居址の調査であったが、県北部での、この時期の遺跡の発見であり、注目されているところである。櫛描波状文をもつ壺、S字状口縁壺形土器などが出土している。このほか遺物だけの報告例としては、山本寿々雄氏により土師式土器集成に報告された、三珠町大塚及び中道町西原などの遺跡、甲府工業高校々庭遺跡、甲府市伊勢町地内遺跡、北巨摩郡高根町宮地遺跡がある。さらには県内各地の資料館並びに学校に保管されている遺物の中には、S字状口縁壺形土器の資料が多く目につき、既に知られているように大參義一氏は、「S字状口縁壺形土器は、東海地方を中心に中央山岳地方、関東地方からさらには東北地方までに分布し、一部は北陸地方、近畿地方にも見られる」とされているところであるが、いまさらながら県内でも、S字状口縁壺形土器が、多く普及していたことがうかがえる。

(山崎金夫)

註1 杉原莊介、中山淳子、昭和30年『土師器』日本考古学講座5。

註2 野沢昌康、萩原三男ほか 昭和49年3月『京原』山梨県教育委員会、山梨県遺跡調査団。

註3 末木建ほか、昭和50年3月、『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂、明野、韭崎地内—』山梨県教育委員会、日本道路公團東京第二建設局。

註4 註3と同じ。

註5 金井塙良一他 1971年6月『台地研究No19、—特集シンポジウム五領式土器について』台地研究会。

註6 中村恵次、沼沢豊他 昭和52年3月『東寺山石神遺跡』財团法人、千葉県文化財センター。

- 註7 小林行雄、杉原莊介編「弥生式土器集成I」日本考古学協会。
- 註8 大參義一 昭和42年「S字状口縁土器考」いちのみや考古No13。
- 註9 杉原莊介、大塚初重編 昭和46年12月「土師式土器集成本編I」株東京堂出版。
- 註10 山本寿々雄 昭和43年8月「山梨県の考古学」吉川弘文館。
- 註11 上野晴朗、「山梨県甲府市伊勢町遺跡調査概報」甲斐史学第7号。
- 註12 註10に同じ。
- 註13 註8に同じ。

(2) 真間式土器について

C区5号住居址から出土した土器は土師器の甕5個体（うち底部2個体）、环4個体が出土したが、須恵器の伴出は確認されなかった。

甕は最大径が口縁部にある長甕（第25図6），胴部に丸味を持ち、かつ最大径が胴部にある甕（同7），小型甕（同4）であり、外面整形は縱方向の簾削、内面整形は横方向の櫛歯状工具による削り（長甕、小型甕），指頭による搔上げ（甕）を基準としている。底は木の葉底と簾整形のものとの見られる。なお3の底部は長甕のものと思われる。

环は胴部に退化した後をもつA類（同1）と口径、底径とともに大きなB類（同2）との2種類が見られる。このほか細片のため図示しなかったが、後者のB類に入ると思われる大きな口径（14.6cmと16.5cm）の环の口縁部破片が2個出土している。B類の底は糸切り後その周縁を簾削整形したものであるが、糸切が静止してなされたか、回転してなされたか明確にできない。

以上5号住居址出土の土器の組合せは、長甕、甕、小型甕、A・B類环であるが、須恵器の伴出が確認されず、その編年的位置付けはもっぱら土師器に負うところとなる。土師器のうち特に長甕とB類环とから晩期I式土器（南関東地方の真間式土器）の範疇に入るものと考えて大過ないであろう。

県内においてこの時期の長甕が確認されたのは僅かであるが、特に勝沼町、東畑遺跡出土の長甕に類似点が求められる。東畑遺跡からは長甕の外に平底であるが、底部が丸味をもつ环が出土している。この环はその後の発掘調査に於いて勝沼バイパス坑No313号地点第4号住居址からも発見され、一型式として把握されるところとなっている。^{註1}

胴部に丸味を持つ甕は、当遺跡が2例目であり、長甕とセットの器形と考えられる。

B類环は勝沼バイパス坑No282地点第9号住居址、御坂町八千歳、宮の裏遺跡等から出土が確認されており、大きな口径、底径で、底部が角ばっているのを特徴とするものである。^{註2}

A類环は退化した後をもつものであるが、その類例は勝沼バイパス坑No282地点第11号住居址出土品に求められる。11号住居においてはA類环のほか、底部が角ばるB類杯に近いものと、半球形状の环が同時に出土している。^{註3}

以上のように5号住居址出土品は、長甕の形態からは、勝沼町・東畑遺跡出土品に近いが、

坏からは、半球形状の坏を伴出しない事実によって勝沼バイパス坑No.282地点第11号住居址より
時期の下降があろう。また、同地点第9号住居址からは、種の退化したA類杯が確認されてい
ない事実からは、第9号住居址より先向する時期かとも考えられる。11号住居址は土師器に須
恵器の坏蓋等が伴出しており、須恵器が陶色MT21に近いものと見られることから、晩期I
式土器の範疇に入れた前述の見解が妥当性を持つ。なお11号住居址出土の土器は、東京都・
中田遺跡の真間I・II類の中間的様相を示している。すなはち、中田遺跡の真間I類には底部が
角ばるB類坏は伴出しておらず、一方真間II類には、B類坏はあるものの逆に半球形状の坏が
見られなくなっているといった具合である。

(坂本美夫)

- 註1 抽稿「山梨県勝沼町・東畑遺跡出土の土師器」『甲斐考古』10の3
- 註2 山梨県教育委員会、「勝沼バイパス道路建設に伴う古代甲斐国の考古学調査」
- 註3 山梨県教育委員会「勝沼バイパス道路建設に伴う古代甲斐国の考古学調査」(統編)
- 註4 抽稿「晩期I周辺の土師器資料(一)」『甲斐考古』13の2。
- 註5 註3と同じ。
- 註6 平安考古考古学研究会「陶邑」。
- 註7 服部敬史他「土師器の編年に関する試論」『八王寺・中田遺跡』

VII おわりに

西田遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての遺跡であるが、なかでも古墳時代前期(五領
期)を主体とした遺跡で、規模的にみても大きな遺跡と考えられる。これまでこの期の遺跡と
しては、甲府盆地の東南端に横たわる曾根丘陵上、甲府盆地東部の金川、浅川の扇状地上、甲
府市街地周辺などに知られていたが、近年になり中央自動車道の緊急発掘調査で県北部の北巨
摩地域に発見され、さらに甲府盆地の東端の塩山市に今回の西田遺跡が発見された。このこと
は、山梨県の占墳時代前期の遺跡の分布を見るうえで重要な意味があろうかと思う。本西田遺
跡の調査結果は、既に述べてきたとおりであるが、住居址群と方形周溝墓群である墓域との関
係など、県内ではこれまでこの時期の集落の様相を解明する機会に恵れなかったが、これらを
解明するといった意味では絶好の遺跡であったと思われる。しかし、調査期間などの制約を受け、
充分満足のいく調査結果とは言えなかった。幸か不幸か今回調査したB区の西部一帯は、
塩山警察署の敷地に予定され、昭和53年度に緊急発掘調査が予定されており、その調査成果を
期待したい。

(山崎金夫)

図 版

図版 1



(1) 西田遺跡遠景



(2) 西田遺跡A・B区

図版 2



(1) 西田遺跡 C 区



(2) 西田遺跡 D 区・E 区



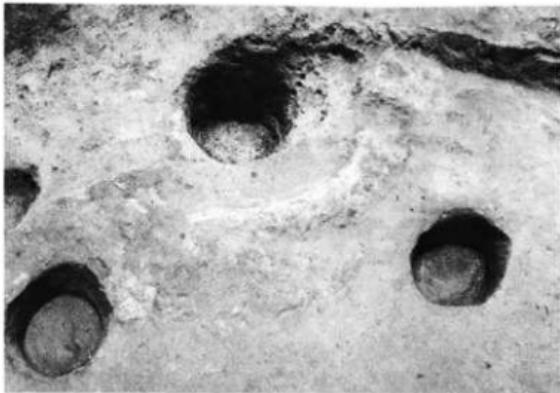
(1) 西田道路 E 区



(2) A 区 第 1 号 住 居 址

図版 4

(1) A区第1号住居址
貯藏穴と柱穴



(2) A区第1号住居址
貯藏穴から弦生式土器出土状況



(3) A区第1号住居址
ピット





(1) B区第2号住居址（南方より）



(2) B区第2号住居址（北方より）

图版 6

(1) B 区第 2 号住居址
土师器出土状况



(2) B 区第 2 号住居址
土师器出土状况

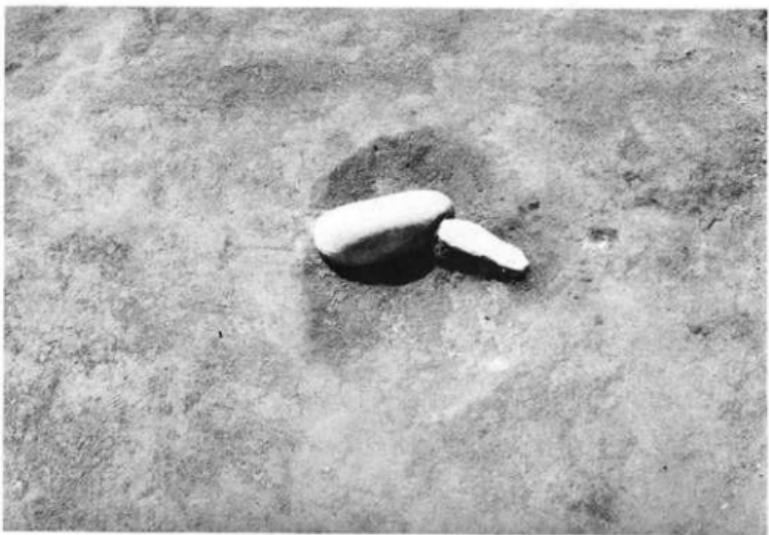


(3) B 区第 2 号住居址
土师器出土状况





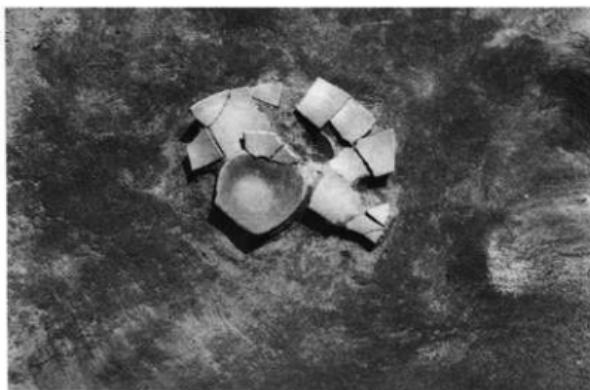
(1) C 区 第 3 号 住 居 址



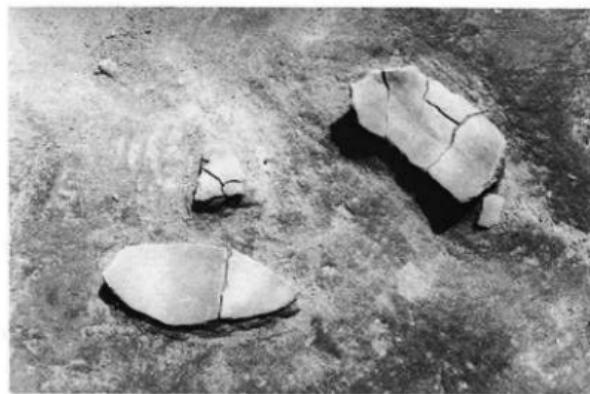
(2) C 区第 3 号住居址地床炉

图版 8

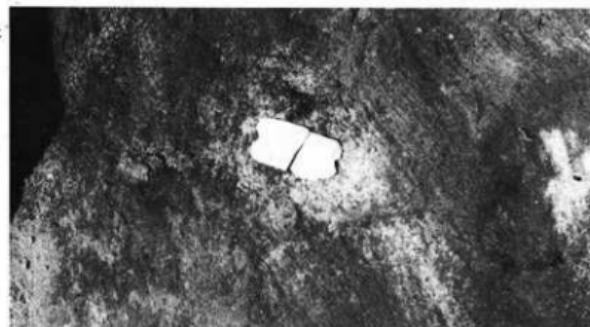
(1) C区第3号住居址
土师器出土状况



(2) C区第3号住居址
土师器出土状况



(3) C区第3号住居址
石包丁出土状况



図版 9



(1) C 区 第 4 号 住居 址



(2) C 区 第 4 号 住居 址 地 床 灰

図版10



(1) C 区 第 5 号 住 居 址



(2) C 区第 5 号住居址カマドセクション

図版11

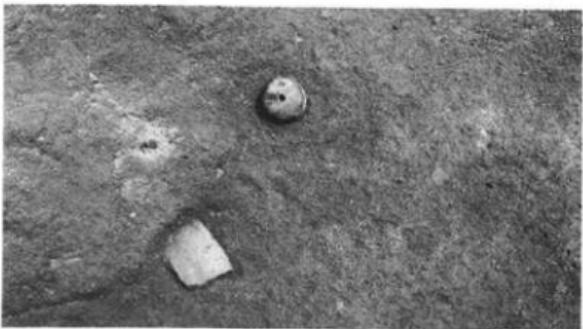
(1) C区第5号住居址
土師器出土状況



(2) C区第5号住居址
柱穴からの土師器出
土状況



(3) C区第5号住居址
土製紡錘車出土状況



図版12



(1) C区第5号住居址カマ下内支柱石



(2) C区第6号住居址

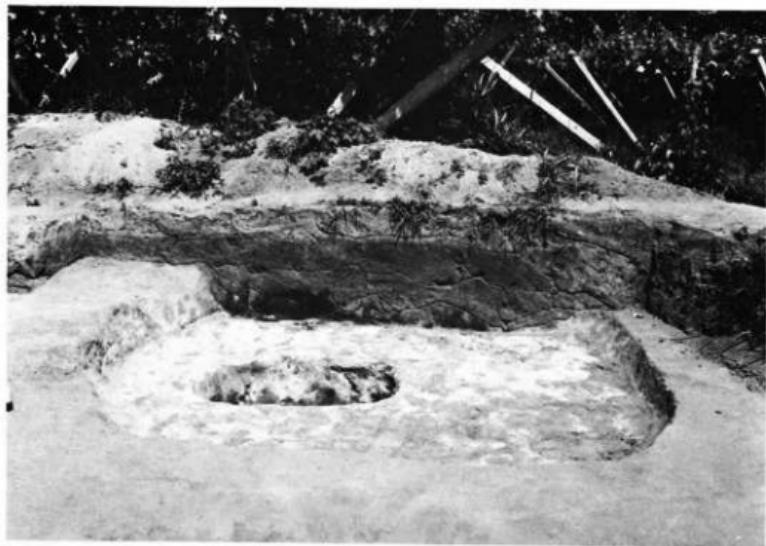


(1) C区第6号住居址土器器出土状況



(2) C区第6号住居址張床状況（第7号住居内上部）

图版14



(1) C 区 第 7 号 住 居 址



(2) C 区 第 8 号 住 居 址



(1) C 区 第 8 号 住 居 址 地 床 炉



(2) D 区 第 9 号 住 居 址

图版16



(1) C 区 堀 立 柱 建 物 址



(2) A 区 第 1 号 方 形 周 溝 墓 (南方から)



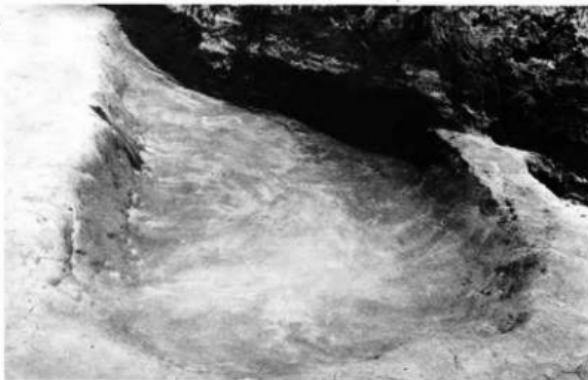
(1) A区第1号方形周溝墓（北方から）



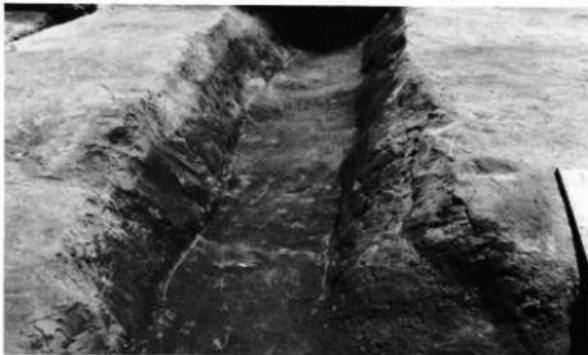
(2) A区第1号方形周溝墓主体部の土壤落込み状況

圖版18

(1) A区第1号方形周
溝墓東溝



(2) A区第1号方形周
溝墓北溝



(3) A区第1号方形周
溝墓南溝



(1) A区第1号方形周溝墓東溝土師器出土状況



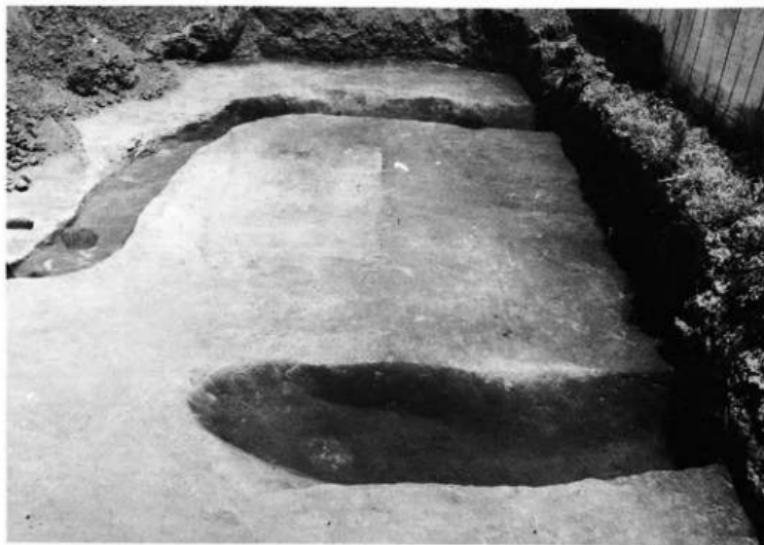
(2) A区第1号方形周溝墓東溝土師器出土状況



(3) A区第1号方形周溝墓南溝コ一ナ一土師器出土状況



図版20

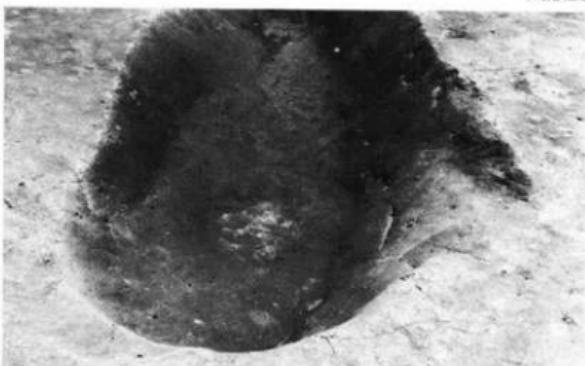


(1) A区第2号方形周溝墓（南方から）



(2) A区第2号方形周溝墓（西方から）

(1) A区第2号方形周
溝墓南溝



(2) A区第2号方形周
溝墓北溝



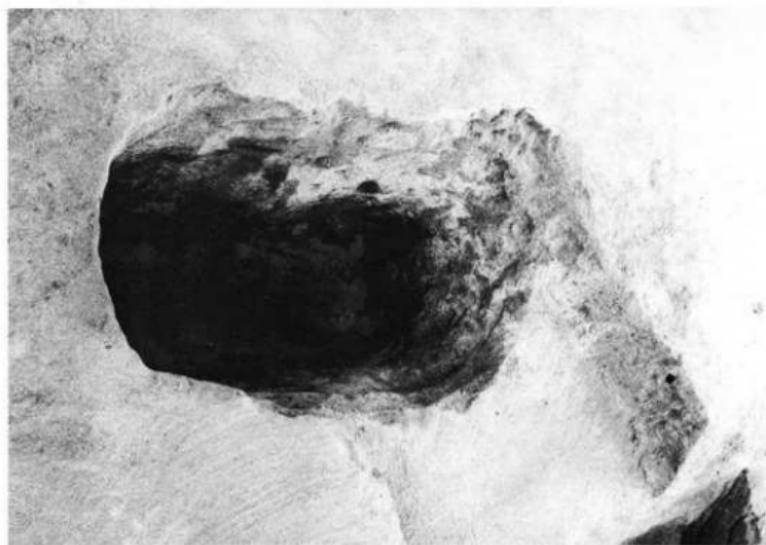
(3) A区第2号方形周
溝墓西溝



図版22



(1) C 区 第 3 号 方 形 周 溝 墓



(2) C 区 第 3 号 方 形 周 溝 墓 西 滴 外 土 壤

(1) C区第3号方形周溝墓西溝及び土壤



(2) C区第3号方形周溝墓セクション



(3) C区第3号方形周溝墓及び第4号方形周溝墓

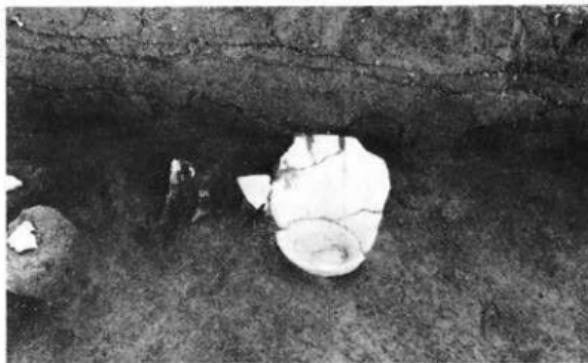


図版24

(1) C区第3号方形周
溝墓西溝セクション



(2) C区第3号方形周
溝墓北溝土師器出土
状況



(3) C区第3号方形周
溝墓西溝土師器出土
状況





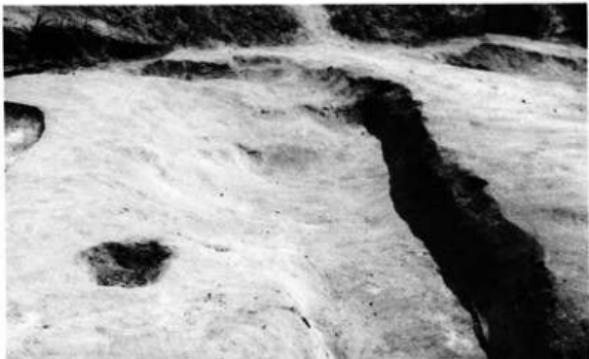
(1) C 区第4号方形周溝墓



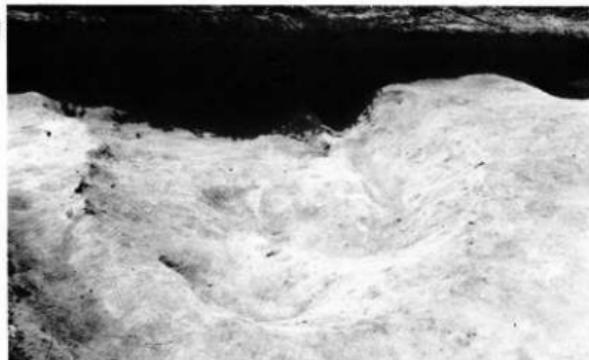
(1) C区第4号方形周溝墓東溝外土壤

図版26

(1) C区第4号方形周
溝基東溝



(2) C区第4号方形周
溝基南溝



(3) C区第4号方形周
溝基東溝外土壤セク
ション





(1) C区第4号方形周溝墓南溝内土師器出土状况



(2) C区5号方形周溝墓

図版28



(1) A区第1・第2号方形周溝墓



(2) C区第3・第4・第5号方形周溝墓



(1) C区第1号溝状遺構



(2) C区第1号溝状遺構出土狀況

图版30

(1) C区第1号溝状遺
構土師器出土状況



(2) C区第1号溝状遺
構土師器出土状況



(3) C区第1号溝状遺
構土師器出土状況





(1) C区第2号溝状遺構と土師器出土状況



(2) B区第3号溝状遺構

圖版32



(1) A区第6号溝状遺構



(2) B区第7号溝状遺構



(1) A・B区旧小河川砂層堆積地（その1）



(2) B区旧河川砂層堆積地（その2）

图版34



(1) C 区 第 1 号 土 壤



(2) C 区 第 2 号 土 壤



4



6

图版36



B 区 第 2 号 住 居 址 出 土 遗 物



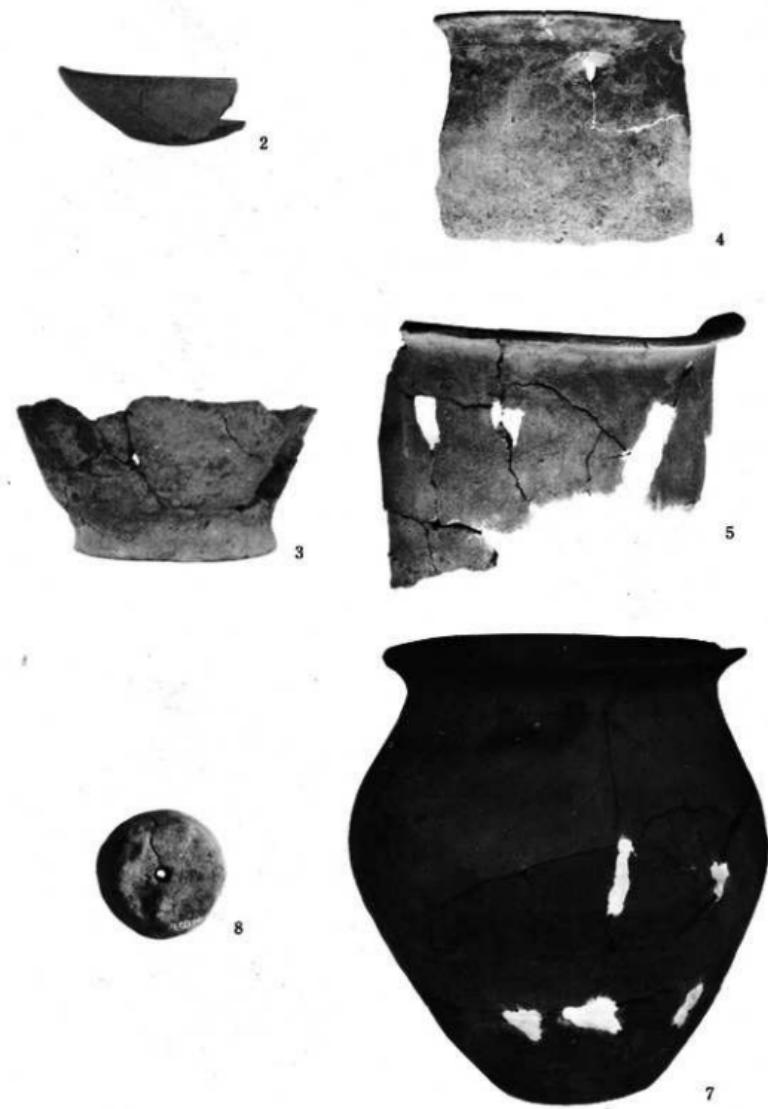
8



9

C 区 第 3 号 住 居 址 出 土 遗 物

图版38



C区第5号居住址出土遗物



A区第1号方形周溝墓出土遗物

図版40



8



17



18



20



23



24

A区第1号方形周溝墓出土遺物



2

(1) C区第3号方形周溝墓出土遺物

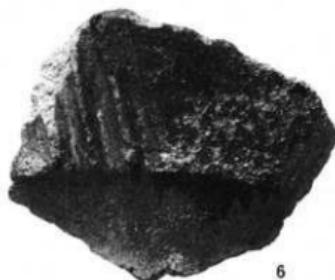


27

(2) C区第4号方形周溝墓出土遺物



28



6



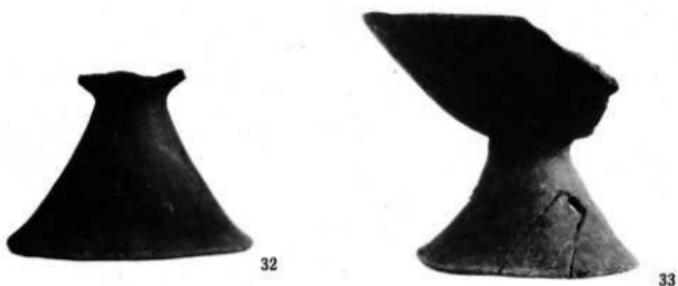
18

(3) C区第1号溝状遺構出土遺物



22

图版42



(1) C区第1号溝状遺構出土遺物



(2) C区第1号土壤出土遺物



(1) その他出土遺物（縄文式土器）



3



8



6

(2) その他出土遺物（土師器等）

図版44



その他の出土遺物（石器）

昭和53年度

山梨県塩山市

一 西 田 遺 跡 一

第 1 次 発 挖 調 査 報 告 書

印刷 昭和53年3月25日

発行 昭和53年3月31日

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 株式会社 少国民社

